

序

著者の Johanna Spyri と、ふ婦人は西曆一八二九年六月十二日瑞西のツーリツヒに生れ、母は詩人として知られた方でした。一八八四年、法律家であつた夫の SPYRI 氏が歿した際に記念の小傳を出版されたのが始めで、それ以來主として少年少女の爲めに雜誌に筆を執られ。其の種のものでは當時其の右に出るものが無かつたさうであります。

『風』原名 Heidi も傑作の一つで、文學としては多少の批評もありませうが、全體が眞面目で、新鮮で、無邪氣で、子供らしい軽い悲哀と、單純な信仰とが、極めて自然に描かれて居て、少年少女の讀み物としては得難い書であります。

Dole といふ方が英語に譯されたのを更に私の拙筆で邦語に譯述したのであります。文章が長たらしい嫌がありましたので處々省略しましたが、中に出て来る人物の自然的な叙述は出来るだけ其の儘を現はす様に力めました。

大正十二年五月末

譯者 記す

楓物語 目次

前編

第一章

山部やまべの小屋こや……

一

第二章

祖父おぢいさんの膝下ひざもと……

二四

第三章

緑みどりの牧場まきば……

三九

第四章

お婆さんおばあさん……

六六

第五章

二人ふたりの訪問者ほうもんしや……

九一

第六章

全然まるでかは變つた生活せいかくわつ……

一一二

第七章

古井の迷惑ふるゐのめいわくがは類

一二八

第八章

大騒ぎの原因おほさわぎのゐと

一五六

第九章

主人の歸宅しゆじんきたく

一七五

第十章

御母堂様ごはだうさま

一八四

第十一章

楓の物思かへてものおもひ

一九九

第十二章

本間邸に怪しほんまていあやの事こと

二〇七

第十三章

再び山家ふたたびやまがへ

二二四

第十四章

教會の鐘けうくわいかねの音ね

二四九

後編

第一章

旅の仕度たびのしだく

二六九

第二章

山へ御客様やまへおきやくさま

二八〇

第三章

慰めを得てなぐさえ

二九三

第四章

村で冬をむらふゆ

三〇六

第五章

長い冬ながふゆ

三二二

第六章

手紙で前觸れてがみまへふ

三三五

第七章

暖やかな山小屋にぎやかなやまこや

三五七

目

次

終

第

八

章

これふしぎ
之は不思議

三七〇

第

九

章

またあひ
又遇ふ日まで

三八九

かへて
風の
物がたり

前編

第一章 山耶の小屋

スウイス^{くに}の國マイエルン^フと云へば、^{ふる}舊くからの街で一^{まち}寸良^{ちよつとよ}い處であるが、^こ此の街を離れて^{まち}緑^{はな}深い耕地に^{ふか}沿^{かうち}ふて^そ徑路^{けいろ}を^{たど}ると、^{れんさん}やがて連山^{すその}の裾野へ^で出る。この邊^{へん}からもと來^きし平野^{へいや}を^{かへり}顧みると、^{いちまうてんかい}一望^{まさ}展^{さうだいゆう}開^{くわうけい}、^{さち}直^{すい}に壯大^{つひ}雄美^{さんみやく}の光景である、更に進めば、終にアルプス^{さんみやく}山脈に達するのである。この邊^{へん}を^{あゆ}歩^{もの}む者^{さうだいゆう}は、^{さくしよく}草原^{しゆしげ}地の^{かせ}特色^{かん}たる一種^{つね}刺激^{しゆしげ}性の^か香^{かん}りを感^{かん}ずるのが常である。

頃しも六月の晴れ渡つた或る朝のこと、一見此の邊の山家育らしい丈の高い頑丈な若い婦人

ヨハンナ・スバイリ原著
山本憲美譯述

が、眞赤な林檎を薄い澁紙で包んだかとても云ひ度い様な、日に焼けた、丈夫相な女の子の手を引いて、此の細道を山の方へと登つて行くのであつた。照り付く様な日盛りだと云ふに、この女の兒は、丸で寒中でもある様な身姿をして居る。年は七つ位だと思はれるがその格好と云つたら無い。衣服の重着をして、頸に大きな赤いハンケチを巻き付け、太い紙の付いた、足の全然見えない様な、重さうな靴を穿いて居る。山を上ると云ふのに、之れは又猛烈な身支度である。

物の一時間も經つと二人はアールム山の中腹に在る、小さい村に辿り着いた。何處の家でも、二人を見知つてゐると見えて聲を懸けた。さては此處がこの婦人の住家か、と思ふと何處へも足を止める様子もなく、皆なに挨拶だけして、すん／＼通り過ぎて行つた。やがて、村の一番端しの家の前まで來ると中から、

『伊達さん！一寸御待ちよ、山へ行くなら一緒に行くからさ。』

と呼び掛けられて、婦人は立止まつた。女の兒は、忽ち手を離して地面へ坐つて了つた。

『足疲れたかい。楓ちゃん、』と婦人が訊いた。

『ウン、暑いのに』と女の兒が答へた。

『もう直きだよ』と勵ます様に婦人が言つた。『さつきの様に、一生懸命に御成りよ。もう一時間と掛りやーしないんだから。』

丁度此の時に家の中から、大柄なニコ／＼した婦人が出て来て二人の途連れになつた。女の兒は飛び起きて二人の後から付いて行つた。

二人は忽ち近處近邊の噂話に花を咲かせ出した。

『だけど伊達さん、此の兒を、何處へ連れてくの。御前さんの姪だろ、ねー、親の無い。』

『あゝ左様』と相手が答へる。『御祖父さんの處へ、連れてくんだよ。あすこへ置かうと思つて。』

『まあ！此の兒を山の爺の處へ！無理だよ。夫りや伊達さん。何うしてそんな氣になつたんだね。』

追返されるに極つてゐるよ。』

『そんな事つて無いよ。現在の祖父さんだもの。もう世話しても善いんだよ。今迄は育てたもの。』

私も之れからちつと働かうと思ふがね、此の兒が居たんぢや出来ないよ、邪魔になつて。之れか

ら祖父さんに御願ひ申すのよ。』

『普通の人なら左様さね』少しむつとした口調で『普通の人なら左様だけれども、あの人ぢや、御

前さんだつて知つて居るぢやないか。小供なんぞ引受けて何うするね。こんな小さいのを承知する

もんかね……だが御前さん何處かへ行くの。』

『あゝ、フランクフルトへ』と伊達が言つた。『大變良い口があるんだよ。去年の夏れ、避暑地で
奉公した家があるんだよ。家中で来て居てね、歸る時に一緒に來いつて言はれたんだけど都合が
悪くつて斷はつたらね、今年も亦來て居てね是非邸の方へ來いつて言つて呉れるから私行かうと思
ふの、何うだらう？』

『子供が可愛想だよ』と一寸反對らしい身振をして『爺さんだつて仕様が無いだろ、斯んな子供
を引受けたつて、あの人はね人間とは交際は無いんだから。教會へ足踏みをするぢや無し、偶さ
かどてらに包まつて村へ出て來るが、誰も恐がつて寄り付きやし無いよ。蜘蛛、眉毛に髭もちやな
顔をして丸で野蠻人さ、淋しい處で出會しやうものなら眞個に薄氣味が悪いよ。』

伊達だては相變あひかはらず前まへの説せつを主張しゆちやうする『だつて現在げんざいの祖父おぢいさんだもの、孫まごの面倒めんどうを見る位ぐらゐ、當り前あたゝまへだあれ、眞逆まさかひどい事ことも仕舞しまひよ。そんな事ことすりや承知しやうちしないから。』

『一體いつたい何なんういふ譯わけだらうね、私あたしには解わからないよ。あの爺おやぢさんの心持こころもちがさう何なんんだつて、あんな恐おつくない風ふうをして、山やまの中なかに住すんでるんだろ、一人ひとりぼつちでさ。種々いろ／＼な噂うわさがあるよ、お前まへさんなんざ聞きいて知しつてるだらう、妹いもうとから、え?』

『あー聞きいたよ。でも私あたし黙だまつてるの。煩うるさいからネ』

途連みちづれの女をんなは兼かねてから山爺やまおやぢの眞相しんさうを知り度たがつて居ゐた。一體いつたい何故なぜあんな、おつかぶさつて山やまの中なかに孤ひとり住居ずまひをして居ゐるのか。何で皆なんが蛇蝎だかつの様やうに言いふのか、深ふかい事ことは知しらなかつたのである。

それに此この村むらの人ひとが彼かれを山爺やまおやぢと呼よぶ譯わけも知しらなかつた。勿論もちろん村人むらびとの父爺おやぢといふ譯わけでは無ないに

極つてゐるが、たゞ皆なが左様云ふので矢張り左様呼んで居たのであつた。

夫れと云ふのが此の婦人は、ほんの近頃此の土地へ嫁に來たので、夫れ迄はずつと麓の村に住んで居たから此の邊の歴史や特色なぞは餘り深くは知らないのであつた。

伊達の方は此の村の人間で一年計り前迄は此處に住んで居たが母親が逝去つてから避暑地へ行つて或る大きな旅館の御室掃除になつて居た。で今朝がた小娘を連れて途中まで知り合ひの草取りの馬車に乗せて貰つてやつて來たのである。

連れの女は兼ての疑問を聞き訂すのは今を置いて他に無いと思つたので、中々問題を反らさない。『でもね？ 噂斗りぢや解らないからネー御前さんに聞きや眞個の事が譯るだらうと思ふのサ。御前さんなら一から十まで知つてゐるんだもの。聞かしてお呉れよ、あの爺のことを。山に立て籠つて

皆みんなに恐こわがられてるのは昔むかしからなのかい？」

『昔むかしからだか何どうだか知しらないよ。私わたししや、やつと二十八ぢやないか。あの人ひとはもう七十にもなるんだらう、若い時わかときの事ことなんか譯わからないやね。御前おまへさん位の年くらゐとしなら知しつてゐるけれど……。あの人ひとが村へ出でて来こないんなら話はなしてもいゝけど……。私の母あたしおつかさんはネ、ドムレスクの生うまれなの。あの人ひともや

つばり左様さうなんだよ。』

『それだからサ……。嫌いやだね伊達だてさんば』少しぢれ氣味きみになつて『お前まへさん、村むらの噂うわさになるのを氣きにしてゐるんだろ。大丈だいぢやう夫ふ。私わたしこれでも秘密ひみつの一つや二つ守まもれるんだよ。御話おはなしつてばー。大丈だいぢやう

夫ふだからサー、』

『さう、そんなら話はなさうかしら。黙だまつててお呉くれよ！』伊達だては斯かう前置まへおきをして、さて話はなし出ださう

として後から付いて来る女の兒に聞かれやしないかと一寸振り返ると女の兒が居ない。實はとつくに離れて居たのだが二人とも話に夢中になつてゝ氣が付かなかつたのである。伊達は立ち止つて周圍を見たが、此處までには岐路が幾つもあつたので一寸見ても下の方までは見透せないのである。と 兔に角影も見えない。

『居たよ、あすこにー』と連れの女が可成遠くの方を指して大きな聲で云つた。『山羊飼ひの辨太と一緒になつて山羊の後を追ひ廻はつてたんだよ。大層今日は辨太が遅れて來たネ。辨太と一緒に居りや安心だ。心配なしに話しながら行けるわネー』

『辨太が居なくつたつて大丈夫だよ』と伊達は言つた。『あの兒はネ、年の割りに解つててネ、ぼんやりして居ないんだよ。そこは良い鹽梅だと思つてるの。尤も祖父さんの身代を譲り受けたつて』

山羊が二疋と小屋の外何も有りやしないけれど。』

『前にやもつとあつたのかい。』

『爺にかい？ 左様され、前にやあれでも良かった方だらうね。』伊達は穩かに答へる。『ドムレ

スクでは中々立派な田地も有つたんだよ。あの人が惣領で、弟が一人有つたの。温良しい人でね。

ところが、そこそこの田地も有つたんだよ。あの人が惣領で、弟が一人有つたの。温良しい人でね。

間と一緒になつてネ、酒は飲む、賭突は打つ、到頭家の財産を綺麗に無くしちあつた譯だね。そ

れが元で兩親は引續いて逝くなるし、弟は丸で乞食の様に成り下つて了つて土地に居られなくな

つて行方知れずサ。爺さん一人になつて何一つ有るじやなし、評判は悪るし、之れ亦土地を飛び出

して始めは誰も知らなかつたが、何んでも伊太利のナボリの方へ兵隊になつて行つたと云ふ噂があ

つたが、夫れから十四五年音沙汰が無かつたの。さうしたら不意に又此處へ舞ひ戻つて来て、其時は男の子を一人連れてネ。親類を廻つて歩いて土地に住む積りだつたんだらうが親類が皆な相手にしない、勝手にしろと云ふ譯なんだろ、それで大變怒つて二度とトムレスクへは足を入れないと言つて此の村へ来て男の兒と二人で暮すことになつたのサ。御妻さんと云ふのは何でも外國の女らしいが永く一緒に居なかつたらしいよ。幾らか御金が有つたんだろ、苦次といふ其の男の兒に大工商賣をやらせて居たが、確かりした兒でね、村の人も此の兒は皆な好きだつたが爺は大嫌ひサ。噂だけどナポリも逃げ出して來たらしいの。人殺しをしたとか何んとか言ふんだよ。戦で無く喧嘩でね。でも私の母さんの祖母さんて云ふのがあの人の祖母さんと従姉妹同志だ相だからまあ私も遠い乍らも縁續きに違ひ無いだろ、それで村の人も自然爺と云ふし、山に立籠つてゐるもんだか

ら山爺／＼と云ふ様な譯なの』

『その苦次つて子は何うしたね？』相手は熱心に訊く。

『マア今話すよ。一度きにや話せやし無いやね』伊達は大きな聲をして言つた。『苦次はれ其處で修業して居たんだが、年期が濟むと此處へ戻つて來て私の妹と夫婦になつたの、好いた同志でね、仲善く暮らして居たあれ。處が善い事は續かないもんで、二年斗り經つて、苦次が建前に行つて仕事をしてると棟木が落ちて來て其下敷になつて死んぢまつたぢやないか。其の姿を見ると妹はどつと熱が出て了つてね、地體が丈夫で無いんだろ。全で無我夢中さ、遂々二週間斗り病ふと亭主の後を追つて逝つて終つたのサ。サア噂が立たあれ、なんでも之は爺の罰が子に報つたんだつてネ、面と向つて言ふんだよ。牧師さんまでが随分言つて聞かしたんだよ、悔改めろつてサあ。

夫それを又また爺おやぢさん意い地ぢになつて強情かうじやうを張はつてね。それからつてものは誰だれとも口くちを利きかず、皆みんなも逢あつたつて横よこを向むいちまうんだよ。其その中に急きふに爺おやぢさんが山やまの中に立たて籠こもつたつて話はなしだつたが夫それ以來いらいてんで下おりて來こないの。もう人間にんげんとも神様かみさまとも縁えんを切きつたんだよ屹度きつと。それで仕様しやうがないから私あたしと母かさんでね妹いもうとの兒こを引ひき取とつたのが辛やつと二つの時ときサ。去年きよねんの夏なつ御母おつかさんが亡なくなつたる。私あたしも溫泉場せんぱへ行いつて働はたらかなきやならず。一時里じさとに出だしてね冬中ふゆぢうづつと溫泉場をんせんぱに居ゐたの。御針おはりの方もやるもんだからね、随分ずぶん仕事しごとが有あるんだよ。去年きよねん私わたしを連つれて行いくつて言いふのサ。明後日あさつてこい此方こゝを立たつことになつてゐるんだが、善いい處ところだよ、夫そりやあ』

『それで此この兒こを爺おやぢの處ところへ連つれて行いかうてんだネ。だけど夫そりや非道ひどいよ』と相手あひては叱しかる様やうに言いつた。

「何故サ」伊達は言ひ返す様に『私の盡す丈けは盡したもんだもの。此の上仕ないつたつて善いぢやないか。七年斗りの兒を向ふへ連れて行つたつて仕様がないやね。夫りや左様とお前さん何處へ行くの。モ一半分斗り登つたよ』

「モ一此處でいゝの。辨太の阿母に話しがあつて來たんだから。冬になると何時でも織物を頼むんでね。此處で御別れにしませうよ。サヨナラ、御機嫌良ふ!」

伊達は立ち止つて連の手を握つた。連れの女は往來から一寸引込んだ洞穴の様な處に建つてゐる。黒い山小屋の中へ入つて行つた。

此の小屋も大分傷んでゐる。桶などはも一虫が食つてゐる。周りが圍まれて居るからいゝが、まともな南風の當る處にあれば吹き倒されて終ふ。尤も山の上ででもあればとつくに谷底へ吹き飛ばさ

れて居たのである。

此の小屋に辨太が住んで居る。今年十三歳である。毎朝下の村まで行つて村の山羊を集めて山へ追ひ上げ、山の上で草を食はせる。夕方になると、又それを集めて山を下り、村の入口まで行く。指を口に入れて強い口笛を二つ三つ吹く。すると方々の家から出て来て各自に自分の山羊を受取つて行く。山羊は穩なしいから大抵そんな役は子供がするのである。辨太が村へ来るのは斯ういふ時位なもので夏になると日中は山の中に山羊と暮して居るのであつた。

辨太の家には阿母と祖母とがあるが、辨太は毎朝早く出て夜遅く歸つて来るので——之れは村で歸りに子供達と遊んでるので遅くなるんだが——家へ歸ると晩飯を喰べて直ぐ寢て終ふのであつた。

父親も矢張り辨太と云つて若い時から山羊飼をして居たが數年前に世を去つた。阿母も名があるのだが皆なが辨太の阿母と呼んでる。祖母も只『お婆さん』で通つて居た。

山羊や子供の影が何處かに見えるかと伊達の叔母は方見廻して居たが、何處にも見え無いので、小高い處へ登つて其處から麓の方を彼方此方じれつた相に見下ろして居た。

その中に子供達はブラ／＼やつて來た。方々に山羊の好きな草が有るのであちらこちら横道をしながら來たのである。始めの中は女の子も重たい着物を着て一生懸命になつて登つて來たが、暑さは暑し堪らなくなつて來た。辨太の方は半すぼんに裸足で身輕に駆け廻つてるし、山羊だつて細い脛で草叢や崖を輕々と攀ち上つて居た。

何思つたか女の兒はいきなり地面へ坐ると大急ぎで靴下を脱いだ。それから起き上つて厚ぼつた

い頸巻きを取り、よそ行きの上着のボタンを外づして脱いで終つた。今度は下の平常着も脱ぎかけた。伊達が荷物になるので下へ着せて來たのである。忽ちの中に平常着の上着も脱ぎ捨てて、下着一枚になつて嬉し相に短い襯衣の袖から腕を出した。脱いだ物は皆なそこへ積み上げて辨太の後を追つて山羊の群の中を駆けまはつた。

辨太は女の兒が後で何をして居るか知らなかつたが輕々しい装で傍へ來たのを見て、ニヤリとしたが後の方に着物が積み上げて有るので大口を開いて笑つたが、別に何とも言はなかつた。

女の兒は身輕で氣持がよいので、やれ山羊が幾つ居るか、何處へ連れていくのか、それから何をするのかと種々な事を辨太に尋ねる。辨太は又一々其の質問に答へて居た。

やがて子供の一行が辨太の山小屋に近づく、伊達の伯母さんの姿が見えた。

伊達は二人を見るなり怒鳴つた。

「楓、御前何をして居たの！ 何んだいそれは！ 着物を何うしたのサ？ まあ 買った斗りの靴

も編んで遣つた靴下も有りやしないよ！ 楓や、何うしちまつたのサ！ みんな何處へ置いて來た

の？」

子供の方は落付拂つて『あすこ』と下の方を指した。

其の方角を透して見ると成る程途中に何かある。積み重なつた物の上に赤い物が見える。たしか

に襟卷だ。

「仕様が無いよ、此の兒は！ 伯母さんはむきになつて怒つてる。

『何んだつて脱いちまつたんだい。えつ？』

『要らないんだもの』子供は一向平氣な顔をして居る。

『マア、仕様の無い兒だよ、御前は！』

解らないのかい？

伯母さんは悔しがつたり怒つたり

『彼

處まで後戻りをすりや半時間

も掛かつちまう。

辨ちやん御前

驅けて取つて來て御吳れな？

サー早

く行つて！

ネー。見て居ないでサ！』

『モー遅いんだもの』

辨太はもぢ／＼しながら

兩手をポケットに入れて突つ立つて居る。

『其處で見て居たつて同じ事ぢや無いか！』

御駄賃を出すよ。ホラこれだよ！』

叔母さんは五錢銅貨の新しいのを

出して見せた。ピカ／＼して居るそれを見ると

辨太は急に驅

け出した。いや其の早い事、近道傳ひにドン／＼

飛んで行つて忽ちの中に着物の處へ行つた。そ

れを拾つて又疾風の如く戻つて來た。其の素早やさに伯母さんも感心した。直に褒美を遣ると辨太

はそれをポケットの底深くねち込んでニコ／＼した。滅多に斯んな儲け仕事は無いのだから。

『お前も上へ行くなら之れを持ってつて御呉れな！』叔母さんは左様言ひ乍ら小屋の後の高い崖を

登り始めた。辨太は快く引受けて左手にそれを抱へ、右手で棒を振り廻し乍ら二人に付いて登つ

た。楓と山羊とは身軽だから面白相に飛び跳ねてゐる。夫れから一時間足らずも登ると小高い丘の

處へ來た。その突き出した様な崖の上に爺さんの小屋が建つて居るのであつた。風も當たるが其

の代り日も良く當る。下の方がずつと見晴らせる。小屋の後は樅の木が三本繁つてて其又後は

一段高くなつてて處々草地やら大石やらが有つて、それから先は斷崖絶壁の秃山になつてゐる。

爺は小屋の傍に陣取つて麓の方を見下して居た。煙草のパイプを咬へて兩手を膝の上に載せてチ

ツと一同の登つて來るのを見詰めて居た。伯母の方は次第に後れて了つたが楓は眞先きに小屋へ

着いて爺さんの前へ兩手を延ばして、

『祖父さん 今日ば！』

『オヤツ 何うしたんだ！』爺さんは子供の手をむんずと握つて太い眉毛をびくつかせ、穴の開く

程楓を見乍らぞんざいな調子で尋ねた。楓の方でも瞬もせず祖父さんの顔を見詰めた。

鬚が蓬々と延び、太い眉毛が兩方から出會はして丸で額の處で森の様になつてゐる。斯んな

顔は珍らしいのであらう。其の中に伯母が辨太と一緒に登つて來た。辨太は不思議相に立つて見て

居た。

『爺さん今日ば！』と伊達が歩み寄りながら言つた。『今日ばね苦次さんと妹との中に出來た此の

兒を連れて來たよ。御前さんは一歳の時に見た位なもんだから覺えて居なさるまい！』

『だつて俺ん處へ子供なんぞ連れて來たつて仕様がねーぢやねーか！』ぶつきら棒に斯う言ひ掛け、
 辨太の方に向き『御前何んでそこに立つてるんだ！ 山羊を連れてあつちへ行きな！ 今日は大

して早かあねーヨ。俺れん處のも連れてくんだよ！』

辨太は爺の言ふが儘に行つて了つた。

『此からは御前さんとこへ置くんだよ』と伊達は當然の答へのやうに言ふ。『私しや四年の間育て
 たんだからね。今度は御前さんの番でせう？』

『左様か！』と老人は伊達の方に一瞥を與へながら『なんだな、だゝを捏ね出して來たんだろ。此
 の位になると皆な左様だ。尙更俺にや仕様が無からうぢやあねーか』

『お前さんの役だよ！』伊達は頑張つた。『私が引取つた時にやー二歳ぢやないか。何うして好いか』

解りや仕無かつたよ。夫れでなくつたつて、阿母は居るし、宜い加減忙しい處へ持つて來てサ。私もれ之れからは自分の身の振り方を付け無きやならないんだから。私の次は御前さんだもの。引取らないんなら勝手に仕なさいよ。間違がありやー御前さんのせいだから。面倒だもんで嫌がつてばかりあるよ。』

伊達は何時にも無く昂奮して居るので少し言ひ過ぎた。叔母が言ひ切ると、爺さんは突と立つて手を延ばし、恐い顔をして命令的な口調で

『モー歸つて呉れつ。滅多に此處へ來なさんなつ』
伊達も斯うなりや用が無くなつた。

『それぢや歸るよ。サヨナラ、楓も左様なら……』
『投げる様に云つて麓の方へどんく下つて行つ

た。やがて村の邊へ行くと、皆なが楓の事を聞く。何しろ事情を能く知つてゐる人達だから。

『子供は？何處へ置いて來たの？』と一軒一軒窓から首を出して聞くので伊達は五月蠅相に、

『爺の處、爺の處』と云ふと

『夫りや！餘りだよ。あんな年の行かないものを捨てちや！』

『可愛相だ、可愛相だ』と口口に言はれるので伊達は氣持が悪くなつて來た。

ですん／＼村を通り抜けて漸く皆なの聲の聞えなくなつた處まで來るとホットした。伊達だつ

て、亡つた妹に頼まれて居るんだし、手離して良い氣持はしないが、其の中に金でも少し言まれ

ば又何とかして遣らう。離れた處へ行けば當分は村の人の噂も聞かずに済むと自分で慰めて居た。

第二章 祖父さんの膝下

伊達いでの姿すがたが見えなくなると、爺おやぢは又ベンチに腰こしを掛かけて、吸口すひぐちから盛さんに煙けむりを吹ふき出だしながら黙だまつて地面ぢめんを見詰みつめて居ゐた。楓かへは彼方あつちこつち此方こゝちを見廻みまはつて居ゐる。小屋こやの傍そばに山羊やぎの檻おりがあるので覗のぞいて見たみたが空虛からだつた。

尙なほも彼方あつちこつち此方こゝちと調しらべながら小屋こやの後の縦もみの樹きの邊あたりへ來きた。風かぜが強つよく當あたるので梢こずえの方がゴゴーと唸うなりを立てて居ゐる。暫しばらく其その音おとを聞きいてたが、少すこし靜しづかになつたのでグルツと小屋こやを廻まはつて元もとの處ところへ來きて見みると、祖父おぢいさんは矢張やつぱり先さきつきの處ところに居ゐるので其その前まへへ來きて兩手りやうてを後うしろへ廻まはして祖おぢ父ちさんの顔かほを覗のぞき込こんだ。

『何どうしたつ』小兒こどもが身動みうどきもしずになたつて居ゐるので爺おやぢさんが尋たづねた。

『あたい家うちの中なかが見みたいや』

『左様か、御出で！』祖父さんは立上つて小屋の方へ歩き出した。

『その包を持つて御出で』

『モ一要らないんだよ』と楓が云つた。

老人は振り向いてちろりと小兒を見た。楓は早く家の中へ遣入つて見た相な顔をして居る。

『利口相だがな』祖父さんは半ば獨り言の様に言つて、更に大きな聲をして『何故要らないのさ』

『山羊と一緒に驅け度いんだもの』

『御馳けな、だつて着物は持つて御出で！』戸砌へ入れとくんだから。』

楓は祖父さんの命令に従つた。老人が小屋の戸を開けて入る。楓も後から遣入つて來た。中は可成廣く全部一室になつて居る。中にテーブルと椅子とが一脚づつ、片隅には祖父さんの寢臺がわ

つて、向ふには爐が切つて大きな藥罐が懸かつてる。一方が壁で大きな戸が付いてる。夫れを開けると、中が戸棚になつて横に衣服が懸けてある。三段に棚が付いて下には襦袢、乾下、上着などが載せてある。次のには皿、コップ、湯呑、一番上にはパン、焼肉、乾酪などが載せてある。山爺の持つてゐる丈の生活用品は總んな此處に入つてゐる譯だ。戸棚を開けるが早い、楓は驚かせ寄つて成る可く祖父さんの着物の後の方へと包を推し込んだ。モ一出さなくても善いと云ふ積りなのであらう。楓は頻りに考へ乍ら室の中を見廻はしてたが

『祖父さん！ あたい何處へ寝るの？』と聞いた。

『御前の好きな處へ寝な』

楓は子供心に一生懸命寝る處を探しに掛つた。何處が一番良からうと室の隅から隅まで見

て居たが、祖父さんの寢臺の傍に小さな梯子が有つて上の方に乾草が山の様に積んである。傍に圓い窓があつて、其處から見ると麓の方まで良く見える。

『あたゐ、此處へ寝るよ！』楓は下の方を見て言つた。『好い處だ！』祖父さん、來て御覽よ！好い

よ！』

『行か無くつたつて知つてゐるよ』下の方で言ふ。

『あたゐ、蒲團を造らへらあ』其の邊をぐる／＼歩きながら言つた。

『祖父さん！上敷を持つて來て！上敷が要るよ！』

『ヨシ／＼』下の方で祖父さんが言つた。やがて戸棚を開けてがた／＼何か捜して居たが、襦袢の重ねてある下から長い粗末な布を引つ張り出した。上敷にするのであらう。夫れを持つて梯子を上

つて行つた。

上に來て見ると可愛らしい寢床が出來てる。頭の方の草を少し高くして、寢て居ても窓の見える様にしてある。

『旨く造らへたな！　こゝへ上敷をかけるのか？　一寸御待ちよ！』祖父さん草を一抱へ持つて來て更に厚くして體の痛くない様に直ほした。

『サー上へ敷くんだ』二人して馬鹿に大きな上敷を敷けた。楓は周りの布を下へ押し込んだ。キチンとして綺麗になつたが楓はまだ何か考へてゐる。

『祖父さん！　未だ足りないや！』

『何が？』

『上へ掛けるのが要るよ！』

『左様か、何んにも無いなあ』

『ああ、無くたつて善いや。モット草を掛けりや！』

楓は祖父さんを慰める様な口振りで言ひながら草を取りに掛かると、爺が、
『御待ちよ』と止めて梯子を下りて行つたがやがて大きな重い袋を持つて登つて來た。

『草よりましだろ』

楓はそれを擴げ様として全力を出して引つ張つたが、小さな腕には如何とも出來ない。祖父さん
に手傳つて貰つて上へ擴げて、之れですつかり出來上つた。楓は嬉し相に見ながら、

『良い寢床だネ 早く夜になればいいネ 寢て見度いやあ』

『寝るよりも何か食べた方が宜かないか、エ?』と祖父さんが言つた。

楓は寢床の事で夢中になつて他の事は全然忘れて居たが、實の處朝パンを一切れに薄いコーヒを一抔呑んだつきり何んにも口に入れずに一日旅行をしたのだから、食べ物事を言はれて急に飢じさが込み上げて來て堪ら無くなつた。

『何か食べたいよ祖父さん!』

『左様だろ!だから下りな!』

楓は云はれるまゝに祖父さんの後に付いて梯子を降りた。祖父さんは爐の處へ行つて、大きな藥籠を除けて鎖で吊るしてある小さい方の藥籠を引き寄せ乍ら、傍にあつた木製の圓い三脚へ腰を下した。藥籠が動き始めると、長い鐵の棒へ大きな乾草を刺して火に屬した。それを彼方此方

に廻はして居る中に全體が眞黃色になつて來た。楓は涙子と見て居たが、忽ち何か考へ出した様に
とだなところへ走つて行つて、顔りに何か出したり入れたりして居た。やがて祖父さんが乾酪の焼けた
戸棚の處へ走つて行つて、顔りに何か出したり入れたりして居た。やがて祖父さんが乾酪の焼けた
のをテーブルの處へ持つて來て見るとテーブルにはもう整然と膳立てが出来てて、丸いパンに皿と
ナイフとが二つ載せてあつた。楓は膳立ての仕方を中心得て居たので必要のものだけは出して置いた
のである。

『左様々々！ 良く知つてゐるな！ だが未だ要る物が有るよ』祖父さんは乾酪をパンの上へ載せ、テ
ーブルの上へ土瓶を置きながら斯う言つた。

楓は土瓶の口から湯氣が出るのを見ると又戸棚の處へ走つて行つたが、中にはどんぶりが一つし
か無い。一寸困つてたが其の後にコップが二つあるのを見付けて、どんぶりとコップとを持つて來

てテーブルに載せた

『よしよし！ 一人で食べられるだろ、だが何處へ坐るね？』

一脚しか無い椅子には祖父さんが掛けてるのである。楓は矢の様に爐の側へ飛んで行つて小さい三脚を持つて来てそれへ腰を掛けた。

『左様々々夫れが良い、ちつと低いな、此れぢや一高過ぎるし、まあ食べ出しな、腹が空いたろ』
左様言ひ乍ら爺さんはどんぶりに乳を注ぎ、それを自分の椅子の上へ載せて、三脚の方へすり寄せて遣つたので、楓は丁度良い膳が出来た。祖父さんはパンの大きな切れと眞黄色な乾酪とを椅子の上へ載せてやつた。

『サ、食べな！』自分も其の椅子の端へ腰を掛けて食事を始めた。

楓^{かへて}ばどんぶりを取り上げると呑む呑む、夢中^{むちゅう}になつて呑み續けた。終日^{しゅうじつ}の渴^{かわ}きが一時^{いさじ}に押^おし寄せたのであらう。やがてほつと息^{いき}を吐^ついて、どんぶりを下^{した}へ置^おいた。

『乳^ちが好きか?』祖父^{おぢい}さんが訊^きくと

『すゐぶん旨^{うま}いや!』と答^{こた}へた。

『夫^それぢや、もつと飲^のみな!』祖父^{おぢい}さんは又^{また}どんぶりへ乳^ちを波^{なみ}々と注^ついで小兒^{こども}の前^{まへ}へ置^おいた。楓^{かへて}はパンを食^たべ乍^{はが}ら嬉^{うれ}し相^{さう}にそれを見^みてゐた。パンには柔^{やわら}かに焼^やけた乾酪^{チーズ}がバタの樣^{やう}に塗^ぬり付^つけてあるのでチヨイ／＼乳^ちを飲^のみ乍^{はが}ら食^たべると殊^{こと}に旨^{うま}い味^{あじ}がした。

食^{しょく}事が済^すむと祖父^{おぢい}さんは山羊^{やぎ}の小舎^{こや}の掃^{ほう}除^ちに出^で掛^かける。楓^{かへて}も後^{あと}にくつつ付^ついて熱^{ねつ}心^{しん}に見^みて居^ゐた。先^まづ小舎^{こや}の掃^{ほう}除^ちをし、それから晩^{ばん}の寢^ね業^{どくご}、それがすむと物置^{もの置き}へ行^ゆき、丸^{まる}い材木^{さいもく}を輪^わ切^きりにしてそれに

穴を穿け、棒を差し込むと、高さは少し高いが家にあるのと良く似た三脚が出来た。楓はさも感心した様に見て居た。

『楓や！ 何んだろ。是れば？』と祖父さんが訊いた。

『あたいの腰掛けだ！ 直ぐ出来るね』驚いた顔をしてゐる。

『よく解つたな。中々見當を付けるのが旨いぜ』と祖父さんは獨言を云ひ乍ら壁の周りを廻つてそこ、ここへ釘を打ち付けた。それから入口の周りを一寸修繕して、尙も金槌と釘と板切れとを持って行つて方々を取り繕ろつて居た。楓も一々傍へ行つて一生懸命に眺めて居た。

日が暮れ掛つて來た。風が強くて横の古木に當る。夕方には平常強い風が起つて來て梢を吹き鳴らすのである。楓の耳にはそれが愉快に響くのか、嬉し相に木の下を飛び廻はつて、こんな愉快な生

くわつ はじめに 活は始めてだと云つた様子である。祖父さんは入口に突つ立つて子供を見護つて居た。

ひとこゑするどくちよえき 一聲鋭い口笛が聞こえたと祖父さんは横手の方へ歩き出した。山の上からは山羊の群が躍りつ

は 跳ねつゾロ／＼ 辨太を真中にして下りて来た。楓は嬉し相に叫び乍ら群の中へ驅けて行つて、今朝

みちづれともだちくわんけい の道連友達を歓迎した。

こや ところくしろ ちや ひき きれい やき ひれ はな おぢい そば 小屋の處へ来ると白と茶と二疋の綺麗な山羊が群から離れて祖父さんの側へ来て、頻りに其の手

な だ 舐め出した。之れは祖父さんが山羊の好きな鹽を握つてゐるからである。何時も山羊が歸つて来る

しは な 鹽を舐めさせるのである。辨太は残りを連れて往つて終つた。楓は山羊の周りを走り廻り乍ら、

かは けは な 交る交る撫でたりさすつたりしてやつて居る。斯んな動物が何より好きなのである。

おぢい こゝろ 是れ家の？ 兩方とも？ 檻へ這入る？ 始終家に居る？

嬉しさを餘り種んな事を尋ねて居た。山羊が鹽を舐めて終うと爺さんは、

『家へ行つて、あの小さいどんぶりとパンを持って御出で！』と言ひ付けた。楓は直ぐに持つて來た。爺さんは山羊の乳をどんぶりに一杯搾つてパンを添へ、

『さあ、之れが晩の御飯だよ！ 食へちやつたら寝るんだよ！。叔母さんが置いて行つた包の中に

寝巻や何か運入つてゐるから、着るなら戸棚から出した！ 祖父さんは之れから山羊の世話をするん

だから。大人しく寝るんだよ！』と言つた。

『祖父さん御寝みなさい！ それから祖父さん 是れば何んて名？』と楓は小舎の方へ行く祖父さ

んと山羊との後を追ひ驅け乍ら尋ねた。

『白いのは白、茶色のは赤だ』と教へて呉れた。

『白ちやんも赤ちんも御休みなさい！』と楓は太聲で叫びベンチの處へ戻つて來て腰を掛け、パンを食へ、乳を飲んだ。其の間にも風は益々強くなつて稍もすると腰掛から吹き飛ばされ相になるので、食事をソコ／＼にして家に入り梯子を登つて寢床へもぐり込んだ。と思ふと忽ち寢入つて終つた。斯麼寢床でも此の兒に取つては王侯の夫れの様に思はれるので有らう。

間もなく日が未だ全たく暮れ切らぬ中に祖父さんも臥床に還入つた。朝が早いからである。其の晩は風が随分酷かつた。吹き付ける度に小屋がグラ／＼揺れて垂木がミリ／＼云つた。煙突から吹き下ろす風は丸で悶えて唸る様であつた。戸外の樅の木は餘程強く風を受けるので折々小枝の折れる音が聞えた。

眞夜中に翫は床を出て、

『恐がつてゐるかな？』と大きな聲で獨り言を云ひ乍ら梯子を登つて楓の處へ行つて見た。月が雲間を出でて皎々と冴えたかと思ふと直に又雲が来る。一しきり雲が去つて、丸窓から差し込む月影は楓の寢床を隈なく照らした。厚い夜着を掛けてゐるためか楓は頬を眞紅にして横を向いてすやくと良く眠つてゐる。屹度楽しい夢でも見て居るのであらう。嬉し相な顔をして居る。爺は小兒の顔を稍暫し見て居たが、總て又雲が來て四周が眞暗になつたので自分の寢床へ戻つて行つた。

第三章 緑の牧場

高い口笛の響で楓は朝早く眼を醒した。太陽の光線が圓窓から流れ込むので、周囲のものが丸で黄金の様に光つて居た。暫しは喫驚して周囲を眺めて居たが、さて此處は何處だか一寸思ひ

出せなかつた。

其の中に戸外で爺の太い聲がすると忽ち何もかも思ひ出した。何處から來たか此處は誰の家だかすつかり合點がいつた。前に居た家は涼しいどころか寒くつて何時も臺所の竈の前か家の中ならストーブの傍に斗り居た。夫れに留守番のお婆さんが耳が遠いので離れて居ては困ると云つて、何時も楓を自分の傍に斗り引き付けて置いた。夫れが楓に取つては随分窮屈で、例には戸外に出て驅け廻はり度かつた。

夫れだから眼が覺めて變つた家なので非常に嬉しかつた。そして昨日の種々面白かつた事を思ひ出して、今日も矢つ張り白や赤などが見られると思ふと嬉しくて堪らないのであつた。

床から跳ね起きて、瞬く間に昨日の通り身輕な着物を着け、梯子を下りて小屋の外へ飛び出した。

見るともう辨太が山羊を連れて來てゐる。祖父さんは今しも小舎から白と赤とを出してゐる處であつた。楓は傍へ駆け寄つて祖父さんと山羊とに『お早う』と言はうとすると、

『御前も牧場へ行くかい？』と祖父さんが問ふた。楓は躍り上つて喜んだ。

『マア第一顔は洗は無きやあ！』上へ行くと明るいから汚ない顔なぞして居ると御天道様に笑はれるよ。彼處に皆んな出してゐる。』

祖父さんが入口の日當に在る水の道入つた大鹽を指した。楓は驅けて行つてベチャ／＼やり乍ら方々擦つて綺麗になつた。其の間に祖父さんは小屋の中に道入つて辨太を呼んだ。

『オイ、大將！』御前の合財囊を持つて來な！』

面喰ひ乍ら辨太は自分の貧弱な辨當を入れてゐる囊を持つて行つた。

『口を開けな！』爺は藁を開けさして中へパンと乾酪の大切れを入れた。辨太は眼を丸くして見て居た。

『井を入れて置くからな。お前の様に山羊の腹へ直かに口を付けちやあ飲めないから！ 晝食には之れに二杯搾つて遣つて呉れ！ 一緒に行くつて言ふから氣を付けて呉れよ。崖があるからいいかい』
 處へ楓が驅けて來た。

『祖父さん！ これでも御天道様が笑ふ？』本氣になつて聞いた。笑はれるのが嫌さに頸や腕まで
 盥の傍に掛けてあつた硬い手拭でゴシ／＼擦つたので全で湯出蛸見たやうになつた。祖父さんは
 笑ひ乍ら、

『それなら大丈夫だ、誰も笑やしない』と賞めた。

「夕方歸つて來たら今度は鹽の中へ體を入れて洗ふんだよ。山羊と一緒に飛び廻りや土ぼつけだから。さー出掛けな」

それから二人は山へ登つて行つた。昨夜の風で雲は残りなく吹き拂はれ濃藍の襟に晴れ渡つた天空から太陽の光が全山を照らして、青や黄やの草花が暮を推し開いて、何れも喜ばし相に頭を擡げて居る。櫻草がある。龍膽がある。所々岩薔薇が金色の姿を現はしてゐる。風は跳ね廻り乍らキアツキアツと言つて嬉しがつて居た。日光を反射し乍ら揺り動く花の姿に魅せられて、山羊の事も辨太の事も頭に無い。唯赤や黄の花を追つて彼方此方と途草を食つて居た。至る處で摘んだ花は皆前垂の中へ推し込んだ。家へ持つて歸り自分の寝間の枯草の上へ並べて飾る積りなので有らう。

御陰で辨太は平常より餘計に四邊を見廻さなくては無らなかつた。山羊丈けでも良い加減骨が折れるのに、楓の監督まで仕無きやならず、丸い眼を異常に廻轉させて居たが、遣り切れないので口笛を吹くやら、大聲を出すやら、棒を振り廻すやら、延べつに遣つて居た。

『オーイツ。何處へ行つてゐるんだい？』腹立たし相に叫んだ。

『此處！』何處からか返事をするが姿は見えない。楓は香の良い野花が鬱叢と生え繁つてゐる丘の後にしやがんでゐる。斯慶香の良い空氣を呼吸するのは始めてなので、花の傍へ顔を付け一生懸命に嗅ぎ廻つてゐるのである。

『御出でよ』辨太が又聲を掛けた。『崖から下るといけないからよツ。僕爺に叱られるぢや無いか！』

『何處に崖があるの？』楓は矢つ張り同じ處を動かすに間を掛けた。息をする度に良い香がするの
で退けないのである。

『まだ！　すつと上の方にあるんだよ。此處へ御出でつてばよ！　モツト登ると大きな鷹が鳴いて
るぜ！』

鷹が鳴いてるといふ言葉に動かされ、楓は忽ち飛び起きて辨太の傍へ驅けて來た。前垂には花
が一杯道入つて居る。

『随分採つたなあ！』登り乍ら辨太が云つた。

『御前なんて呼ばなきやあ何時迄だつて居るぞ。明日咲くのが無くなつちまうぢあないか』
楓も成る程と思つたらしい、それに前垂がもう一杯で此の上道入ら無いから嫌でも残して行かす

ばならなかつた。二人は登つて行く。山羊はもう牧場の旨い牧草の奥がすると見えて大層溜良しく急いで歩いた。

辨太が山羊を連れて行く牧場と云ふのは絶壁へ上る處で、其の邊には灌木や樅の樹が茂つてゐる。夫れから上になると道も段々險しくなるし、禿地で上りつめると高い絶壁になつて居る。爺が辨太に注意したのも道理、危い處である。

愈々牧場へ登り着くと辨太は藁を下ろした。此處は折々疾風が通過するから。此の貴重な財産を吹き轉されてはならぬと大切相に凹の處へ安置してさて山登りの勞を怠めるべく日當りの良い草原へゴロリと横になつた。

其の中に楓も前垂を外づいて草花をぐるぐると丸め込んで、辨當藁と並べて置き、辨太の傍へ

坐つて四邊を眺めて居た。麓の方は見渡す限り麗かな朝日を受けて居る。眼を上げると、向ふには雪に被はれた高原が天に接するかと思ふ斗り遠く迄續がつて居る。左手には巨大な岩石の集塊が在つて、其の兩端には鋸の齒の様な巖が塔の様に高く聳え、今にも倒れて來相な氣がした。楓は山鼠の様にチョココンと座つて居る。四邊は森閑として雄大である。桔梗や岩薔薇などを靜に摘り動かす軟風が、時折沈黙を破る位であつた。辨太は疲れて居て寝て終つた。山羊は草叢の中を上の方へと瀟り歩いて居る。

楓は思ふ存分黄金の如き日光を浴び、新鮮な空氣や草花の氣持の良い香を呼吸して、何時迄も此處に居度いと思ふ外に何も考へて居ない。暫らくは斯うした氣分が続いて居た。向ふの高い山の頂を見詰めて居ると、何だか人の面の様にも見える。そして親しげに此方を見て居る様な氣がした。

やがて上の方で大きな鋭い鳴き聲がした。仰向いて見ると一羽の大きな鷹が飛んで居る。斯んな大きな鷹は楓には始めてであつた。それが空気を突ん裂く様な聲をして鳴き乍ら、羽を一杯に擴げて空を圓形に飛んで居た。

『辨ちやん！辨ちやん！御起きよ！』金切り聲を出して叫んだ。『御覽んよ！鷹！御覽んよ！』辨太は飛び起きて見た。鷹は空を高く高く飛んでたが、やがて崖の向ふの方へ行つて終つた。

『何處へ行つたの？』と熱心に見て居た楓が尋ねた。

『自分の巢へ行つたんだろ』

『向ふの方に巢が在るの？ あんな高い處に居ると良いね！何故あんな聲して鳴くの？』

『鳴き度いからさ』辨太の説明は簡單だ。

『あすこへ登つて菓を見やうか?』と楓が言ひ出した。

『駄目! 駄目!』辨太は飛んでも無いといふ調子で、『彼んな處へなんか山羊を連れてけやしないや。爺が言つたぢやないか? 崖から落ちるといけないつて!』

暫らくすると急に辨太が激しく口笛を吹き鳴らした。楓には何事が解らなかつたが、山羊の方では良く解つたと見えて後から後から驅け下りて總んな近づいて來た。木の枝を噛んでるものもあるし四邊を驅け廻るものもある。中には角で撞き合つてるものもある。

楓は跳ね起きて山羊の間を走せ廻つた。斯度澤山の群が一緒に跳ねてゐるのを見た事が無いので堪らなく面白かつた。それに何れも何處か特徴があるので楓は一つ一つ傍へ寄つて近付きになつて居た。

辨太べんたは其間そのあひだに裏うらを凹地くぼちから取り出だして風呂敷ふろしきを敷ひらげ、その上うへへパンとチーズとを二切れづゝ並ならべた。大きいのは楓かへでばうの方ちひへ、小さいのは自分じぶんの方ほうへ置おいた。豫あちかじめ大きさを承知しょうちして居たのである。次つぎにどんぶりを出だして白しろの新鮮しんせんな乳ちいを搾しぼり込んで、眞まん中なかへ置おきそれから楓かへでばうを呼よんだ。楓かへでばうを呼よぶのは山羊やぎを呼よぶより中々なか／＼骨はねが折をれる。新奇しんきの友達ともだちが出來でて物珍ものめづらし相あひに遊あそんでるので中々なか／＼聞きこえ無ないで在ある。

辨太べんたは向むかふの峯みねから山彦やまびこが來くる程ほど大きな聲こゑで叫よけんだので、楓かへでばうが戻もどつて來た。來て見るとチヤンと食しょくじ事の準備しんぱいがしてあるので、喜よろこんで周圍まわりを躍せどつて廻まはつた。

『よしなよッ、飛とぶのは！モーお辨當べんたうだから座すわつてお食たべよ！』と辨太べんたが言いふので楓かへでばうは地面ぢめんへ座すわつた。

『此のお乳はあたいの？』楓はさも満足らしい様子をして尋ねた。

『あゝ、パンもチーズも大きい方が御前んだよ。吞んぢやつたらもう一杯搾つてやらー。その次は僕の番だ！』

『辨ちやんは何れの乳を呑むの？』

『僕の處の山羊のさ。御食べつてばー』辨太は今一度命令を發した。

楓は乳を呑み出した。やがて空のどんぶりを下へ置くと、辨太は起つて又一杯搾り取つた。楓はパンを千切つて乳の中へ浸けたが、それでも残りの方が辨太のより大きかつた。楓はそれをチーズ諸共辨太に渡して、『上げやう！あたい要らないや』と言つた。辨太は未だ曾て他人に物を遣つたこと事なぞ無いのだから、喫驚して楓を見て躊躇した。楓が本氣で云つてるとは思へない。是非遣ると

云ふに取らないので無理に膝の上へ載せて終つた。それで辛やく了解したのか受取つて一寸頭を下げて謝意を表し、でも愉快氣に食へた。楓は頻りに山羊の方を見て居る。

『辨ちやん、總な名が有るのかい？』辨太は悉く記憶して居る。尤も他に記憶する様な事柄も無いので良く記憶えて居る。そこで片端から順に指し乍ら名前を言ふのを、楓は熱心に聞いてたが直に憶えて終つた。何れも夫々の特徴に應じて付けた名であるから記憶し易いものでは有るが、矢ッ張一寸見た丈けでは區別が仕悪いので楓は傍へ行つてしげ／＼と見た。

茶目と云ふのが居る。頑丈な角のある太つた山羊だが矢鱈に皆を角で撞ついて歩くので、茶目が傍へ行くと皆な除けて相手に仕無い。手取りと云ふ姿の小さいすらつとした、きやしやな山羊があるが之丈けは平氣で茶目に向つて行く。四五週位立て續けに撞いて掛かる、其の巧みな試合振り

に流石の茶目も手が出ないで忙然として居る。此の手取りは中々の勇士で角も丈夫である。矮と云ふ小さいのが居る。常時鳴いて斗り居る。如何にも憐れなので、楓は度々傍へ行つて頸を抱へたりして恤つてやつてたが、又しても訴ふる如く悲し相な聲を立てるので、楓が小さい頸を抱へて同情を表して居る。

『矮、何うしたんだい？何故鳴くの？』

矮は楓に體を摺り付けて鳴くのを止めた。

辨太はムシャ／＼食べ乍ら吐切れ／＼に口を利いた。

『大きいのが居ないもんだからだよ……、昨日賣られちまつたんだ……もう、歸つて來やしないや』

『大きいのつて何んだい？』

『親さ』

『ぢやあ、祖母さんば？』

『そんなもの有るもんか』

『祖父さんば？』

『そんなものも居無いよ。』

『可愛想だれ、御前は』楓は左様言ひ乍ら靜かに矮を引き寄せた。『泣くんぢあ無いよ、ね、あた

が毎日來てやるから淋しが無いだろ、何か欲しけりや上げるからね』

矮は嬉し相に楓の肩へ自分の頭を摺り付けて泣かずに居る。數ある山羊の中で白と赤とが一響

魔で、舉動も一段と優れて居た。他のに後れを取つては居なかつたが、たゞ茶目丈けは除けてゐた。寧ろ敬して遠ざけてゐる様だつた。

さて山羊は又もぞろ／＼茂の中を分けて上つて行く。無作法に矢鱈物を飛び越して行くのも有るし、丁寧に美しい處を捜し乍ら歩いてゐるものもある。茶目は相變らず、あつち、こつちに角を振り廻はして居た。

白と赤とは悠々と上つて行く、そして草叢が在ると立ち止つて食べる。楓は兩手を後へ廻はしてよく／＼彼等の行動を観察して居た。

『辨ちやん！』草の上に又寝轉がつてる辨太を呼び掛けた。『白と赤が一番綺麗だね』

『さうさ、山爺が始終洗つてやるんだもの！鹽も鹽めさせるだろ、それから小舎も可いし』

と答へたが、辨太は急に起き上つて山羊の後を追ひ驅け出した。楓は理は知らないが何れ何か起つたものと、一緒になつて驅け出した。辨太は山羊の間を通り抜けて崖際まで驅けて行つた。そこからは下り道で草なぞのない險阻な、岩斗りである。一寸足を止らせれば直ぐ轉げ落ちて大怪我をする、其の崖際の當りへデスが跳ね廻り乍ら近づいたのを辨太が見付けたのであつた。デスがかたあしを片足を確かと握り止めた。デスは自由にならうと腕がく。辨太は大聲で「楓ちゃん、手傳つて呉れつ！」と叫んだ。デスの片足を力一杯引つ張つてるので起き上がることが出来ないのである。楓は後れ走せにやつて來て此の場の有様を見て取り、手早く香の高い牧草を撈り取つてデスの鼻先へ近づけた。

「デス！此處へ来い！此處へ来い！ね！落ちると怪我して痛いからね！」

デスは忽ち向き直つて楓の出してる牧草をムシャ／＼遣り出した。其の間に辨太は起き直つて鈴の付けてある頸輪を握んだ。楓が一方を握つて二人で辛く安全な場所へ悪戯者を引つ張つて來た。安全な處へ連れて來ると、辨太は懲しめのため、うんと仕置をしやうと持つてる棒を振り上げた。デスは小さくなつて竦んでゐる。

『お止しよ辨ちやん！お止しつてば打つのは！恐がつてるからさ！』と楓が叫んだ。

『當り前だつ此の位！』辨太はむきになつて又棒を振り上げたが楓は其の腕に噛り付いて、

『お止しつてば！怪我をするからさ！堪忍して御遣りつてばよ！』

楓が夢中になつて止めるので辨太は不思議な顔をして澁々振り上げた手を下ろした。

『御前！明日もチーズを呉れりや！デスを勘辨してやらあ』と言つた。辨太は何か骨折りの報酬を貰はなければ合はないのである。

『上げら、皆な上げら、毎日上げら、あたい要らないからパンも澤山上げら。今日の様にね。だからデスも他のも打つちやいけないよ、いゝ？』

『呉れりや！打たないや』之で條約が成り立つた。容されたデスは嬉し相に跳ねくり廻はつて群の中へ戻つて行つた。

斯くて時はすん／＼経つて、日も早や山の端に白鴉く頃となつた。楓は又も地上に座つて夕日に照されてる桔梗や岩薔薇を黙然として見て居た。草と云ふ草が何れも金の様に赤み掛つて来た。諸々の岩角が煌々と光り出した。楓は不意に躍び起きて叫んだ。

『辨ちやん、辨ちやん！火事！火事！山が皆な燃えてるよ！雪の處も燃えてらあ！あー空も！見て
御覽！大きな岩が燃えてら！綺麗だな雪の燃えるのは！辨ちやん、御起きよ！あの高の墓の方
まで燃えてか彼の岩も、やあ樅の樹の處も燃えてら。皆な燃えてるよ！』

『常時でもだ』辨太は棒の皮を剥ぎながら悠長に答へた。

『ぢや何に！』餘り何處も彼處も綺麗なので前後に走り廻はつて諸々を眺めながら楓が尋ねた。

『辨ちやん！あれは何に？エ、何に？』

『獨り手にあゝなるんだ』辨太は斯う説明した。

『アラ！』楓は尙も夢中である。赤くなつた、雪のある方が！尖つた岩の方も！あの御山は何ん

て云ふの？』

『山に名なんかありやしないよ』

『綺麗だなあ、雪が皆んな赤くなつちやつた！ あすこに薔薇が咲いてるのかしら。あッ、白くな

つて来た！ おや、無くなつちやつたよ、辨ちゃん！』

楓は地上に坐つて段々消えて行くのを惜し相に眺めて居た。

『明日になりやあ又ならあ』と辨太は言ひ乍ら『もう歸るよ！』

辨太は口笛を吹き鳴らして山羊を集め、一同麓を指して下りて行つた。

『毎日あゝなるのかい、此處へ來れば？』楓は辨太と並んで山を下り乍ら念を推す様に問ふた。

『あゝ』

『明日も屹度？』大層念を推した。

『あゝ屹度さ』辨太は受け合つた。

受合はれたので楓は大層嬉んだが、今日は終日種々な印象を過ぎるほど受けたせいか小巖へ歸る迄全く口を開かず居た。祖父さんは樅の樹の下に腰を掛けて又椅子を造らへ乍ら、一行の歸りを待つて居た。處へぞろ／＼と戻つて來た。

楓は藁地に爺の傍へ走せ寄つた。白も赤も後から續いた。山羊は主人や自分の小舎をよく知つて居る。

「明日も又御出で！あばよ」辨太は楓に左様云つた。一人より二人の方が面白いのである。

楓は駆け戻つて來て辨太の方に手を延べ乍ら、明日を往くと約束した。それから山羊の中へ入つて來て矮の頭を抱えて、

『矮や、晩に良く寝んねして又明日一緒に行かう、泣くんぢやないよ！』矮は嬉し相に楓の顔を見て、やがて他の山羊の後を追つて躍り廻つた。楓は樅の樹の方へ驅けて來ながら、

『祖父さん！随分綺麗だつたよ！』遠くから叫んだ『火が燃えてね、崖の上に一杯薪藪が咲いて種々な色の花があつて、ほら、祖父さん持つて來た。』

左様云ひ乍ら祖父さんの前へ前垂に包んだ花を残らず擴げた。

何事であらう、花の姿は全く消せて、丸で枯草同様、一輪も満足なのは無い。全く萎れ切つて終つたのである。

『何うしたんだらう？』楓は落膽して叫んだ『斯んなぢや無かつたのに何うして斯んなになつちやつたんだろ？』

『日向が好きなんだろ、御前の前垂の中より』

『それぢや、あたゐ、もう探つて来るの止さうや。祖父さん！ 爲は何故あんな聲して鳴くの？』と
楓は左も知り度相に尋ねた。

『まあそれは後にして水で行水をしな。祖父さんは乳を搾つて来るから。それから家へ這入つて
晩の御飯を食べて、それから話して上げるから。』

行水も濟み、家へ這入つて楓は丈の高い三脚に腰を掛けると、前には自分のどんぶりが祖父
さんのと並べて置かれた。楓は又も先の質問を持ち出した。

『祖父さん！ 爲は何故あんな聲をして鳴くの？』

『あればな、麓に居る人間の悪口を言つてるのだ。ごちや／＼村に住まつて意地悪斗りしてるか』

らその惡口を云つてゐるのさ。『他人は何をしたつて構はない。勝手にさしとけ、祖父さんの様に山に住まへば良いのにつて』

楓の頭には又先つきの薦がありくと浮んだ。

『御山には何故名が無いの？』

『有るとも、何れでも言つて御覽！ 祖父さんは皆な知つてゐるから』

楓は西端の塔の様に尖つてゐる山を、見た通り説明すると祖父さんは得意氣に、

『知つてゐるよ。あればね、鷹の巢山つて云ふんだ。それから？』

今度ば上が雪の原になつてゐる、先つき火が燃えたり薔薇の様な色になつたり、急に又白くなつたりした山を聞くと、

『それも知^しつてゐるよ。あれは白山^{はくさん}さ。あすこから見ると綺麗^{きれい}だつたる。エ?』

楓^{かへで}は尙^{なほ}も其^その日^ひ見た種^{いろいろ}々の事^{こと}を話^{はな}した。そして夕^{ゆふ}方^{がた}になつて、山^{やま}が何^{なん}うして燃^もえるのか、辨^{べん}太^たに解^{わか}らなかつた質問^{しつもん}を出^だした。

『あればね』と祖父^{おぢい}さん^{さん}は説明^{せつめい}して呉^くれた。『御^お天^{てん}道^{どう}様^{さま}がするんだよ。御^お天^{てん}道^{どう}様^{さま}が方^{はう}々^くの山^{やま}に「さよなら」をする時^{とき}に又^{また}明日^{あした}の朝^{あさ}來^{くる}る迄^{まで}待^{まち}つて御^お出^いでと云^いつて皆^{みんな}に綺麗^{きれい}な色^{いろ}を見^みせてやるのさ』

楓^{かへで}は此^この説明^{せつめい}を喜^{よろこ}んで聞^きいた。そして明^{めい}朝^{うて}牧^{まき}場^ばへ行^いつて夕^{ゆふ}方^{がた}御^お天^{てん}道^{どう}様^{さま}が方^{はう}々^くの山^{やま}に左^{ひだり}様^{さま}ならな云^いふのが見^み度^{あた}くて、明^{あした}日^{にち}が待^{まち}ち遠^{とほ}しかつた。が先^まづ其^その前^{まへ}に寝^ねなくつてはならないので臥^{ふしど}床^どに這^{はい}入^いつた。キラ／＼光^{ひか}る山^{やま}々^々や、赤^{あか}い薔^げ薇^らの花^{はな}や、其^その間^まを飛^とび廻^{まは}る矮^{ちひ}の姿^{すがた}なぞを夢^{ゆめ}みながら翌^{よく}朝^{あさ}迄^{まで}良^よく寝^ねた。

第四章 お婆さん

次の朝も辨太や山羊と一緒に山の上へ行つた。斯うして毎日戸外生活を續けて行く中に、楓の顔は段々日に焼けて黒くなり、體は益々丈夫になつて、全然で林の小鳥の様に毎日元氣よく暮して居た。

秋が來た。山の上の風は一段と強くなつて來た。或る朝祖父さんが、
「楓や！今日は家に御居で！斯んな風のある日には御前なんぞは谷の中へ吹き落されるよ」と云つた。

辨太は左様いふ日には眞個に詰らなかつた。どうして一日を過さうかと思ふ程であつた。一日が

恐ろしく永い様な氣がした。晝食のパンとチーズ一件もあるし、山羊も何んだか常時より餘計手が掛かる様であつた。楓が居ないと、山羊まで淋しいのか、勝手氣儘な方向に離れて行くので辨太は困つて居た。

然し楓の方では平氣であつた。何處からでも樂しみの材料を見付け出して居た。辨太や山羊と一緒に牧場へ行つて、草花や、鳥を見たり山羊と遊んだりし度くも有るが、又内に居て、祖父さんが釘を打つたり、材木を切つたり、方々修繕したりするのを見るのも随分面白いのであつた。山羊の乳でチーズを造らへるなどは特に面白い。祖父さんが兩腕を捲り上げて、大きな藥罐でチーズを造る所などは特の外興味を以つて見て居た。

それより尙面白く感じたのは、斯ういふ風の有る日に裏の三本の樅の木へ風の當る光景であつ

た。何處どこに居ゐてもちよい／＼見みに行くのであつた。梢こずえを搖ゆする深大美妙しんだいびめうな風かぜの響ひびきほど神秘不可思しんぴふかし議ぎな感じかんじを彼女かのぢよに起おこさしめるものは無なかつたのである。風かへては屢々樹しばしばの下したに立つて、非常ひじやうな力ちからで樹きを搖ゆすり動うごかす風かぜの響ひびきに耳みみを澄すますのであつた。

涼風すずかぜが起おこつて來たので楓かへてはそろ／＼靴下くつしたや小ちひさい外套ぐわいたうなんぞを出だし始はじめた。樅もみの樹きの下したに立つてゐると、小ちひさな體からだが吹き飛とばされ相あうになる時ときもあつたが、それでも矢やつ張はり外そとを飛とび廻まはり度たく、殊ことに風かぜの吹ふく時ときなぞは、家うちの内なかにちつとして居ゐられなかつた。

段々だん／＼寒さむくなつて來た。辨太べんたが朝早あさはやく來る時ときなぞには兩手りやうてを口くちへ當あてて息いきを掛かける程ほどになつた。それから間まもなく或あるる晩ばん大雪おほゆきが降ふつた。翌朝よくあるあ見ると全山ぜんざん唯ただ之こがれ體々たい／＼として見渡みわたす限りかぎり青あせいもの一ひとつ

見えなかつた。

かうせついちばんた　降雪以來辨太は牧場へ行かなくなつた。楓は驚異の眼を見張つて、又しても盛んに降り出して來た雪を小さな窓から眺めて居たが、段々積つて窓の邊迄來たが、尙高くなつて來たので窓を閉めて終つた。必竟祖父さんと楓とは家ぐるみ雪に埋つて了つた譯である。楓は嬉しくて堪らない。あつちこつちの窓へ行つては雪の増すのを眺めて居た。若し愈々すつかり小屋が包まれて終へば、晝間でも燈火を點ければならなく成るのである。がそれ程には成らなかつた。翌日は雪が止んだので、祖父さんは鍬を持つて出て行つて、雪を掻き寄せたが小屋の周圍に可成りの山が幾つも出來た。窓や戸口の雪が除れたので開け閉てが自由になつた。楓と祖父さんとは、其の日の午後例の三脚に腰を掛けて居ると、突然戸を強く敲く音と敷居を踏み鳴らす音がして、やがて戸が開いた。見ると山羊飼ひの辨太であつた。先つきの音は靴の雪を取るためなのであつた。随分吹き溜まつた雪の

中なかを過とつて來たので、體からだ中ぢゆう雪ゆきだらけで、寒さむさが強つよいので付ついた雪ゆきが堅かたく凍こり付ついて、方々はうくに大おほきな塊かたまりりが出で來てゐる。途とちう中は可か成なり辛つらかつたが風かへてに遇あひ度たさに違ちがつて來たのである。二人ふたりとも可か成なり長ながく遇あはなかつた。

『今日こんにちは！』辨太べんたは這入はいりながら挨拶あいさつして直すぐ火ひの傍そばへ行いつて黙だまつて體からだを焙あぶつた。口くちへは出ださぬが此處こゝまで迫たどり着ついた嬉うれしさが顔かほに表あらはれてゐる。融とけた雪ゆきはぼた／＼流ながれ落おちるので風かへては物珍ものめづらしげに眺ながめて居ゐた。

『何どうしたい？大將たいしやう！』爺おやぢが聲こゑを掛かけた。『山半やまはんは休やすみだし鉛筆えんぴつでも書なめてゐるのか？』

『祖父おぢいさん！何なんだつて鉛筆えんぴつを書なめるの？』楓かへては横よこから口くちを出だした。

『冬ふゆになるとれ、學がく校かうへ行いくからさ！』と祖父おぢいさんは説せつ明めいしてやる。

『讀んだり、書いたり、辛いやな、鉛筆でも替めて辛棒してゐるんだろ、エ、大將？』

『あゝ左様だ』辨太は簡單な返事をした。楓は學校と聞いたので其の事を種々訊き始めた。辨太と

楓との間答は平常から中々時間が掛るのである。一體辨太は酌辯で自分の思想を言ひ表はすのが

極めて不得手であるのに、學務の事なぞ訊かれるので、一つの質問に答へるのさへ中々容易でない

處へ、楓が後から問を掛けるので弱つてゐた。尤も其の間に衣服はすっかり乾いて終つた。

爺は黙つて居たが其の間答が可笑しいので折々口を歪ませて聞いて居た。

『大將！ 暖かくなつて良い心持だろ！ 晩飯を食つてけ、な！』

爺は直ぐに起つて月棚から晩食の材料を持ち出した。楓は三脚を食卓の傍へ推し出した。爺は

今では二人暮しなので、それに楓は兎角爺の傍へ接近して掛けたがるので腰掛けも澤山造つて有

つた。三人とも食卓に向つた。卓の上にはパンの大切に旨さうな乾肉が被せてあるので、辨太は珍らし相に見て居た。斯麼豊富な晩食には暫らく出會さないのである。三人して愉快な晩食を済ました時分には、もう日が暮れ掛つて來た。辨太は歸り仕度をして、

『左様なら!』と言たかと思ふと早や體は戶外に出て居た。振り返つて、

『此の次の日曜に又來ら、何時か僕ん處へも御出でな、祖母さんが御出つて云つてたよ!』と言つた。

他處の家へ遊びに行くといふ様な考へは、楓に取つて始めてで有つたので楽しみでならない。翌朝になると第一に、

『祖父さん、あたい辨ちゃん、祖母さんの、處へ行つてもいいだろ? 御出でつて言ふから』と尋

ねると

『未だ雪が深くつて駄目だよ』と祖父さんは抑へる様に言つた。然し楓は深く思ひ込んで終つたので夫れからは日に何遍となく『行き度い、行き度い』と言はぬ日は無かつた。

夫れから四日目には寒さが一層酷かつた。戸外を歩くとかち／＼音がした。雪が全然凍つて終つた。太陽丈けは美しい光を窓に送つて来る。楓は例の三脚へ腰を掛けて昼飯を食べ乍ら又持ち出した。

『祖父さん！ 辨ちやんの家へ行き度いよ、御祖母さんが待つてゐるからさ』

爺さんも我を折つたか、枯草の物置場へ行つて楓の寢床の被になつてた大い袋を下ろして來た。『それちや一緒に御出でッ！』と云つた。楓は大喜びで爺の後へ隨いて小躍りしながら雪の世界

へと飛び出した。樅の梢も今は静かに雪に包まれて日光にキラ／＼して居る。

『祖父さん！来て御覽よ！』

樅の樹に金や銀が一杯實つてゐるよ！』と楓が叫んだ。

爺は物置へ行つたが、やがて巾の廣い襦袢を持つて出て來た。樅の横側には取手が付いて居る。中へ腰を入れると兩足は前の方へ出て地面に觸れる様になつてゐる。足で根を取るのである。

爺は楓と共に樅の樹を一寸見廻したが、やがて樅の中へ腰を入れ、襦袢を先きの袋で寒く無様に良く包んで、自分の腰の上へ載せ左手で確つかと抱へた。之れで出發の準備が出來た譯である。

右手に取手を握り、兩足で樅を引き出すと襦袢はする／＼と山を下り始めた。其の早いこと飛ぶ様である。楓は何んだか鳥の様な氣がしてきやつきやと叫んで居た。

襦袢は山羊飼辨太の小屋の前で止まつた。爺は楓を地上に下ろして袋を脱がせ、

『さあ、中へ這入んな！ 夕方になつたら出て來な！ 家へ來るんだから！』と言つた。

そして爺は襦袢を引張つて元來た途を上つて行つた。

楓は戸を開けて小さな薄暗い室へ這入つた。室の中には爐があつて、臺の上にとんぶり鉢などが載せてある。此處は臺所なので有る。隣りに今一つ室があるので楓は其處を開けた。此處は居間である。山爺の小屋は上に屋根室のある大きな一室作りだが、此處はそれとは違ひ古い小さな建物で總作が小さく狭く見すばらしい。

戸を開けると、直ぐ前にテーブルが在つて傍に一人の婦人が辨太の短上衣を繕つて居た。楓は直にそれが見えたか解つた。室の隅には年寄つた腰の曲つた御婆さんが糸を繰つてゐる。是も誰だか直に解つた。楓はいきなり糸車の傍へ進み寄つた。

『お婆さん今日は！　もう先から來やうと思つてたの！』

辨太の祖母さんは顔を擧げて手探りで楓の手を握り、頸を傾げ乍ら訊いた。

『御前は山爺の家に居る娘かえ？　楓さんといふ？』

『左様よ！　左様よ！　あたいね、祖父さんと一緒に橋に乗つて來たの！』

『おやまあ、それにしては手が暖かいがね、阿母さん！　山爺が下りて來たのかえ？』

テーブルの傍で繕ひをして居た辨太の阿母は、今しも起き上つて楓を不思議相に眺めて居たのであつた。

『氣が付きませんでしたね。山爺が下りて來たか何うか。眞逆來やしますまい。何か間違ひでせう。』

楓は婦人の方を屹と見て調子を強め、

『だづて祖父さんが袋に包んで櫓へ乗せて來だんだもの。他に誰も居やしないや』

『左様かい。此の夏辨太が左様言つたのは眞個かね。眞逆彼んな人がと思ふがね』とお婆さんが云つた。『誰も眞個とは思はないよ。子供なんぞは十日と居られまいと思つてたが……此の子は何んなだれ』

辨太の阿母はもうすつかり楓の觀察を済した處なので、祖母さんの間に對して即答へた。

『阿母に似て花車な兒ですよ。眼付や髪の毛の按配は亡くなつた親父や山爺にそっくりですれ』
楓は其の間もぼんやりしては居ない。四邊を見廻して種々なものに眼を通して居た。

『お婆さん！ 窓の戸がぱた／＼動いてるよ。家の祖父さんなら直ぐ釘を打つて接合せるんだ。硝

子が壊はれちまわ。ほら、』

『良く氣が付く兒だね』とお婆さんは云つた。『見えないけれど音丈けば聞えるよ。窓計りぢや無い。風が吹くと方々がた〜いふが、あつちもこつちも壊れて居るんだろ。夜中などに二人とも能く寝てるけれども、風が吹いて來ると家が引つ繰り返へりやしないかと思ふことが度々あるよ、家ぢやあ誰も直し手がないからね。辨太にや出來ず』

『お婆さんには何うして見えないの？あんなに動いてるぢやないかほら又動いて。ほら！ほら！』と楓は窓を指した。

『私にや何んにも見えないんだよ！窓斗りぢやない何んでも見えないんだよ』祖母さんは悲し相に云つた。

『それぢや窓をもつと大きく開けて上げやうか？左様すれば屹度見えるよ』

『駄目、駄目、私の眼はもう何うしたつて見える様にあ、ならないよ』

『それぢやあ、戸外の雪の中へ出れば明るいから見えるよ。屹度』

楓は手を取つて連れに掛かつた。眼の見えぬ此の老婆には何處へ行つたとて同様なのである。

『良いよ！行つたつて仕様が無い。私の眼は見えないんだから！』

『そんなられ、祖母さん、夏になつてね』楓は何んとかして見える工夫はないかと種々な事を考へ

出す。『御天道様が夕方、方々の山を眞紅にするだろ、花が金の様になる時、あれを見れば屹度見え

る様になるよ。ね、お婆さん！』

『お婆さんばね、もう何んにも見え無いよ。山でも花でも、もう此の世では見え無いよ』

『誰れも見えるやうにして呉れないの？ 何うしても駄目なの？』

祖母さんは反對に子供を慰めて居たが、楓は中々聞き入れ無い。滅多に泣いたりしない兒だが其の代り泣き始めると一寸止めない。楓の吸り泣きをする聲が身に浸みる様に感じるので祖母さんは種々嫌かして居たが聽て、

『良いよ！ 泣か無くつても！ あのね眼の見えないものは御話を聞くのが何より面白いから御話を聞かせて御呉れ。さ 傍へ腰を掛けて山の家のことや祖父さんの話を聞かせて。私は御前の祖父さんを良く知つてゐるんだから。近頃ちつとも様子を聞かないよ。辨太が時々言ふが辨太は餘り口を利かないからね』

斯う言はれたので楓も考へ直して、急に涙を拭つて話し出した。

『それぢや話して上げやうねお婆さん！ 御祖父さんのことを！ 祖父さんなら眼が見える様に出

来るよ。小屋だつて引繰り返らない様にして呉れら屹度。何んでも直せるんだもの！』

祖母さんは黙つて聞いている。楓は話し續けた。祖父さんと一緒に暮してゐる工合、牧場の光景、各

中の生活状態、爺さんが御手製の木細工物のベンチ、三脚、白と赤との秣槽、夏の大きな新し

い行水壺、さては乳を容れる井や匙の事まで話をした。楓は尙も話を進めて爺が木で種々な物

を作る様子から自分が始終傍で見て居ること、夫れが又一寸の間に出来上ることなどを説明した。

祖母さんは非常に面白がつて聞いているが時々、

『阿母さんや、聞いたかい？ 爺が！』など、辨太の阿母に聲を掛けて居た。

戸口でどかりと大きな音がしたので話が不意に止んだ。突端に辨太が這入つて來た。凝乎立つて

例の大眼玉を見張つて魂消た顔付きをして居たが、楓が、

『辨ちゃん！ 今日はい！』と云つたのでにや／＼御人善らしい笑を顔に漲らした。

『おや、も——學校が退けたのかい？』祖母さんは驚つくりした様に、『斯度（こんど）に早く退けたことは無い、御歸りなさい！ 本は進んだかい？』

『同じ處だ』と辨太が答へた。

『おやおや！ ちつとは進み相なもんだにね。御前も來年の二月になると丸十二ぢやないか？』

『何故進むの、お婆さん？』楓は解らないことは用捨なく横かち口を出して訊く。

『ちつとは何か覺え相なもんだと思ふのさ。御讀みをよくお習ひよ。棚の上に私の新讀書や讀英歌が載せてあるけれども、諸では覺えてゐないし、随分永く聞かないから切めて辨太がちつとでも讀

める様になつたら、拾ひ読みでも読んで貰うと思つて待つてゐるんだけど、未だ辨太にや六ヶ敷いね』
『燈火を點けませう。暗くなつて來たから。』ジャケツを繕つてた辨太の阿母が言つた。

『晝からは短くつてね、直ぐに暗くなるんだから！』

楓は腰掛を飛び下りてお婆さんに手を差し出し、

『お婆さん、さよなら！暗くなるから歸るよ！』

辨太も阿母も交々手を握つて戸口迄楓を送り出した。祖母さんは心配氣に、

『一寸お待ち！獨りぢやいけないよ。辨太！御前一緒に御出で！氣を付けて遣るんだよ。轉が

つたり、突立つてると凍つて終ふよ。襟巻をしてるかい、其の兒は？』

『襟巻なんて無いの。だつて大丈夫だ、凍えやしないや！』楓は振り返つて言つたが聽て雪の上

へ下りると迂る様に歩く。中々早くて辨太に追付けない位だつた。

『阿母さんや、騙けて行つて此の襟巻を貸してお遣り凍へるといけないから、早く行つて！』
阿母は出掛けた。が子供達が山を昇り掛けた時に爺さんが上から降りて來た。

『よく歸つて來た、約束通りに！』爺は左様言つて又例の袋へ楓を包み込み、兩手で抱へて引つて行つた。辨太の阿母は後を見送つてたが、魅て辨太と一緒に小屋の中へ戻つて仔細の様子を祖母さんに話した。此の人達に取つては爺の楓に對する振舞が實に豫想外なので有る。祖母さんも不思議がつてる。

『夫れは可い接配だね！ そんなに可愛がつて貰へば！ 今度又奇越して呉れればいゝが。優しい親切な兒だよ。話の面白い！』

祖母さんは寢床へ這入るまで繰り返し言つてゐた。

『又今度來るといふれ、私やあ何んなに氣が晴れるか知れないよ！』左様言ふ度に辨太の阿母も同感だと云ひ、辨太も賛成の意を表して頭を縦に振り大口を開いて、

『左様だ！ 左様だ！』と言つて居た。

さて楓は大きな袋にぐる／＼巻かれて居ても、種々祖父さんに話をし掛けるが、何しろ幾重にも包まれてるので一向に祖父さんへ通じない。

『家へ行く迄我慢しな！ 家へ行つてから緩くり聞くからさ！』

小屋へ着いて袋から出ると、楓は待ち兼ねて言つた。

『祖父さん！ 明日ね！ 釘と金鎧を持つて行つて祖母さん處の窓を直して遣らうよ。方々壊われ

てるんだつてから』

『祖父さんがかい？』

祖父さんが直すのかい？誰が左様言つたね？』爺は訊き返した。

『誰も云はないけど、あたゐ知つてゐるの。方々がたゞ言ふんだつて！』風が吹くとね、祖母さ

んは心配で寝られないんだつてさ。家が引つ繰り返るかと思つて。誰も直す人が無いんだつて。祖

父さんなら直せるね。明日行かうよ！可愛想だから、ね、嫌なの、祖父さん？』

楓は祖父さんにとつ付いて心配想に見上げて居る。爺は其の顔を暫らく見て居たが聴て、

『よし！夫れぢやがたゞする處をみんな直して遣らう。明日行くと仕様』と承知した。楓は大

喜び、家の中を躍り廻つて、

『明日直してやるんだ！』

明日直してやるんだ！

明日直してやるんだ！』と叫んで居た。

爺おやぢいは言いつた通りとほじつから實行よくじつした。翌日よくじつの午後又ごまたそり楓やまで山やまを下りた。小屋こやの前まへで楓かへてを下ろし、

「御前おまへは中なかへ御道おほい入り！ 夕方ゆふがたになつたら歸かへるんだよ！」と云いつて自分じぶんは楓そりの上うへへ袋ふくろを載せ、小屋こやの

横手よこてへと廻まはつた。

戸とを開あけるが早はやいか楓かへては居間いまへ飛とび込こんだ。お婆ばあさんは楓かへての來たきのが解わかつたと見みえて隅すみの方ほうで大

きな聲こゑをして

『おや來た様やうだね、あの兒こが！ あゝ來た來た！』と言いつたが持もつてた糸いとを落おとし、糸車いとぐるまを止めて、

嬉うれし相あうに兩手りやうてを差さし延のべた。楓かへては直すぐに其その傍そばへ低ひくい腰掛こしかけを推おして行いつて、種々いろくと話はなしを始め出はじめすと登あ

に小屋こやがどし／＼鳴なり出でした。お婆ばあさんは車くるまを引繰ひくり返かへさん斗ばかりに驚おどろいてぶる／＼し乍なら、

『何どうしたらいゝだらう！ 終々とうくつよ潰つぶれるのかね！ 困こまつたね！』と叫あけんだ。楓かへては祖母おばあさんの手てを確しつ

かり握にぎつて、

『違ちがふよ、お婆ばあさん！ 大丈だいぢやうぶ夫！ 祖父おぢいさんが叩たたいてるの！ 潰つぶれない様やうに直なしてるの！』

『本當ほんたうかい？ まあ！ 昔むかしを忘わすれずに居ゐて呉くれるのかね。阿母おつかさんや！ 金鏈かねづちの音おとだね！ 出でて御ご

覽らんよ！ 爺おやぢさんなら家うちへ入いれて御吳おくれ。御禮おれいを言いはなきやならないから！』

辨太べんたの阿母おふくろは外そとへ出でて見みると確たしかに山爺やまおやぢが方々はうくへ釘くぎを打うち込こんでるの。

『爺おやぢさん、今日こんにちは！ ほんとに濟すみませんね。祖母おばあさんが内うちで喜よろこんでますふ。誰だれも仕して呉くれる人ひとは

ないんですから。ほんとに……』

『禮れいは澤山たくさんだ！』と爺おやぢは遮さへぎつて『俺おれの噂うわさは聞きいて知しつてら！ 出でないでも良いい。直なす處ところは見みりや

解わかるから！』

『爺の見暮が強いので阿母は内へ遁入つて終つた。後で爺は小屋の周圍中叩いたり、釘を打つたりして居たが、纏て細い梯子を便りにして屋根裏へ上り釘が有る限り、あちこちと打つて歩いた。左様斯様する中に薄暗くなつて來たので地上へ下り楓の出て來るのを待つて袋に包んで引つ抱へ、昨日の様に縄を引張つて家へ歸つた。』

斯くてその冬も過ぎた。永い間寂寥を續けた此の盲目の老母の生活にも一つの喜びが出來た。最早や陰氣づくめの家では無くなつた。朝早くから表に足音が聞えて、續いて戸があいて、楓が飛び込んで來るのである。祖母さんは何時でも嬉しがつて、

『有難いね！ 又來て呉れたよ！』と云ふのであつた。

楓は又何時でも祖母さんの側に腰を掛けて何かしら樂し相に喋べつてるので、祖母さんは時の遷

るのも忘れてる。

『阿母さんや！ 未だ日は暮れまいね！』など、再三訊くのであつた。

楓が戸を閉めて戸外へ出ると後で祖母さんと辨太の阿母とは極まつた様に斯んな事を云ふのである、

祖母『日が短かいねエ、阿母さんや！』

阿母『眞個ですよ。未だ御晝の後片付けもしない内に』

祖母『爺さんがあゝやつて子供を寄越して呉れるので有難いよ。あの兒は近頃様子は何うだね？』

阿母『丸で林檎の様ですよ』

楓は此の老母が好きであつた。そしてお婆さんの眼は祖父さんの力でも見える様にならないと知

つて、子供心に悲しくて堪らなかつたが、お婆さんには楓が来て居て呉れると眼の不自由なのを忘れて居ると言ふので、天気さへ良ければ櫓に乗つて来るのである。爺も止めもせず連れて来てやる。時々金槌や何かを持つて来て、暗くなる迄辨太の小屋を修繕してゐた。御蔭で風が吹いてもがた付かず、祖母さんは夜も録々寝られなかつた冬中思ひ比べて、爺の親切は決して忘れぬと言つて居た。

第五章 二人の訪問者

春、夏、秋と夢の間に過ぎて、冬も今は終に近付いた。楓は小鳥の様に満足、幸福の中に暮して居た。そして日一日と春の近寄いて来るのを楽しみにして待つて居た。暖かい風が時々、横の樹の

梢を揺すつて積つた雪を拂ひ落す。太陽の光も追々濃厚なつて来て、至る所に青や黄の花を呼び醒ます。牧場の春はもう間も無く来る。楓の最も得意の時節が廻つて来るのである。

楓は最早八才になつた。種々の手細工なども祖父さんに教へて貰ひ、今では山羊を連れて方々へ出掛ける様になつた。白と赤とは何時も飼犬の様に御伴をして嬉し相に鳴き廻つて居た。

冬の間に、村の學校から二度までも辨太を使に、爺の處へ傳言が有つた。楓を入学させよと云ふのである。もう學齡に達して居る。本來なら前の年の冬から就學すべきであると云ふので有つた。爺の返事は二度とも、若し何か用があるなら家へ来て言つて呉れと云ふので。楓を學校へ遣らうとは言はない。辨太は其の度にちやんと復命した。

三月になつて坂道の雪が融け、方々の谷間に松雪草の花が咲き出す頃には、小屋の樅の樹も雪

い近處に住んでた人なのである。牧師は小屋へ運入つて爺の傍へ行くと、丁度爺は體を屈めて細工をして居た。

『や、御早う！』

とつぜん突然なので爺は驚つくりして顔を上げたが、夫れを見て、

『あ牧師さんか！ 御早う！』と言ひ乍らとある三脚を前へ推し出し、

『牧師さんには粗末で失禮かも知れないが何うか掛けて下さい！』牧師は腰を下ろし暫らくして、
『随分久し振りですね』と爺さんに言ふと、

『随分暫らくですな』と爺さんも言つた。

『實はね、今日一寸お話しし度いと思つて來たんですが、もう云はなくても大抵御解りでせうが御

かんが
考へを聞き度いと思つてね』

牧師は斯う言ひ掛けて戸口の處で此方を見てゐる楓の方を凝乎と見た。

『楓や！ 山羊に鹽を少し持つてつて御遣り。今に祖父さんが行くから彼方で待つてなよ！』

楓は直ぐ出て行つた。牧師は語を續ぎ、

『もう一年遅れてるんですからな、此の冬に是非一つ學校でも傳へてはあるが何とも返事が無いと云ふ事ですか、一體何ういふ御考へですな？』

『學校へは遣らん考へです！』と爺が答へた。

牧師は呆れて爺の顔を見た。爺はベンチへ腰を掛け腕を拱いて快心の様子を表はしてゐる。

『はゝあ、それであの見を何うなさる御積りですな？』

かんが
考へを聞き度いと思つてね』

牧師は斯う言ひ掛けて戸口の處で此方を見てゐる楓の方を凝乎と見た。

『楓や！ 山羊に鹽を少し持つてつて御遣り。今に祖父さんが行くから彼方で待つてなよ！』

楓は直ぐ出て行つた。牧師は語を續ぎ、

『もう一年遅れてるんですからな、此の冬に是非一つ學校でも傳へてはあるが何とも返事が無いと云ふ事ですか、一體何ういふ御考へですな？』

『學校へは遣らん考へです！』と爺が答へた。

牧師は呆れて爺の顔を見た。爺はベンチへ腰を掛け腕を拱いて快心の様子を表はしてゐる。

『はゝあ、それであの見を何うなさる御積りですな？』

『別に何うも仕ません。山羊や鳥を相手にして無事に育つて行きますもの、悪い事は覚えないうし、差支へなからうと思つてますよ』

『然し鳥や獸と一緒にばされませんよ。人間の兒ですからな。悪い事は覚え無いかも知れんが其の代り大切な事も覚えられますまい。人間としたら矢つ張り一通りの事は學ばなくては。今が學び出す時なんです。私に、今日は夫れを御勵めに來たのですが、一つ此の夏の間、種々手筈を極めて置いて頂いて、つまり此の冬から入學させると斯う云ふ事に願ひ度いもんですが、何うでせうな？』

『受け合はれませんか』爺は頑として云ふ。

『困りますな。他の事と違つていくら強情を張られた處で是非とも左様して貰はなけりやならな事なんですから』牧師も少し興奮した。

『貴方も世間を渡つた方だし、物の理屈の解らん人でないと思つてゐるですがね』

『左様ですとも！』と言つた爺の聲が前程落付いて居なかつた。『牧師さんまあ考へて下さい！』

こんな寒やしやこともあめゆきこはつやうふゆてんきやましたや此の花車な子供を雨や雪で凍り付く様な冬の天氣に山の下まで遣られますか？ 二時間も掛かるん

でせう？ 御負けに時折大暴がするぢやありませんか。大人だつて堪りませんよ。夫れをあれの阿

母には悪い病が有つて夜半に寢惚けては歩き廻はつて困りましたよ。楓にも餘り無理な事をさせて

同じ様な病氣にでもなると困りますからね。誰が來て勧めたつて遣れないものは遣れませんよ。裁

判所へ呼び出されたつて平氣ですよ！』

『いや、御尤もですよ！』牧師は極めて程かな調子で言つた。『夫りやあれ。此處から通はせると

云ふ譯には行きますまいさ。それに貴方も手離し度くはありますまいから斯うしたら何うでせう。

あの兒のためだと思つて下の村へ住まつては？

つまりもう一遍人里へ出るんですな。世を拗ね

て此處山の上に住んでたつて仕様がないうちやありませんか！

何事が起つたつて來て呉れる者はな

し、冬中雪に埋もれて暮してゐるのは私には更に解かりませんがね。あんな花車な兒の體には良

くないでせう？』

『子供は元氣盛りだから平氣ですよ。それに山には薪が無盡蔵だし、物置へ行つて御覽なさい。

冬中燃し結めにしても使ひ切れない程有りますからね。何も態々村へ行つて住まなくつたつて向

ふも嫌つてゐるし、此方も頼みにはして居ないんだから、結局此處に居る方が兩方のためでせう。』

『いや夫りや違ひますよ。夫處が問題なんです』牧師は熱心になつて『村の者が何う思つたつて、

びくともする事は無いでせう。神と和らいでさへ居れば、萬一貴方に悪い處があれば謝すればそれ

で善いんですからな。なに案外思つた程ではありませんよ』と云ひ乍ら立ち上つて老人の前へ手を延ばし『ね、是非此の多は村へ引越して来て下さい。皆昔馴染なんですもの。貴方が餘り強情を張つて居られると私達も心細くなりますからね、もう一遍我々の仲間に入る事にしませうよ。そして神と人とに和らぐ事に仕様ぢや有りませんか？』

爺は牧師の出した手を握つたが斷乎として答へた。

『種々親切に言つて下さるが今言つた様な譯で不承知ですから！』

『左様ですか？ 此の上は私にも勧め様がありませんから、ぢや之れで失禮します！』牧師は挨拶して殘念相な表情をしながら歸つて行つた。

後に爺は氣撥けがした様に落膽して居た。午後になつて楓が『お婆さん處へ行かうよ』と云ふと

『今日は行かないよ』と素氣無い返事をした。

其日は終日無言で居た。翌朝になつて楓が、

『今日は行く?』と訊くと『うむ』と氣の無い返事をして居た。

晝の食事の後片付が済まない中に又訪問者があつた。他でもない伊達のお婆さんであつた。

すつかりめかし込んで、羽根の付いた綺麗な帽子を被り、床に引摺り相な裾長の着物を着て來た。

爺は黙つて其の姿を見て居たが、伯母は大層元氣よく楓が見違へる様になつたの、それも世話が

行き届くからだのと御世辭を云つてた。一體伊達の伯母は兼てから自分が楓を引取つて世話をし様

と云ふ考へで居た。爺さんも小兒が居ては迷惑だらうとは思はぬことはなかつた。さりとて今引き

取つた處で置く處も無かつたので其の儘にしてあつた。處が楓に取つて此の上もない運が向いて

來た。滅多に無い申し分の無い仕合せが向いて來たので、やつて來たのである。

「實はね、妾の勤めてる御邸の奥様の御親戚でね、裕福な御方があるのですよ。フラシクフルトに。其處の御嬢さんが獨りつ子だと云ふのに足が不自由でね、年中車椅子に乗つてゐなさんですつてさ。家庭教師も雇つてある人だけでも、獨り切りでせう、勵みも付かないし遊び相手が無くてね。」

伯母の話に由ると此の事を耳にしたので、直ぐ楓では何うだらうと、先方へ頼んだ結果、約束が出來たので楓を連れに來たと云ふのである。

『ほんとに、どれ程楓の仕合せか知れやあしませんわ。楓が段々可愛がられる様になればさ。其の内に萬に一つ御嬢さんに事でもあつて御覽なさい——いえ無いとは限りませんよ。病身だつて

云ふんですから——窓の者も淋しくなるから夫れこそ運が——』

『もう澤山だよ、そんな話は！』

黙つて聞いて居た爺は我慢がし切れなくなつた様に言つた。

『何が澤山なんです？』伯母はむつとして、

『斯んな口は滅多に有りやしませんよ。ほんとに結構な口なんですから………』

『そんな口は他處へ持つて行つて呉れ！』此の方は眞平御免だ』と爺は愛相氣もなく言ひ放つた。

伯母も仲々遠慮しては居ない。

『まあ！あきれた！』いえ、私の思ふ事はね、もう此の兒も八歳になるし、斯うして置いたつて何

一つ覺えるぢやなし、御前さんだつて覺えさせ様とはしますまい。學校へも教會へも遣らないつて

云ふから村の人だつて左様云つてますよ。私に取つても姪ですかられ。打捨つて置くと私まで笑はれ者ですからね。人が骨を折つて斯んな良い口を探して來たのに邪魔をされちや困るぢや有りませんか。小兒のためと云ふ事をチツトも考へて遣らないんだから仕様が有りあしない。村の人だつて皆んな私の考へを尤もだつて云つてゐるんですよ。私しや警察へ願つてでも是非とも左様して見せますよ。御前さんだつて昔の事もあるし嫁でせう警察は?』

『あゝもう澤山だ!』爺は眼を輝からして怒鳴つた。

『連れて行き度きや、連れて行け! 其の代り二度と連れて來るな! そんな羽根の付いた帽子を被せたら、べら／＼お喋りの稽古をさせるのは大嫌なんだ!』

爺は大跡に歩いて戸外へ出て行つて了つた。

『祖父さんが怒つてゐるぢやないか！』と楓は憎らし相に其の黒い眼を伯母の方へ向けた。

『なに、ぢき直るよ、さあ！ 御出で！ 御前の着物は何處にあるの？』と伯母はせき立てた。

『私、行かないよ』

『行かない？』と言ひ掛けたが伯母は急に聲の調子を柔かにして、

『御前まだ知らないからだよ。そりや良い處だよ』

左様言ひ乍ら伯母は戸棚を開けて楓の物を取り出して一纏めにした。

『さ、行くんですよ。帽子を被つて！ 此りや似合はないね、ま良いさ。さ大急ぎで』

『私嫌だあ』

『なぜ、そんな強情を張るの。山羊と一緒に遊ぶもんだから強情になつたね。伯母さんと一緒に』

に行けつて怒つたらう。愚圖々々して居ると又叱かられるよ。フランクフルトは宜い處だよ、良
い物が澤山あるよ。夫れから嫁だつたら歸つて來てもいいのさ。行きさへすれば爺さんだつて怒り
やしないんだよ、さ！』

『行つて今夜歸つて來られるかい？』

『だからさ、歸り度けりや歸れるといふのに！ 汽車へ乗れば飛ぶ様だもの。すぐに行つて來られ

らあれ』

伯母さんは片手に包を抱へ、片手に楓の手を取つて山を下り始めた。

時候が寒いので辨太は牧場に出られず村の學校に通つて居た。然し學校が詰らないのかチヨイチ
ヨイ休む。本を讀むよりも山をブラついて木の枝などを搜した方がズット有用な事業だと思つてゐ

るらしい。今日しも集めた木枝の大束をかついで、得意相に己が小屋の間近まで来ると楓と伯母の姿が見えた。

『何處へ行くの？』と辨太が聲を掛けた。

『フランクフルトへ伯母さんと！』楓が答へた。

『あたいお婆さんのところへ寄り度いや！』

『いけませんよ！ 寄り途なんかして居ると遅れます』

伯母は寄り度がる楓を確かり捕へて離さない。

『歸りに寄れますからさ』

今辨太の家なぞへ寄ると折角行く氣になつた者が又嫌になると困るし、辨太の祖母さんも遣るの

を録いがると面倒めんどうだと思おもつたので、伯母おばは楓かへてを引張ひっぱる様ようにして行いつた。辨太べんたは自分じぶんの小屋こやへ驅かけ込こんでいきなり木きの束たばを卓子テーブルの上うへへ叩たたき付つけた。だし拔ぬけに偉えらい音おとがしたので祖母おばあさんは紡つむぎ機だいから飛とび下おりて來きた。辨太べんたはブリークべんたして居ゐる。

『何なんだい？ 何どうしたの？』祖母おばは心配しんぱいして尋たづねた。卓子テーブルの傍そばに腰こしを掛かけて居ゐた辨太べんたの母はは、だし拔ぬけの物音ものおとにたまげて居ゐたがやつと落おち付ついて、

『何なんだつてそんな亂暴らんぼうをするのさ？』

『だつて楓かへてちゃんを連つれて行いつちやつたからよ！』

『誰だれが？ え、誰だれがさ？』祖母おばあさんは急きふに心配しんぱいになつた。と云いふのは今いましがた辨太べんたの母はが伊達いたの伯母おばの山やまへ來きたと話はなしたので、さてはと思おもつたのであらう。登いそいで窓まどを推おし開あけて當あてもなしに

叫んだ。

『伯母さん！ 伊達の伯母さん！ およしよ！ 連れて行くのは！』

此の聲は確かに下りて行く二人の耳に入つた。伯母は驚いて益々楓の手を確と握り全速力を出した。

『お婆さんが呼んでるよ、寄らうよ！』

楓は左様言つたが伯母は聞き入れなかつた。早く先方へ行つて見て嫌だつたら戻つて来るのだから何でも大急ぎで行くのだ。そして歸つて来る時に祖母さんの好きなものを御土産に買つて來てやると、種々に楓を慰めるので楓もつい其の氣になつて急いで歩き出した。

『何を御土産に買つて來やう？』少したつて楓が尋ねた。

『さうされ、何にしやうね。あの旨い柔かい巻パンが良いだろ。祖母さんは固いものは食べられないから!』

『あゝ、パンの固い處は噛めないんだつて。固い處は辨ちやんに遣つちまうんだつてさ。早く巻パンを買つて來やうよ』今度は楓の方が先へ立つて馳け出した。伯母さんは荷物を抱へるし一緒に馳けるのは中々骨だつた。然し良い鹽梅だと思つて居た。間も無く村へ來た。何れも楓を知つてゐるので聲を掛けたり聞いたりする。又しても楓の方が變つては大變と伯母は氣を揉んだが、良い鹽梅にかへて楓は先に立つて伯母を引つ張る様にして急ぐので伯母は之幸と、

『今日は急ぎますから御免なさいよ。夫れに此の兒が急ぎ立てますから……』門口や窓から聲を掛ける人達に言ひ乍ら歩いた。

『連れて行きなさるのかい？』

爺さんとこが嫌だつてかい？

良く無事で居たね！でも丈夫相だね！

ね！

伯母は一々之れに説明を與へては面倒と、良い程に挨拶してズンズン通り越して終つた。楓が何

とも言はずどん／＼歩くので好都合だつた。

さて山爺は楓が去つた日から一層變人になつた。村を通つても誰に口を利くではなし、杖を

擔いで太い杖を突いて、眉に八ノ字を寄せて囁付き相な顔をして歩いて居た。

『氣を付けなよ！山爺が來たら御除きよ！酷い目に遇ふから』なぞと村の御神さん達が子供に左

様言つて居た。

爺は村を通つて下町へ行き手製の乾酪を賣つて、食料品などを買ひ求めて歸るのである。村の

人は爺おやぢの通とほる度たびに後うしろ指ゆびを指さして種いろく々の蔵か口けぐちを利きいた。誰たれしも此この爺おやぢの前ぜん半はん生しやうは能よく知しつてゐるし、殊ことに近頃ちかごろ一層いつそう野性やせいを帯おびて來たので、楓かへてが逃にげて來て仕合しあはせだつたの、左様さうい云へばあの兒こが通とほる時ときに丸まるで逃にげる様ように急いそいでたのと噂うわさをしあつてゐた。

辨太べんたの祖母おばあさん丈だけは頻しきりに山やま爺おやぢの肩かたを持もつて居た。糸繰いとくり道具どうぐを持もつて來る人達ひとたちに山やま爺おやぢが楓めんたうよみを良よくく見みてやつた事ことや、幾日いくにちも懸かつて潰つぶれ相さうになつた自分じぶんの小屋こやを修繕しうせんして呉くれた事ことなぞを話はなして聞きかした。此この話はなしは自然しぜんと村むらの人ひとにも傳つたはつたが、皆みなんな辨太べんたの祖母おばあさんは毫ちうろく碌ろくしてゐるか
らあてにはならないと聞きき捨すてゝゐた。

爺おやぢは、以來いらい辨太べんたの小屋こやへは行ゆかなかつた。尤もつとも小屋こやは丁寧ていねいに修繕しうせんしてあつたから、當分たうぶんは手てを入いれる必要ひつえうもなかつた。

『あの児が来ないので、樂しみが無くなつたよ。もう一度楓の聲が聞き度いねえ！』鳥が鳴かぬ日はあつても、辨太の祖母が楓の事を云ひ出さぬ日は無かつた。

第六章 全然變つた生活

フランクフルトの本間家では、病身の娘久良子が車付きの安樂椅子に凭れて、毎日彼方此方の室を推し廻つて貰つて居る。今日しも食堂に接した一室に陣取つて居た。此處には種々の玩具などが並べてあり、立派な大きな書棚もあつて御舊古とする處で、つまり久良子の居間兼書齋である。

久良子は顔色の青白い目付の優しい娘である。今しも壁に掛つてゐる大きな時計を眺め乍ら、も

どかし相に傍の小さな裁縫臺に姿勢良く向つて刺繡をして居た婦人に、

『古井さん！ まだ來ないの？』

と尋ねた。此の古井さんは古風な肩衣様のものを着てゐるのと、丈の高い圓帽を被つてゐるのと

で、大層鹿爪らしい婦人に見えた。數年前に久良子の母が歿して以來、此の家の家政萬端は此

の人が命付かつて居るのである。本間家の主人と云ふのは留守勝ちの人で、萬事は古井さんに委せ

てあつた。尤も娘の云ふ事丈には何事も背かぬといふ約束はしてあつた。

久良子が待ち切れないで、又古井さんに訊いて居る丁度其時に、伊達の伯母は楓の手を引いて

此の家の戸口に來て、そして折柄御車臺から飛び下りた馬丁の背に古井さんに取り次いで呉れ

と頼んで居たのである。

『おれに言つたつて駄目だ。ベルを推して柴田に訊いて見な』

伯母は言はれた通りすると、やがね大きなボタンの付いた外装を着た眼玉の大きな賄方が二階から下りて來た。

『時間が後れましたが古井さんに御目に懸れませうか？』

『おれに言つたつて駄目だ』と同じ事を言つた。

『も一つのベルを推してお常さんに訊きな』と言つて引つ込んで終つた。

そこで、も一つのベルを推した。やがて頭の上に小さな白い帽子を載せたお常さんなる人が出て來た。苦い顔をして、

『何用？』

階段を下りもせず上の方から訊いた。伯母が前の通り云ふと、お常どんは消えて行つたが間も無く又現れて、

『お待ち兼ね!』と云つた。そこで伯母と楓とは階段を上り、お常どんの後に附いて書齋へ入り、入口の處に忝しく控へた。伯母は未だ楓の手を離さない。恐らくこんな立派な室へ入つて楓が驚いて嘔り付きでもするといけないと思つたからで有らう。

古井は立ち上つて二人の傍へ歩み寄つた。お嬢様の御相手になるか何うか仔細に試験を行なはうと云ふのである。先づ第一外姿の様子に感心しなかつた。何にしる楓は地味な木綿の着袴に、古ぼけた蓑帽子を被つて居るのだから。尤も目付きは極めて無邪氣で、たゞ驚いて古井の顔の格好を
見て居た。

「御名前へ？」

自分の顔を穴の開く程見詰めてゐる楓を暫時の間視察してから斯う尋ねた。

「楓」

聲高に明瞭に答へた。

「教會の聖名は？」

「そんな事知らない！」

「まあ、何んと云ふ事でせう！」古井は頭を横に振つた。

「伊達さん、之れは低能兒ですか？」

「御免遊ばしませ。實は未だ……一向斯う云ふ場所に慣れませんものですから……」

伯母は楓を咎める様に肘で一寸突いて「低能と云ふ譯では無いので御座いますが、田舎育ちで御座いまして思ふ事を遠慮無く申して終ひます……。斯んな立派な御邸へ伺ひましたのは始めてだもので御座いますから。作法も何も心得ませんで……。あの何んで御座います、暫らく御辛棒下されば直きに覺え込みますで御座います。聖名は、あの……。私の姉に當ります之れの阿母がアデライド……。矢つ張り之れにも左様付けて御座います……。』

「はゝあ、アデライド！ ふふむ、そこで……。久良子様の御稽古の御相手ですから餘り年が違つてはいけないのです。夫れは前以つて御話して置きましたね。久良子様は十三歳であなさいますが、此の兒は？」

「御免遊ばしませ。その……。明瞭覺えませんで御座いますが、何んでも御嬢様より少し下で、……」

大した違ひは御座いませんでせう。確しか十歳位だつたと……』

『私八歳！ 祖父さんが左様言つたよ』

楓が口を出した。

伯母は又肘で一寸突いたが、楓には意味が解らないので一向平氣で居る。

『まあ八歳？』

古井は一寸立腹の體で、

『五つも違ふんでは困りましたね。今まで何を習ひましたか。本は何な？』

『何んにも習はないの！』と楓が答へた。

『まあ、まあ、何も習はないで何うして字が讀めませう！』

『字なんて讀めないの』

楓は一向平氣である。

『字が讀めない？ まあ、何うしませう。眞逆丸で讀めないのでは有りますまい。何か御稽古した

でせう。

古井は仰山に驚いて訊く。

『何んにもしないの』

楓は何處までも眞正直だ。

『伊達さん！』古井は一寸氣を落ち付けて、『ちつと御約束が違ひませんか？

斯様なものを御連れ

なすつて！』

伊達の伯母は滅多に物怖じをしない。いよく忝しい調子で、

『御免遊ばしませ。實は何んで御座います。御注文通りのを連れて参つた積りなので御座います。』

先達ての御話には通例の子ではいけない、際立つたのとの御言葉で御座いましたので他にも年嵩

のが御座いますが、何れも並の斗りですの之れなら屹度御氣に入ると存じまして……。就きまし

て……。主人も待つて居りますから私は之れで御免を蒙ります。出られましたら又様子を見に参り

ます。御免遊ばしませ！」

頗る丁寧に御辭儀をして伊達の伯母はつつと戸外へ出て大急ぎで二階を下りた。古井も一寸面

喰つて黙つて立つて居たがやがて後を追つて室を出た。

楓は同じ處に立つたまま取残された。久良子は先程から黙つて椅子の中で見て居たが楓を手

招ぎ^{まね}して、

『もつと此方^{こちら}へ入らつしやい！』

と云^いつた。楓^{かへて}は車^{くるまつ}付きの椅子^{いす}の傍^{そば}へ寄^よつた。

『あなた、楓^{かへて}さん？ それともアデライドさん？』

『楓^{かへて}！ 他に名^{ほか}は無^ないの！』

『夫^うれぢや、左様^{さう}呼^よぶは。良^よい名^なだわね。楓^{かへて}つて珍^{めづ}らしいわ、妾^{あたし}始^{はじ}めてよ。あなたの様^{やう}な風^{ふう}な
して居^ゐる人^{ひと}。あなたの毛^けは前^{まへ}から斯^こんなに縮^{ちぢ}れて居^ゐて？』

『知^しら無^ない！』

『フランクフルトは好^すき？』

『嫌い！ 明日歸るの！ お婆さん處へ巻パンを買つて！』

『あらいやだ』と久良子は驚いて、『だつて私の御稽古の御相手に來たんぢや無いの？ だけど何んにも御稽古をした事が無いつて變だわね。家では毎朝御稽古が有るのよ。十時から。あたしね、もう倦きちまうの。神田先生も時々本で顔を御隠しなさるから近眼かと思つたら欠伸して居らつしやるのよ。古井さんも時々顔へ手巾を當てるの。お話に感心するのかと思つたら矢つ張り大きな欠伸なの。それなのに私が一寸欠伸をすると直ぐ肝油を持つて來るのよ古井さんが。氣付け薬だつて臭いでしょ肝油は。だから私仕方なしに欠伸を我慢して了ふの。でも今度から貴女と一緒にだから良いわ、ね？』

楓はお稽古と云ふ言葉を聞いて頭を横に振つて不承知の意を示した。

『でも、あなただつて御稽古をしなけりやいけないわ。誰れだつてするものよ。神田先生は夫りやお優しいのよ。怒つた事なんてないの、聞けば何んでも教へて下さるは。だけでもね、先生の言ふ事が解らなくつても訊いちや駄目よ。もう左様すると粗々な事を話して尙解らなくなるわ。黙つて聞いて居ると後で解る事があるの。良くつて？』

丁度此の時古井さんが戻つて來た。注文が異つてゐるのに叔母を取り逃がして終つたので何うする事も出來ず、御氣嫌の悪い事一通りではない。書齋から食堂へ、食堂から又も書齋へ更に柴田のコック室へと突進した。柴田は夕食の準備をして置いたので、何か手落ちでもあつたのかと眼を丸くした。

『考へ事は後にして今日は今日の勤をして下さい！』

と言ひ放つて古井さんは更に疝走つた聲でお常どんを呼んだ。お常どんは小言でも頂戴すると思つたのか、不精無精に出て来て始めから膨れ顔して古井の前につつ立つた。古井は向ふに先を越された様な氣がして一層いら／＼した。

『お常や！ あの赤坊の室を掃除して置き！ まだハタキが掛けてないぢやないか！』

『そんなに丁寧に致すんで御座いますか……』

とお常どんは不平顔をして罷り出た。

此方は柴田で書齋の戸をガタ／＼言はせて入つて來た。腹の内ではプリプリして居るから自然夫れが動作に表れる。今しも久良子の椅子を食堂へ推しに來たのである。椅子の後へ行つて把手を握はしてると、楓は其の前へ行つて柴田の顔を熱と眺めた。柴田は夫れが大層癢に陣つたらしく、

『何んです？ 何が珍らしんですかい？』

と丸で噛み付く様に言つた。尤も古井が居ればそんな口は利き得ないのである。

『山羊飼の辨ちやんに似て居るんだもの！』

『此の兒は餘程變ですわ！』と嘆息しながら古井が言つた。椅子は柴田に推されて久良子は食卓に向つた。

古井は久良子の隣に坐を占めて、楓には其向側に掛けよと合圖をした、食事は三人切りなので食卓が廣過ぎて柴田が皿運び憎く相であつた。楓は傍の皿に旨し相な巻パンが載せて有るのを欲し相に見て居た。柴田が辨太に似て居ると云ふ事は、何となく楓の心に柴田に對する親しみを感ぜしめたと見えて、始めは丸で二十日鼠の様に小さくなつて身動きもせず居たが、柴田が六き

な盆（ぼん）にフライ（の）を載（の）せて持（も）つて來（き）た時（とき）に、

『彼（あ）れを貰（もら）つても良（い）いの？』

と卷（まき）パンを指（さ）して云（い）つたし柴田（しばた）は黙（だま）つて點頭（うなづ）いたが古井（ふるゐ）さんが何（ど）う思（おも）ふがと一寸（ちうつと）其方（そつち）を見（み）た。此（こ）の

時（とき）遅（おそ）し、早（はや）や楓（かへて）は卷（まき）パンを握（つか）んで己（おの）が衣囊（ポケット）へ押（お）し込（こ）んで終（しま）つた。柴田（しばた）は吹（ふ）き出（だ）し度（た）いのを我慢（がまん）して

黙（だま）つて楓（かへて）の傍（そば）に控（ひか）えて居（ゐ）た。楓（かへて）は柴田（しばた）が何（なん）のため（そこ）に其處（た）に立（た）つてゐ（ゐ）るのかと不思議（ふしぎ）に思（おも）つて居（ゐ）たが、

『食（た）べても良（い）いの？』

と訊（き）いた。柴田（しばた）は矢張り黙（だま）つて黙頭（うなづ）くと

『何（なに）か取（と）つて！』

と自分（じぶん）の皿（さら）を見乍（みなが）ら平氣（へいき）で言（い）つた。柴田（しばた）は困（こま）つた顔（かほ）をしたが可笑（おか）しさに手（て）に持（も）つてゐ（ゐ）る盆（ぼん）をブル（ぶる）く、

させた。

『御盆は其處へ置いて……少し経つてから又御來でなさい！』

古井は柴田を睨める様に見て云つたので柴田は引退がつた。

『アデライドさん！ あなたには色々言つて聞かす事が有りますがね……』と古井は消息を渡しながら、『第一食事の作法です！』と之から細々と守るべき作法を楓に説き訊かせ、『夫れから……之は決して忘れてはなりませんよ。食卓に向つたら柴田と話なぞはしてはならないのです。何か言ひ付ける時か、よく／＼の時でなければいけません』

夫れから家中の者の呼び方を教へて、『久良子さんは何とお呼びして良いか久良子さん極めてやつて下さい』と付け足した。



『矢つ張り久良子さんよ！』と病人が答へた。

尙、朝起きてから夜寝る迄の事、室の出入り、戸の開閉、其他一切の事を長々と説き聞かせて居たが、當人の楓は先き程から上眼と下眼が附いて終つて居た。何しろ今朝五時に起きてるし旅行をして來たのだから、すつかり疲れが出で先つきから椅子に倚り掛かつて寝て終つて居たのであつた。古井は話し終つて、

『良ござんすか？ 解りましたか？』

『楓さんばとつくに寝て居るのよ！』

と久良子は面白相に楓を見ながら言つた。久良子に取つては今夜の夕食は大層愉快だったのである。

『まあ!!! 斯んな兒は始めてですれ!』

あるあるはらだち
古井は腹立まぎれに呼鈴を亂打したので柴田もお常どんも何事が起つたかと馳け付けた。此の騒ぎ
かへていつかうめ
にも楓は一向眼を醒まさない。辛と二人して揺り起し書齋、久良子の寢室、古井の寢室と順々に
とはぬ
通り抜けて禁れて定めてあつた隅の一室へと運び入れた。

第七章 古井の迷惑顔

あるあるひかへて
翌日楓はフランクフルトで第一の朝を迎へた。眼を開いた時は何やら更に合點が行かなかつ
た。いくら眼を擦つて見ても矢張り解らない。大きな室の中の白い大きな寢臺に寢て居る自分、大
層長い白い窓掛け、二脚の椅子、其の上に載せてある立派な花、之れにも花が載せてある長椅子、
そうながしろまどか
層長い白い窓掛け、二脚の椅子、其の上に載せてある立派な花、之れにも花が載せてある長椅子、

其の前にある丸い机、隅の方の洗面臺、臺の上にある何だか見た事もない品物。

とつぜんきよくうか
突起記憶が浮んで來た。昨日此處に來た事から前夜の事、古井さんの言ひ付けと順々に浮んで來た。

かへてと
楓は飛び起きて衣服を纏ひ第一に窓際へ行つた。何だか鳥籠の中に居る様な氣がするので、早く戸外の天地を見度くてならないのである。窓掛けが重くて引けないので其裏へもぐり込んで見たが窓は高く頭が届かず、見度いと思ふ戸外が見られない。次の窓下へ行つても矢つ張り同様で、たい窓掛けで圍まれて居るのであつた。

かへていつ
楓は何時も朝早く床から出るといきなり戸外へ飛び出して天氣の具合、風に吹かれてゴーゴー云ふ縦の樹、綺麗な卓花などを見たりして、丸て小鳥の様に彼方此方を跳ね廻はるのである。とても

斯んな所にじつとしては居られない。何んとかして窓を開け度いと願つた。然し窓は堅く閉めてあつた。せめて窓枠へでも手を届かせ様としたが夫れも旨まく行かなかつた。玄關の方には石が敷き詰めて有つたが、裏の方には屹度草地が有るに違ひない、見度いものだとか考へて居ると、入口の戸が開いて、お常どんが頭を差し入れてブツキラ棒に、

「御飯が出来ました……」

と云つた。呼びに來たのだと楓は思はなかつた。お常どんが怖い顔をして居たので迎ひに來たなぞとは決して考へなかつた。で仕方がないので臺の方から足掛けを引き出して室の隅へ持つて行き、其の上へ腰を掛けてキョトンとして居た。暫らくするとガタ／＼音をさせて古井さんがモドカシ相に入つて來た。

「何うしたのですアデライドさん？」

御飯と云ふのが解りませんか！

早くいらつしやい！』

之れは明瞭に解つたので楓は後に付いて行つた、久良子は自分の席に付いて待つて居たが、楓を

見ると親しげに挨拶をした。久良子は何時よりも嬉し相である。多分今日はウンと滑稽な事が有る

と思つてであらう。食事は大した故障も無く済んだ、楓はバンやバタを食べ度い丈け食べた。食事が

がすむと久良子は齊齋へ運び込まれた。古井さんは楓も同じ様に行く様に、そして神田先生が来て

御稽古が始まる迄久良子の傍に居れと命付けた。二人切りになると楓は直ぐ訊いた。

『どうしたら戸外が見えるの？ 此處では？』

『窓を開ければ見えるわ』

質問が妙なので久良子は面白く思つて答へた。

『ダツテ開かないもの！』

『えゝ夫りやあんたや私には開か無いわ。柴田が来て開けるのよ』

窓は開くし戸外は見られると聞いて楓は安心した。丸で牢屋にでも入れられて居る様な氣がして

居るのであつた。

久良子が楓の家の様子を尋ねるので、楓は山の様子、山羊の事、牧場の有様など平生自分の親し

んで居るものを説明して聞かせた。

其の内に神田先生が御出でになつた。古井は何時もの様に直ぐ書齋へ通さずに、一寸お話しがあ

ると云つて食堂へ案内して、大層昂奮した様子で自分の當惑して居る次第を物語つた。

古井は兼ねて巴里に滞在中の主人本間に手紙で久良子の勉強の御相手の必要な事を言ひ送つて

有つた。尤も之れは久良子の爲斗りでは無く古井自身にも大に必要な事であつた。實際病人の相手をするのは容易の業でなく、何時までも古井自身がやつ居ては溜らないからである。主人から返事が来た。其の終りに久良子が其の御相手を輕視する様では良くないから、萬事萬端久良子と同格に丁寧な取扱ひをせよと云ふ事が書き添へてあつた。

『斯んな條件を御書きにならずとも粗末にする筈は無いのですのに、久良子様と同格なぞと！』古井は尙ほ話を進めて其の御相手が来たが、案に相違した代物で、當家に來て以來行つた變的な様子を語つて、學問は全然ABCから教へなければならず、萬事の仕付も丸つ切り始めから仕込まねばなら無い、之れではとても一緒に稽古は出来ないし、無理にやれば御嫌様の爲にならないから其の旨を主人に言ひ送つて、楓を歸へして終はうと思ふ、就いては神田先生に其點を賛成して

頂いたき度たいとの旨むねを悉すつ一か述のべたのである。

ところが此この神田先生かんだせんせいと云ふのが仲々なか／＼考かんへ深い物事ものごとに偏へんし無い質たちの人ひとなので種々いろ／＼と古井ふるゐを慰なぐさめ

た、或點あるてんに於おて缺かけてゝも又他方またはかに長ちやうじた處ところがあるものだから、夫れそを上手じやうずに調和てうわしてやれば立派りつぱ

な人間にんげんが出来できるものと説とき聞きかせた。古井ふるゐは相手あひてがとても賛成さんせいして呉くれぬと見たみたので仕方しかたなしに

先生せんせいを書齋しよさいへ案内あんないした。が楓かへてのABCあーびーしーを聞きくがいやさじよんに自分しよさいは書齋はいへ入しよくだうらず食堂のこに残あつて居た。

食堂しよくだうを彼方あちこち此方あゆと歩なみ乍ふるら古井かんは考かんへて居た。楓かへてを僕達しもべたちに何なんと呼よばせたもんだらう。主人しゆじんの

手紙てがみでは久良子くらこと同格おなじに取り扱とへとあるのだから兎とに角僕婢丈かくしもべだけにでも左様さうさせなければならぬ

がと、種々いろ／＼考かんへて居ると突然とつせん書齋しよさいの方はうで酷ひどい物音ものおとがして續つづいて柴田しばたを呼よぶ叫おけび聲こゑがした。古井ふるゐは

何事なにごとが出来しゆつらいしたかと次つぎの室へやへ馳かけ込こんで見みると驚おどろいた。之こは抑おも如何いかに、卓子ていぷるの上うへの物ものは全部床

の上に打ちまけて有る。書物、習字帖、インキ壺、卓子掛、布の間からはインキが流れて室の隅までインキが飛んでゐる。

楓の姿は見えなかつた。

『まあ、何うしたんです??』古井は両手を握つて言つた。『卓子掛も! 本も! 編物の籠も! 何

もかもインキだらけ! 今迄に無い出来事です! え定まつてますとも。あの兒に違ひありません。

斯んな事をするのは!』

神田先生は黙つて床を見詰めて居る、久良子は可笑しくて溜らぬ様子であつたが

『左様よ、楓さんよ。だけど過失よ! 仕方が無いわ! 急に駆け出したもんだから卓子掛がカラ

マツたのよ。夫れで全部落ちちまつたんだから仕方が無いわ。馬車が澤山往來を通つたもんだから

窓の方へ馳け出したの。屹度馬車、んて見た事が無いんでせう！』

と一向平氣であつた。

『先生！ 夫れですから私が申し上げたんで御座いますよ。何もかも目茶苦茶なんで御座いますから！ 御稽古をして居るのか遊んで居るのか見境が無いんですからね。何處へ行つたんです？』

居なくなつては困りますが……』

古井は室を飛び出して階段を馳け降りた。見ると楓は戸口に立つて茫然として街を眺めて居る。『何んと云ふ事です！ 何故逃げるのですか？』と古井は楓に詰り掛つた。

『縦の樹の音がしたけれどももう聞えなくなつちやつた！』楓は馬車の通り過ぎた後を物足りなげに見送り乍ら云つた。馬車の軌る音を縦の樹に風が當る音と取り違へて急に嬉しくなつて馳け出した

のである。

『縦の樹？ 山の中ぢや有りませんよ！ 行つて御覽なさい。後が何んなになつてゐるか！』

古井の後に隨いて楓も階段を昇り室に遣入つて見ると此の有様なので楓は唯喫驚して居る。

『御稽古の時はチャンと腰を掛けて氣を附けてゐるものです。何うしてもヂツとして居られないのなら椅子へ縛り付けて上げませうか？』

『之れからヂツとして居る』と楓は答へた。縛ると云はれたのが氣になつたと見える。

柴田とお常どんとが來て片付け出した。今朝の稽古は夫れまでにして先生は歸へられたので、随れも欠伸の機會が無かつた。

午後になると久良子は暫らく憩む習慣で、楓は其の間自由だと今朝古井さんから言ひ渡されて

『だって古井さんが左様呼べと云ひなさるもの』

『左様？ そいぢやあ……………』

何事でも古井さんの言ふ通りにするものと信じて居るので、そんなら仕方がないと思つた。

『ぢやあ私は三つ名があるんだ……………』と消息を吐きながら云つた。

『そこで何御用？』

此の時には柴田はもう食堂の戸棚に匙類は納つて終つた。

『あのね……………何うして窓を開けるの？』

『窓を？ 斯うやれば……………』と柴田は大きな窓を推し上げた。

楓は窓の下へ行つたが、頭が辛つと手摺りの邊位までしか届かない。

『そうら、之れへ上ると見える。』と柴田は木製の踏み臺を引つ張つて來た。楓は大喜びで夫に上ると見えるは見えるは何もかも見えた。が直ぐ頭を引つ込ませて大層失望の體だ。

『なあんだ、往來はつかしだ！ 後ろの方には何があるの？』

『矢つ張り同じ事です』

『遠くの方まで見えるところ無いの？』

『左様され、遠くの方まで見えるのは……先づ向ふの教會の塔にでも上るんだね』

楓は之れを聞くと急いで臺を下り、室外へ飛び出し、階段を馳け下りて往來へ出た。先程窓から

見た時に塔が眼の前に見えたので、直ぐ向ふ側にある様に思つたが、出て見ると一向見え無い。向ふ側へ行つて見たが見えない。次の通りまで行つたが矢つ張り見えない。今少し今少しと塔が見え

た方向へ進んで行つた。けれども一向塔は見えなかつた。誰かに聞き度いと思つたが、往來の人は皆走る様に急いで歩いて居るので、聞く事も出来なかつた。次の街の角まで來ると男の子が一人立つて居た。小さな手風琴を背負つて變な物を持つて居る。楓は側へ馳け寄つて、

『塔は何處にあるの?』と尋ねた。

『知らない!』

『誰れに聞けば解る?』

『知らない!』

『教會知らない?』

『知つてら!』

『救へとくれな！』

『救へれば呉れる？』

男の子は手を出した。楓は衣囊を探つて赤い薔薇の花の繪を取り出して暫らく見て居た。實は今朝久良子に貰つた斗りなので、他人に遣るのは惜しかったが、さりとして肯々した低い所を見晴らす愉快さも拾て蘇かつた。

『さ！之れで良い？』と楓は繪を差し出した。

男の子は出した手を引つ込ませて頭を振つた。

『そいちや何が欲しいのさ？』楓は之れ幸ひと繪を衣囊へ入れて了つた。

『御錢！』

『御錢おとしなんか無いわ、久良子くらこさんに貰もらやあ有あるけれど。何程いくばく？』

『十錢せん！』

『御出おいでで、上あげるから！』

ふたりは連れ立つて長い街ながまちを歩いた。途中で楓かへでが男の子の脊負せおつてるものを尋たづねると、夫それは手風琴てふうしんで把手まを廻まはすと大層たいそう良い音ねが出でるとの事ことであつた。その中に高い塔たかたふのある教會けうかいの前まへに出た。

『此處こゝだよ！』

『何どうして入はいるの？』戸とが閉しめてあるので楓かへでが訊きいた。

『知しらない！』

『柴田しばたさんと呼よぶ時ときの様やうに鈴ベルを鳴ならせば良よいのかねえ』

『知らない！』

壁に鈴が付いてるのに氣が付いたので楓は力任せに夫を引いた。

『私が見て来る間待つてて御呉れ！ 良い？ 歸り途が解らないから！』

『待つてれば呉れるか？』

『何を？』

『もう十銭！』

内側でガチャ／＼音がして戸が開いた。老人が一人出て来て一寸驚いた様子であつたが、腹立し
るうこともたつて、
相に小兒達を見て、

『何だい？ 誰々、他を降りさせて！ 塔に登り度き方は』と鈴の下に書いて有るのが讀めないの

か！』

男の子は楓を指して黙つて居る。

『私、塔へ登り度いの！』と楓が言つた。

『何しに？ 何處から來たんだ？』

『遠くの方が見度いんだから』

『歸んな！ 今度惡戯をすると叔父さん承知しないぞ』左様云つて塔の番人は内へ入つて戸を閉め

様とした。楓は番人の裾をつかまへて『一生懸命だ。』

『後生だからよう！ 一遍だけ！』

番人は楓が餘り熱心に頼むのでいぢらしく思つたのか、

『そんなに見度いなら見せて遣るから御出で！』

男の子は戸口の石段に腰を掛けて自分は行き度くないと云つた。

楓は番人に手を引かれて登つた。階段が追々狭くなつて、最後が極く狭い梯子で、夫を登り切ると頂上であつた。番人は楓を抱いて窓に届かせて遣つた。

『さあ見な！』

下は見渡す限り唯之れ家根と塔と煙突との海であつた。楓は頭を引つ込めた。

『駄目だあ、違わあ……』

『違ふ？御前なんぞにや景色は解らないんだ。さ、降りな。もう今度から鈴を鳴すんぢやないぜ！』

番人は先へ立つて狭い梯子を下りた。

階段が稍廣くなり始め、處の左手に、番人の室があつて其の直ぐ側に床が家根の下へ少しせり出した處がある。其處に大きな箒が置いて有つて、其の前で灰色の大きな猫が唸つて居る。箒の中には兒が居るので人が通る度に唸るのである。楓には斯んな大きな猫は始めて有つた。此の古塔には鼠が澤山住んで居て毎日五六匹は譯無く捕れるから猫は營養が頗る佳良であつた。番人は楓が驚いて居るので、

『傍へ行つて猫の子を見ても良いよ。俺が居りや怒りやしない！』
 楓は箒を覗いて嬉し相な聲を出した。

『やあ！ ジヤレルよ！ 可愛いふねえ！』

箒の周りをグルグル廻り乍らキヤツキヤツと言つて喜んだ。箒の中には兒が七八匹も居てジヤレテ

居るのである。

『欲しけりや違ふぞ！』

『私に？ 呉れる？』楓は斯んな幸福は無い様に思つて夢中になつて眠く。

『良いとも、一匹でも二匹でも、皆な持つてつて呉れれば尙いゝんだ』

番人は貰ひ手があれば捨てずに濟むから其方が良いのである。

楓の喜は非常に斯んな可愛いゝのを持つて歸つたら久良子も何んなに喜ぶか知れないと思つた。

『何うして持つて行かうかねえ？』

早や兩手に纏んで皆持つて行く積りになつて居た。夫を見ると親猫は非常に怒つていきなり楓の腕

に飛び付いた。楓は喫驚して兒を離した。

『家が解りや持つて行つて遣る』と云ひ乍ら番人が親猫を慰める様にさすつて遣ると直ぐ泣く
なつた。

『本間様の御邸！ 大きな犬の頭が門の處に有る家！』と楓が説明して訊かせた。

詳しく云はずとも番人は良く知つて居た。

永年此の塔に住んで居て近處の事は熟知つて居る。柴田とも懇意であつた。

『知つてゐるよ家は！ 家は知つてゐるが誰に渡すんだい？ 御前は本間様の家の人かい？』

『うゝむ、左様ぢやないけど久良子様だつて嬉しがるよ、持つて行けば』

番人は承知して階段を下り掛けたが、楓は猫の兒を後にして離れ兼ねた。

「一匹か二匹持つて行き度いねえ、私が一つに久良子様が一つ。いけない？」

『良いとも。一寸待ちな』番人は親猫を自分の室へ入れて戸を閉めて來た。

『夫れぢや二つ持つて御出で！』

楓は嬉しくて堪らない。白と赤色の混りを二匹箆から出して右と左の衣囊へ一匹づゝ入れて階段を下り教會を出た。

男の子は表の石段に腰を掛けて待つて居た。

『本間様の御邸へ歸るのは何方だい？』

『知らない』

楓は門の具合や窓、石段の様子などを説明したが、男の兒は頭を振つて一向知らないらしい。

『ほら！ お窓から大きな白い家が見えるんだよ。御屋根がさ！』

楓は家根の形をして見せた。

男の子は飛び上った。何か探がす時には何時も斯んな風をするらしい。そしてドンドン駆け出した。楓も後に随いて駆け出したが間もなく二人は本間の邸の前へ来た。楓が鈴を鳴らすと直ぐ柴田が出て来たが楓を見て、

『早く早く』と言つて楓が内へ入ると直ぐに後を閉ぢて終つた。男の子の居たのに氣が付か無かつたらしい。『もう夕飯が始まつてますよ、古井さんが今にも破裂し相になつてゐるから！ 何んだつて豆さん逃げ出したのさね？』

楓は食堂へ入つた。古井は見向きもせず久良子も何も言はぬ。變的古だつた。楓が食事を始

めると古井は怖い顔をして厳格な口調で、

『後程ゆつくり御話をしますが今之れ丈け云つて置きます。今日の振舞は何事です。御断りもせず表へ行つて斯んなに遅くまで歩き廻はつて實に飛んでも無い事です』

『ニヤーゴ』

古井はカツとした。

『何ですか、アデライドさん！』一段聲を高めて『斯んなお行儀の悪い事をしてふざけてるので
すか？ 承知しませんよ！』

『ふざけてやしないの……』楓が云ひ掛けると又、

『ニヤーゴ、ニヤーゴ』

しはた かへてそばた 柴田は楓の傍に立つて居たが盆を食卓の上へ置いて飛び出して終つた。

「澤山そんな眞似をなさい」古井は口が利けない程怒つてゐる。

「此處に居てはいけませんつ。彼方へ行つて下さいつ」

楓は立ち上つて、

「ふざけてやあ……」と言ひ掛けると又、

「ニヤーゴ、ニヤーゴ、ニヤーゴ」

「何故古井さんをそんなに怒らせるの？ 猫の眞似なんかして？」と久良子が尋ねた。

「眞似してゐるんぢやないの。眞個の猫が此處に居るの！」辛つと楓が答へた。

「猫が？ 柴田さん！ お常や！ 猫が居るとさ！ 早く追ひ出してお呉れ！」と古井は叫び乍ら

自分は大意で書齋へ逃げ込み間の戸を閉めちまつた。古井は生來猫が大嫌ひなのである。柴田は先程楓の衣囊から猫の兒が顔を出して鳴き相にしたので、可笑しくて溜らすお盆を置いて室を飛び出したのであるが、呼ばれたので可笑しさを抑へてやつて來た。見ると久猫子は前垂で二匹の兒猫を抱え、楓は其側に蹲踞んで嬉し相に兒猫をじやらして居る。

柴田が入つて來ると久良子は、

『古井さんの見ない處へ置いてお呉れよ。古井さんは大嫌だから見付かると捨てられるから。居ない時丈け出して遊ぶんだからさ！ 何處か無い？』と頼んだ。柴田は早速承知した。

『良ござんす。箆へ入れて飼つて置きませう。御出しなさい。見付からない處へ置きますから！』柴田はクス／＼笑ひ乍ら持つて出て行つた。柴田は古井が猫を嫌がるので良い氣味だと思つて居

るのである。

『もう居ませんか？』と古井が間の戸を細目に開けて覗いた。

『えゝえゝ』と最早や、とつくに彼方へ運んで終つて食堂の片付けをして居た柴田はとぼけて返事をした。

古井は楓にゆつくり小言を云ふ積りで居たが、今夜は腹立つやら猫で驚いたり、餘り氣を用ひ過ぎて居たので叱る言は明日の事にして寢室へ引き退がつた。久良子と楓とは猫の兒が飼つてあると思ふので甚だ満足の體で各自寢床へ入つた。

第八章 大騒ぎの原因

よくあるしはた かんたせんせい しよるい めんない
型朝柴田が神田先生を書齋に案内すると間もなく、又鈴がけたたましく鳴った。斯んなに強く
鳴らすのは、てつきり主人が不意の帰宅に違ひ無しと階段を駆け降りて戸を開き、見ると主人では
無くて、手風琴を奪負うたボロ／＼の男の兒が立つて居る。

「なあんだ、そんなに強く引くなよ、何か用かい？」

『久良子さんに遇ひ度いんだ』

「何？ 久良子さんだなんて、生意氣言ふ無い、乞食の癖に。何用が有るんだ」 柴田は突劍鈍に尋ねる。

『二十錢貸しが有るよ』

『何うかしてゐるぞ此奴は。第一久良子様と云ふのが居るのを、どうして知つてゐるんだ』

「昨日、往き還りの途を教へて遣つたから兩方で二十錢貰ふんだ」

「馬鹿言へ、久良子様が表へなんぞ出られるかい、愚圖々々言つてると承知しないぞ」

「おどか 脅されても男の兒はビクともせず、平氣で立つて居る。」

「だつて往來に居たもの、髪かみの短みぢかい、後うしろの方が縮ちぢれてる、眼めの黒くろい、膚とびいろ色の着物きものを着た………」

さてはと柴田は氣が付いて可笑しくなつた。

「夫そりや豆まめちやんの事ことだろ、御茶おちやびいな」

柴田は男の兒おとこを中なかへ入れて、

「解わかつたから還もどはしてやるが、戸口とんちの處ところで待つて居る、俺おれがで出でて來くる迄まで。中なかへ入はいつたら何なにか奏ひいて

聞きかせるんだぞ、御慰ごなぐさみに」

柴田は二階へ上り書齋を開けて、

『男の兒が来て久良子様に御目に掛り度いと言つて居りますが……』と傳へた。久良子は稽古の途切れるのが何より嬉しい。

『連れて来て御呉れ、先生良いでせう、遇ひ度いつて言ひますから』

男の兒が入つて来て早速風琴を始めた。古井は、楓のABCを聞き度く無いので、食堂に居り、何かと用事をして居た。が急に樂の音が耳に入つた。はて往來でやつてるのにしては大層近く聞へる、と云つて書齋で今頃風琴の音のする筈もなし、然しどうも左様らしいと隅の方から聴け足で間の戸を開けて見ると、室の眞中でボロを着た男の兒が一生懸命に手風琴を廻はして居た。古井は夢かと斗り驚いた。神田先生は何か言ひ掛けたが止めた。久良子と楓とは聞き惚れて

居る。

「いけませんッ、いけませんッ」古井は叫んで見たが風琴の音で聞えない、仕方が無いので男の兒の傍へ行かうとすると足に何やら觸つたので、ひよつと見ると、いや氣味の悪い物が床を匍つて居る。龜の子みたいなものだ、古井は空中へ躍り上がった。よく斯んなに高く飛び上がったと思ふ程に躍り上がった。

『柴田さん、柴田さん』と聲を限りに呼ばつた。此の聲で風琴が止まつた。柴田は半開きの戸口で古井が飛び上つた格好を見て痛快を感じて居たが、呼ばれたので入つて來た。古井は椅子に身を支へ乍ら、

『出してお呉れ、出して御呉れ、男の兒も直ぐ』と叫んだ。

柴田は御仰せに従つた。男の兒は手早く龜の子を攫んで外へ出た。

『そら、久良子さんのが二十錢、風琴が二十錢、旨かつたぞ』と云ひ乍ら柴田は何やら男の兒に握らせた。

書齋が辛やく靜かになつたので、又稽古を始めた。古井は自分が居ないと又今の様な事が有つてはならぬと、書齋に陣取つて、稽古が終つてから此の事件を充分取調べねばならぬと思つて居た。

間もなく又柴田が來て久良子様に大きな龜が届いた趣を傳へた。

『私に？』久良子は一寸驚いたが物珍らしく思ひ、『持つて來ておくれ、何んだらう。』

柴田は蓋のしてある籠を運び入れ急いで室を出た。

『御稽古を済ませてからが良しいでせう』と古井が言つたが、久良子は何が來たのか早く見た相な

目付をして居た。

『先生』久良子は一寸言ひ淀んで、『一寸見ても良いでせう。見てから又勉強しますから』と言つた。

『左様ですな、一方から申せば良いですが、又一方から申せば良くないです。尤も其の方に氣を取られる様なら……』

神田先生が未だ言ひ終らぬ内に、元々蓋が確かりして無かつたのだから、突然ビヨコリと猫の兒が出た。ビヨコリ、ビヨコリ後から後から飛び出してチヨコ／＼室中へ猫の兒が散らばつた。神田先生の靴の上へ上る、洋袴へ嚙り付く、古井の裾に攀ち登る、足を引つ振く、久良子の椅子へ飛び上がる、掻きむしる、匍ひ廻はる。ニヤゴ／＼ニヤゴ／＼大變な騒ぎになつた。

久良子^{くらこ}はとても嬉^{うれ}しくて溜^{たま}ら無い。

『あら、飛^とぶわ、楓^{かへて}さん、そつちへも、あら此方^{こつち}へも、まあ御覽^{ごらん}なさいよ。』

と大^{おほ}ばしやぎだ。楓^{かへて}も嬉^{うれ}しがつて彼方^{あつち}の隅^{すみ}、此方^{こつち}の隅^{すみ}と追^おひ廻^まはす。神田^{かんだ}先生^{せんせい}は教授^{けうじゆ}も出來^でず、足^{あし}にからまる猫^{ねこ}の兒^こを一つ一つ取り離^{はな}して居^ゐる。古井^{ふるゐ}は餘^{あま}りの氣味^{きみ}惡^{わる}さに始^{はじ}めは口^{くち}も利^きけなかつたが此處^{ここ}に至^{いた}つて大^{おほ}に勇^{ゆう}を鼓^こして、お常^{つね}どんと柴田^{しばた}とを連呼^{れんこ}した。尤^{もつと}もからみ付^つかれるのが恐^{おそ}しさに梅^い子^すから立ち上^あがる勇氣^{ゆうき}はない。

柴田^{しばた}とお常^{つね}どんとは聲^{こゑ}に應^{おう}じて馳^かけ付^つけ、一つ一つ筈^{はず}の中^{なか}へ入^いれて前夜^{ぜんや}作^{つく}つて置^おいた猫^{ねこ}の寢床^{ねどこ}へ持^もつて行^いつちまつた。

今日^{けふ}も欠伸^{あくび}をせず^すに済^ゆんだ。夕方^{ゆふがた}になつて、辛^かつと古井^{ふるゐ}は氣分^{きぶん}が恢復^{くわいふく}したので柴田^{しばた}とお常^{つね}どんと

を斎齋しやうさいに呼よんで、今朝けさの事件じけんを調査てうさした。其結果そのけつこく總ての原因げんいんは楓かへてが前日ぜんじつ外出ぐわいしゆつした事ことにあると解わかつたので、古井ふるゐは青あせくなつて怒おこつた。僕婢ぼくひには手眞似てまねで室へやを去されと命めいじ、久良子くらこの側そばに立つて一向無邪氣かうむじやきで居ゐる楓かへてに向き直なほつた。

「アデライドさん」と調子てうしが大層たいそう嚴格げんかくだ。「あなたの様やうな亂暴者らんぼうものは御仕置きおしおきのため穴藏あなぐらが良いでせう。眞暗まつくらな、蟻とかけや鼠ねずみの澤山たくさん居ゐる、左様さうしたら驚こりるでせうから。」

楓かへては此せんこくの宣告かいを大して驚おどろかすに聞きいた。穴藏あなぐらと云いふものが、そんな恐ろしい處ところだとは思おもつて居ゐない。山爺やまぢやぢの家いへにも穴藏あなぐらが有あつたが、乾醋ちうずや乳ちいの貯藏場ちようさうばで、蟻とかけだの鼠ねずみだのは一匹ひきも居ゐなかつた。ちつとも様いやな處ところでは無なかつた。久良子くらこは反對はんたいだつた。

「御父様おとうさまの御歸りおかへまで待たなけりやあ不可いけないわ。直ちきに御歸りおかへになるつて手紙てがみが來たんだから、

御歸りになつたら私が御話して定めるわ。』此の決定に對して古井は何んとも抗辯はしなかつたが、椅子を離れながら、

『ハイ、ハイ、結構で御座います。然し私も旦那様には申し上げる事が御座りますから……』と厭味を残して室を出た。

其後二三日は穩であつた。然し古井は相變らず楓で困つて居る。何うも楓が來て以來何事も昔通り旨く行かないのであつた。

久良子はお相手があるので勉強の時も怠屈せず、時間が早く経つ様で喜んで居た。楓はABCから始めて居るのだが一向覚え無い。先生が記憶を助ける爲に角や嘴の形などで格好を教へると、『やあ山羊の角だ』とか『鳶の口だ』とか云つて大層喜ぶが、折角の説明も、唯山家時代の記

憶おもひよを呼よび起おこすに過すぎないので字じの方ほうは一向かう覺おぼえ無なかつた。

何時いつも夕ゆふ方がたち近かへてくになると楓かへては久良子くらこの傍そばで山住居やまずまるの話をはなしする、終しまひには屹度夢中きつとむちゆうになつて、

『もう山やまへ歸かへる、明日あしたは屹度歸きつとかへる。』と云いつては泣なき出だすのが常つねである。慙かういふ時ときには御父様おとうさまが御歸かへりになると何なんとか極きまるからと久良子くらこが慰なぐさめて居ゐた。

楓かへてが此處ここに居ゐて一たのつ樂たのしみといふのは毎日二個づまいにちこの卷麵まきばんが貯たまつて行ゆく事ことであつた。食卓ていぶるに向むかつても辨太べんたの祖母そばが固かたい黒麵くろばん麴たを喰たべて、可哀想かあいさうだと思おもふと自分じぶんで喰たべる氣きが出でず、そつと衣い袵せまに入いれて終しまうのである。

午後ごごは二時じかんぐらゐ間位ひと獨へやりゐで室むろに居ゐる。戸外そとへ出でる事ことは禁きんじられてゐるから決けつして出でない。柴田しばたとも話はなしてはならぬと言いはれてゐるから口くちを利きが無ないで居ゐる。お常つねどんは常時いつも邪劍じゃけんな侮辱よじよくする様やうな眼めをし

て見るので全然口を利く氣が出なかつた。ちつとして居れば思ひは、いつか山の生活の記憶を辿り出す、山が段々青々して來たらう、あの黄色い花がもう咲いたかしら、雪の景、彼方此方の山、麓の景なぞを考へて行くと、とても我慢が出来なくなる。叔母が嫁なら何時でも歸れると言つた事を忘れ無い。

或る日の事であつた。例の巻煙籠を取り出して大急ぎで己が赤い手巾に包み込み、藁帽子を被つて山へ歸るべく戸口を出やうとすると、今しも散歩から歸つて來た古井にばつたり出遇て終つた。古井は立ち止まつて其の身姿を見て居たが、特に眞赤な手巾が眼を引いたらしかつた。

『何處へ行くのです。其の姿は何んです。表をうるつき廻つては勿けないと言つて有るのに、又しても宿無し見たいに、ほつつき歩かうと思つて。』

『ほつつき歩くんぢや無いの。私、家へ歸るの。』

楓は恐る恐る答へた。

『何ですつて、家へ、家へ歸り度い？』古井は口惜し相に手を揉みながら、『逃げて歸つたなんて旦那様に聞え様もんなら、それこそ大變。何が嫌なんです、斯んなに丁寧にされて何が不足です。今まで斯んな立派な取扱ひを受けました事がありますか？』

『無い。』

『それ御覽なさい。何一つ不自由もないのに、ほんとに、こんな恩知らずは有りませんよ、有難い身分で居るのに。』

そこで楓は溜まつて居た不平を悉く發表した。

『わたし、山の方が良い、山羊が待つてゐるし、祖母さんが待つてゐるし、此處ぢや夕方になつたつて御日様が寝に行くのが見えやしない、まだつて止まる岩が無いし、大勢人が居るから嫌がつてゐる……』
『まあ氣違ひだよ此の兒は。』

左様言ひ乍ら古井は矢の様に階段を駆け上がると、丁度土から降りて來た柴田といやと言ふ程鉢合せをやつた。

『直ぐ引つ張つて來て御呉れ』と言ひ付け乍ら觀の瘤をさすつた。

『は、いや、私は何とも御座いません、はつ。』

柴田は面食つて答へた。柴田の方がずっと痛かつたらしい。

楓は月口に立つて眼をパチ／＼させて居たが興奮して居ると見えて體が震へて居た。

『何うした譯さ』と柴田が元氣良く尋ねたが、楓は頑として居るので肩を撫でて遣り乍ら、
 『豆ちゃん、そんなに怒る可からず。機嫌を直し給へ。古井奴が石頭を僕に打ちつけてね、痛か

つたよ。二階へ連れて行けとさ。』

楓は嫌々二階へ上つた。常時に似ずのそくと上つた。柴田は可哀想に思つて種々と慰めて遣つた。

『よし給へ萎れるのは。大に勇氣を起し給へ、豆ちゃんは今まで泣いた事なんぞ無いんだからなあ。』
 他處の子供は年中泣いてるよ。猫の兒も二階で飛び廻つて遊んでるし、後で一緒に見に行かうね。』
 楓は微かな合點して自分の室へ戻つた。如何にも萎れて居るので柴田も可憐に思つて見送つて居

た。

ばんしよく、せむまたなに、せんだいみもん、ちんじ
晩食の席で又何か前代未聞の珍事でも仕出かしはせぬかと、古井は折々鋭い視線を楓に投げて居たが口は利か無かつた。楓は小鼠の様に不動として食卓に向ひ身動きもしなかつた。飲みもせず、食ひもしない。但し麵麩丈けば、とつくに衣裏へ入れて居た。

よくてうかんだせんせい、み
翌朝神田先生が見えろと、古井は食堂へ呼び入れて、楓に關する自分の心配を告げ、氣候の變化や慣れない生活、其の上新しい印象を多く受けるので氣が變になつてゐるのでは有るまいかと、昨日逃げ出さうとした事や其時の楓の言つた事を残らず話した。

しか、かんだせんせい、ふるゐ、なぐる、かへで、ちよつとじやうしき、ところゐ、また、ぼつ、みどころゐ、いそ
然し神田先生は古井を慰めて、楓も一寸常識を缺いた處が有るが又一方に見處も有るから急がず親切に導いて違れば屹度立派になると云つた。尤も未だABCも覚え込まないのだから先生も可なり氣遣ふては居た。

ふるる せんせい はな いくぶん おちつ せんせい しよまい あんない こと 午後になつて昨日 楓が 出掛ける
 古井は先生に話して幾分か落付き、先生を書齋へと案内した。午後になつて昨日 楓が出掛ける
 時の身姿を思ひ出し、主人も歸るしするから、久良子の古物で少し姿を直さすばなるまいと思ひ、
 くらこ さうだん くらこ さんせい たくらんわ い ふるゐ と かくかへて いるゐ せいり
 久良子に相談すると久良子も賛成で澤山分けてやると云ふので、古井は兎に角 楓の衣類を整理す
 べく戸棚の検査に出掛けた。暫らくすると呆れ返つて戻つて來た。

『まあ呆れましたよ。衣物を入れる戸棚の奥に、久良子さん、麵飽が山の様に隠して有るんです。』
 『お常や』食堂の方を向いて呼ばつた。『戸棚の中の古麵飽を皆捨てて御呉れ、古い薬帽子も。』
 『勿けないよ、勿けないよ、帽子は要るんだ、麵飽はお婆さんに遣るんだ。』と 楓は叫び乍らお常
 の後を追ひ掛け様とするのを古井は捕へて、

『此處に居るんです、戸棚は芥溜ちや有りません。』と楓を引き戻した。楓は久良子の椅子の側へ泣

き臥して大聲で泣き出した。

『お婆さんに遣る麵麴が無くなる……お婆さんに遣るんだ！ お婆さんに遣るんだ！』

全然死に相な聲をして喚くので古井は居たたまらずに逃げ出す、久良子も途方に暮れた。

『楓さん、そんなに泣くのお止しなさいよ、ねえ。楓さんてば、良いのよ、麵麴は私が上げるわよ。』

もつと澤山上げるわ、古いのなんて食べられやしないから、ね、だから泣くのお止しなさいよ。』

久良子が遣ると云ふので、やつと泣き止んだ。さもなければ、何時まで泣いてるか譯ら無かつた。

夫れでも氣になると見え幾度も念を推す『屹度呉れる、お婆さんに？ 私の持つてた丈け。』

『え、え、屹度上げるわ、もつと餘計上げるわ、だから良いでしょ。』

楓は眼を赤くして夕食の席に着いたが自分の前の麵麴を見ると思ひ出して又泣き掛けたが、ぢ

つと我慢がまんをした。食事しょくじの時の行儀ぎやうぎも多少たせうは會得くわいとくしたと見える。

柴田しばたは楓かへての傍そばに近ちかづく度たびに大層意味有たいそういみあるりげな身振みよりをした。

『大丈夫だいぢやうよ、僕ぼくが承知しょうちしてゐるから』と言いはぬ斗ばかりの風ふうをして見みせた。

其その夜楓よかへてが寝ねやうとすると蒲團ふとんの下したに鐵てつくちやになつた自分じぶんの葉帽子わらばうしが入はいつて居ゐた。楓かへては大喜おほよろこびで取出とりだし一層小そうちひさく折せり疊たまんで、手巾はんけちで結むすび戸棚とだなの奥おくへ推おし入いれた。之これは柴田しばたが入はいれて置おいたのである。今日食堂けふしよくだうで古井ふるゐがお常つねに言いひ付つけた時とき楓かへてが泣ないて騒さわいだのを聞きいて居ゐたので、聽きてお常つねである。今日食堂けふしよくだうで古井ふるゐがお常つねに言いひ付つけた時とき楓かへてが泣ないて騒さわいだのを聞きいて居ゐたので、聽きてお常つねである。

が古廻籠ふるばんを山やまの様やうに積つんで其その上うへへ葉帽子わらばうしを載のせて捨すてに出でる處ところを、

『之これは僕ぼくが仕末しまつするよ。』

と帽子ぼうし丈だけ取とつて、楓かへてに返かへして遣やつたのである。食堂しょくだうで種々身振いろ／＼みよりで説明せつめいして居ゐたのは此この事ことで

あつた。

第九章 主人の歸宅

二三日経つて本間家が急に賑かになつた。主人が旅行から歸つたのである。柴田とお常とは着いた荷物を受け取つて二階を上つたり下つたりして大騒ぎで有つた。

本間は何より先に娘に遇ひに行つた。丁度午後の事であつたので、例の通り楓が傍に居た。久良子は温良しく父に挨拶をした。久良子も父を慕ひ、父も久良子を大事にして居る。楓が隅の方に引き退つて居るのを見て本間は優しく、

『之れは多分あの見たろ、もつと此方へ御出で、ふむ、ふむ、それで二人とも仲が良いかね。喧嘩

なしたり意地悪いぢわるなしたりなぞせんかねえ？」

『久良子くらこさんは親切しんせつだ。』と楓かへでいが云ふと、

『楓かへでさんと喧嘩けんくわなんて仕た事こと有りませんわ。』と久良子くらこが付け加へた。

『左様さうか、それは結構けつこうだ。』父親ちちやうたは立ち上り乍ら、『御父様おとうさまは一寸食事ちよつとしよくじをして来るよ、今日はまだ何

も喰たべないんだから、後で種々あといろくなものを見せて上げやう。』

古井ふるゐは食堂しょくどうで準備じゆんびをして居たが、本間ほんまが席せきに着くと、物思ものおもはしげな顔かほをして向ふ側むかがはに掛けた。

『古井ふるゐさん、何か有なるのかね。歸かへつた時から何なんだか困こまつた顔かはつ付きをして居るが、久良子くらこも丈夫ぢやうぶだし

と……』

『實じつは、』古井ふるゐは此處ここぞと眞面目まじめになり、『實じつは久良子様くらこさまに關くわんしました事ことで、私達わたくしたちは全く欺まづされま

した。」

『何を。』主人は珈琲を啜り乍ら落付いて居る。

『欺されたんで御座います。申上げました通り、久良子様の御相手に就きまして、正直で氣高くとの御言葉も有りますから、山育ちの方が都會の土を踏まないで良からうと存じまして瑞西生れの兒を撰んだんで御座います。』

『瑞西生れだつて、都會の土を踏まないとは限るまいが。』

『いえ、その、山育ちの者は氣品が高く御座いますので。』

『だつて餘り氣品が高くつちや久良子の相手が出来んだろ。』

『まあ御聞き下さいまし、一生懸命に搜したんで御座います。ところが全然欺されまして。飛ん

でも無い者が。』

『左様かれ、私の見たところでは然んな飛んでも無い兒の様に見えんがね。』本間は平氣で居る。

『いえ、夫れが、何んで御座います。御留守中にあの兒が連れ込みました人間や獸の事を申上げま

せば、成程と御思ひになります。』

『獸物な？ 何の事だか私にや解らんね。』

『全く解らないんで御座います。氣が違つて居るのかと存じます。』

此の時まで本間は平氣で居たが「氣が違つてゐる」と聞いて大事の娘の御相手だから聞き捨てにならず、急に眞劍になつて、ちつと古井を見た。丁度此の時に戸が開いて神田先生が案内されて來た。

『丁度良い、神田先生から良く御聞き下されば』と古井が云つた。

『神田さんに珈琲を上げな、何卒御緩ぎ下さい。早速ですが、久良子の相手に來た娘ですな、何う云ふ具合ですか、何か歌を連れ込んだとか言ふが一體何んの事ですか。』

神田先生は先第一に本間の無事歸宅の祝詞を呈する積りで居たのだが、質問故己を得ず、

『彼れの件につきまして、腹藏なく申しますと、教育の不足から適當な發表の仕方を知りません爲めに稍々手緩い處が有りますが又一方から言へば性質は善良なる者で、それがと云ひますと、山中の生活を久しくやりました爲めに……』

『神田さん』と本間は違つて『大層遠廻はしの御話ですが、私が御尋ねしたいのは歌を連れ込んだ一件で、又娘の相手として何うか伺ひ度いのです。』

『いや、決して不都合だとは申さんので。』と神田先生は又演説を始める、『つまり今日までの教育

が不^ふ充^{じゆう}分^{ぶん}の爲^{ため}め當^{たう}地^ちに參^{まゐ}らるる迄^{まで}の間^{あひだ}に……………」

『神^{かん}田^ださん、いやよろしい、一寸^{ちよつと}娘^{むすめ}に用^{よう}事^じが有^ありますから失^{しつ}禮^{れい}します。』と言^いひ残^{のこ}して本^{ほん}間^まは食^{しょく}堂^{だう}

を出^でて、書^{しょ}齋^{さい}へ行^ゆき娘^{むすめ}の傍^{そば}へ腰^{こし}を掛^かけ、

『あ^あのれ……………あ^あの……………』本^{ほん}間^まは楓^{かへて}を一^{ちよつと}寸^と去^さらせ度^たいので、

『あ^あの……………水^{みづ}、水^{みづ}、水^{みづ}を一^{はい}杯^{ぱい}持^もつて來^きておくれ。』と楓^{かへて}に言^いつた。

『汲^くみたての?』

『然^さう、然^さう汲^くみ立^たて、汲^くみ立^たて。』楓^{かへて}は出^でて行^いつた。

『久^く良^ら子^こや』本^{ほん}間^まは椅^{いす}子^すを近^{ちか}付^{かつ}け、娘^{むすめ}の手^てを握^{にぎ}り乍^{はが}ら、『あ^あの兒^こが歌^{うた}を引^ひき入^いれたと云^いふのは一^{たい}體^と何^{なん}

う云^いふ事^{こと}かお父^{とう}様^{さま}に明^{めい}瞭^{りやう}聞^きかしておくれ。夫^それに古^{ふる}井^ゐがあ^あの兒^こは氣^きが變^{へん}だと云^いふが其^その事^{こと}も。』

久良子は總ての事情を承知して居たから一切の成り行きを説明し聞かせた。龜の子の件、猫の
兄の件、全部を報告すると本間は腹を抱へて笑つた。

『あはゝ左様か、そんなら別に暇をやる必要も無い。御前も嫁では無からうな。』

『えゝ、ちつとも嫁ぢや無いわ。毎日何かしら有るから怠屈をしないで眞個に良いのよ、種んな話
もして呉れるし。』

『左様か、宜し宜し、そら歸つて來た。水を汲んで來たかね。』

楓はコップを差出して、『井戸から汲んで來たの』と言つた。

『自分で汲んで來たの?』と久良子が訊く。

『え、自分で汲んで來たの、遠くまで行つたわ、傍の井戸には大勢居るの。それから向ふ通りの井

戸まで行^いやて來^きたの。髪^{かみ}の白^{しろ}い人^{ひと}が本間^{ほんま}さんに宜^{よろ}しくつて。』

『左様^{さよう}か、道理^{だうり}で旨^{うまい}い譯^{わけ}だ。其^その人^{ひと}は誰^{だれ}だろ。』

『其^その人^{ひと}はね、井戸^{いど}の傍^{そば}を通^{とほ}つて、コツプを持^もつてゐるなら一杯^{はいの}吞^のませて御吳^{おく}れつて、それから誰^{だれ}の處^{ところ}へ持^もつて行^ゆくんだつて聞^きいたから、本間^{ほんま}さんの御邸^{おやしき}だと言^いつたら大^{おほ}きな聲^{こゑ}で笑^{わら}つて、宜敷^{よろし}く言^い

つて御吳^{おく}れ、本間^{ほんま}さんは僕^{ぼく}を知^しつてゐよつて。』

『誰^{だれ}だらう、何^どんな人^{ひと}だれ。』

『あはゝ笑^{わら}ふ人^{ひと}、金^{きん}の鎖^{くさり}に大^{おほ}きな赤^{あか}い石^{いし}が付^ついてて、杖^{つゑ}に馬^{うま}の首^{くび}が。』

『あゝ、醫者^{いしや}だ。』『私^{あたし}の掛^かつてゐる御醫者^{おいしや}様^{さま}よ。』父^{ちち}と久良子^{くらこ}と二人^{ふたり}が言^いつた。そして本間^{ほんま}はクスクス

笑^{わら}つて居^ゐた。

其の夜本間は、食堂で古井と家事の相談をした時に、楓は性質も宜し、久良子とも大層親しんで居るから當家に置く事にすると告げた。

『そこでね』と本間は言ひ足して、『成る可く大事にして遣らにやいかんが、若し君一人では彼れの世話まで仕切れんかも知れんが、母も其の中に當分泊りに來ると云つてゐるから又何かと面倒を見て遣るだらうから。』

『其の事は何つて居りました。』と古井は言つたが、隠居の來る事は決して嬉しくもない様子だつた。本間は永く自宅に居られなかつた。二週間斗りで巴里へ行かねばならなかつた。娘が淋しがるので、祖母様が直きに來るからと慰めて出發した。

本間と入れ違ひに手紙が來て、隠居がホルスタインの本宅を出發した旨を傳へて來た。多分明

日は當地へ着するから停車場まで馬車を廻はして置く様にとの事であつた。

久良子は大喜びで其夜楓に祖母の事を色々話して聞かせたので、楓も一緒になつておばあさん、おばあさんと呼んで居た。古井は厭な顔をして見て居たが、古井の厭な顔は見馴れて居るので、楓は平氣であつた。それでも寝る前に一寸古井に呼ばれて、『おばあさん』と言つてはいけない、『御母堂様』と言へと教へられた。

『解りましたか』と念を推されて、實は御母堂様の意味が良く解らなかつたが、古井の嚴しい顔付きに聞き返さずに終つた。

第十章 御母堂様

翌日の夕方本間家では一同が隠居の到着を待つて居た。雇人まで他處行きの身姿りをし、極めて丁重な準備をして居た。古井は各室を廻つて手落ちの無い様に検閲をやつた。例へば家の副將軍が来るにしても私の権力に変化は無いと言はぬ斗りに、反身になつて歩いて居た。

戸口に馬車の響がしたので、柴田とお常どんとは階段を馳け下りた。古井は容態振つて、故意と靜かに後から下りた。楓は呼ばれるまで出るな、隠居は先づ久良子丈けに遇ひ度いで有らうからとこの事で自分の室の隅に腰を掛け、『御母堂様』を稽古して居た。間もなくお常どんが戸口から頭を差し込み、例のいけぞんざいな調子で、

『書齋へ御出でなさい。』と云つた。楓は隠居に何んと挨拶して良いのか聞いて置かなかつたが、書齋の戸を開けると隠居の方から親しげに、『おゝ良く來たね、もつと此方へ來て顔を能く見せてお呉

れ。」と云つたので楓は傍へ寄り怯氣もせず、

『御母堂様今日は。』とやつた。

『ほう。』隠居は笑ひ乍ら、『山に居た時にも、誰かを左様呼んで居たのかね。』

『うむん、そんな名の人には居なかつた。』楓は眞面目になつて答へた。

『此の家にも左様云ふ名前の人には居無いよ。』隠居は尙笑ひながら愛らしげに楓の頬を撫で、『私は老人だからおばあさんと御言ひ、解り良いからね。』

『其の方が良いや、今までだつておばあさんて言つたんだから。』

『ほう。左様、左様。』隠居は楽しげに頷いて楓を見た。見ては又頷いてた。楓も隠居をつくづく見た。隠居の顔には眞實の優しさが籠つて居るので、夫れが子供心に感じるのであらう。髪は白く

つたが『寝て居るのか知ら』と言ひながら、古井の室へ行つて見た。古井は突然の御來臨に少くも驚いた。

『あの兒は何處に居るね、何かして居ますかね。』と隠居が尋ねた。

『自分の室で何かやつて居るので御座いませう。爲だすと夢中ですから。いゝえ、もうお話しになりません、下らぬ事をして居ります。』

『誰しも左様ですよ、私にしても獨りで居ると人様が見れば下らないと思ふ様な事をして居ますから。一寸連れて来て下さい、本を遣りますから。』

『駄目で御座いますよ、本などお遣りになりましたも。神田先生に御聞きになれば解りますが、まだABCも覚えませんのですから、神田先生ですから辛棒して教へて居らつしやるので御座います。』

よ。』

『へえ、そんな低能児ていのうじの様ようには見えませんがね。兎とに角連かくつれて來て下さい、繪え丈だけけでも見みせて遣やり
ますから。』

あるなほなにぞといふ古井ふるゐは尙何事なニゴトイが言いはうとしたが隱居いんきよが室へへ歸り掛けたので止めた。隱居いんきよも楓かへてが低能ていのうだと聞きいて
驚おどろいた。神田かんだし氏の人物じんぶつは充分信用じゅうぶんしんようして居るが、兎とに角自分かくじぶんで試ためして見みやうと考かんがへた。

楓かへては隱居いんきよの室へへ行き、大きな本を開けて熱心ねつしんに繪を見みて居たが、隱居いんきよが次の頁つぎのぺーじを開けると楓かへてはあ
つと言いつたが、急きふに涙なみだをぼろ／＼流ながして啜すいり泣なきを始はじめた。夫それは緑の牧場みどりまきばの繪えで、青々あせくした草くさの
上うへで多おほくの家畜かちくが草くさを食たべ眞中まんなかに羊飼ひつじかひが長ながい杖つゑを突ついて獸けものの遊あそんでるのを眺ながめて居る。全體ぜんたいに夕
日ひが黄色きいろの光ひかりを投なげてゐる繪えなのであつた。

隠居は、楓の手を取つて。

『何うした、何うした、泣くでは無い。繪を見て何か思ひ出したかれ。之は面白い御話しなのだよ、今夜私が話して聞かせませう。此の本の中には面白い御話が澤山あります。さ涙を拭いて、ちやんとして、左様、左様、もう直つたね。さおばあさんと何か御話しなませう。』

楓はどうやら泣き足りない氣がするが、隠居は頻りに機嫌を取つた。

『もう良い、もう良い、もう直つたね。』

辛つと元の通りになると、

『さ御話を始めませう。先生に何を習つて居るね。聞かして御呉れ。何を覺えたね。』

『何にも覺えない、六敷いから。』

『六ヶ敷い、何うして？』

『六ヶ敷いから誰も覚えられないの。』

『誰も？ 何うして。』

『辨ちやんだつて、六ヶ敷くつて何も覚えないつて。』

『辨ちやん、成程ね、然し辨ちやんは辨ちやんでしょ。御前は辨ちやんの眞似をしなくつても良い

のですよ。覚えられないと始めから極めて、先生の言ふ事を聞いて居ないんでせう。左様でしょ？』

『役に立たないから。』楓はよくよくあきらめた様に云ふ。

『ははあ、お前は辨ちやんの言つた通りを信じて居るのだね。之れからは私の言ふ事を信じるので
すよ。左様すると直きに覚えます。辨ちやんは覚えなくつても他處の子供は皆良く覚えます。御前

も屹度覺えられます。左様すれば面白い本が澤山讀めます。今の牧場の繪を見たら、中の字が讀める様になつて自分で讀んで見れば、どんなに面白いか知れない。讀み度く無いのね。」

楓は眞剣になつて聞いて居た。

『今直ぐ讀み度いなあ。』

『讀めますとも、直きに、さ、これから久良子の處へ此の本を持つて行きませう。』

隠居は楓の手を取つて書齋を出た。何時ぞや逃げ出さうとして古井に叱られた時以來今日まで

の様子で、叔母はあゝ言つたが山の家へは歸れぬものといふ事が楓に解つた。無理に歸れば本

間は勿論の事、久良子にも隠居にも、それこそ恩知らずになると云ふ事も良く解つて來たので、決

して家へ歸り度いと云ふ事は口へ出さなかつた。然し心の内には言ひ知れぬ辛さが有つて、顔色も

悪くなり、夜も眠れぬ勝ちになつた。獨り限りで静かになると、忽ち眼前に現はれるのは日光を受けた彼方此方の山、草花の姿である。寢れば赤い峯や雪の原が夢に入る。朝起きても山に居る氣で戸外へ飛び出さうとして、此處は遠く離れたフランクフルトと氣が付いて人知れず枕を濡らした事さへ屢々であつた。

楓の様子は隠居が氣付かぬ筈はなかつた。今の萎れた心持ちが直つたら、何か其處に今までと變つた新しい氣分が起る事と、待つて居たが一向變化が來ない。時には朝なぞ泣いて居た形跡の見える事すらあるので、或る日己が室に呼び入れて優しく問ふた。

『楓や、近頃何うかしたかれ、何か悲しい事でもあるのかい。』

楓の心では若し夫れを話すと此の人にまで恩知らずだと思はればせぬかとの懸念がある。

『私言へない。』

『言へない、久良子にも言へないかい。』

『誰れにも。』ときつぱり言つたが如何にも悲し相なので隠居は不憫に思ひ、

『よし、よし、私が良い事を教へて上げませう。誰れでも悲しい事が有つて他に言へ無い時はね、

天にあらつしやる神様に御話をすれば屹度其悲しみを取つて下さるのです。毎晩神様に御祈りを

しますかね。』

『そんな事したことないわ。』

『無い、御祈りと云ふ事を知らないの？』

『死んだ祖母さんに教へて貰つたけど、もう忘れちゃつた。』

『御前が悲しいのは神様の御助けを知らないからです。誰も慰めて呉れ無いでも神様に御願ひさへすれば屹度幸にして下さる。御祈りは實に大切です。』

楓の顔には喜びの色が現はれた。

『何でも良いの？ 御願ひして。』

『良いとも何事でも。』

楓は隠居に握られた手を離して、

『私 御室へ行つても良い？』

『あゝ良いとも。』

楓は己が室へ馳せ歸り臺に腰を掛け手を拱いて心の願を神に捧げた。どうぞ家へ歸して祖父

さんに遇はして下さいと一生懸命に願った。

そのとき
其時から一週間餘りも過ぎた或る日、神田先生は隠居に面會を求めた。隠居は喜んで己が室へ
案内して丁寧に、

『よく入らつしやいました。何か改まつた御用ですか。何か御氣に入らない事でも……』

『いや、いや、どうも不思議ですな。全然豫期せざる寧ろ想像的な事が事實となつて現はれる、
まるであかのう
全然不可能だと思つたことが……』

『楓が覺え出してもしましたかな。』と隠居が尋ねた。神田先生は驚いて暫し隠居を眺めて居たが、
『いや、實に驚く可き事です。今日まで私の説明や努力やを以てしても、とてもABCを覺えさ
せる事は出来ぬと迄思つて居たものがですな、不思議、實に不思議、一夜の内に、がらりと變つて

初學者に殆んど見得べからざる程正確に字を讀み得たのです。然し、其の事だと御隠居様が見抜かれたのも之亦不思議です。』

『人の生涯には澤山の不思議が起るものです。』と隠居は満足の笑を浮べ乍ら『では之から教へるものも教へられるものも勇氣が出ますから結構です。何にしても良い鹽梅でしたね。』

隠居は先生と共に書齋へ行き實況を觀察したが眞個であつた。楓は久良子に何か讀んで聞かせて居た。

其の晩一同が食卓に着いた時に、楓は自分の皿の上に例の大きな繪本が載せて有るのを見て何の意味かと隠居の方を見ると、

『あ、上げるのだよ。之からは御前さんの物の。』と隠居は横縁よく言ふ。

「私あたしのもの？ 何時いつまでも？ 家うちへ歸かへつても？」と嬉うれしさに興奮こうふんして念ねんを推おす。

『え、左様さうですとも。明日あした一いつ緒しよに又また讀よまうね。』

「楓かへさん、歸かへらないのよ、未まだ中なか々く。御祖母おばあさんが居ゐなくなれば、私あたし淋さびしくなるから。』と久良子くらこが口くちを出だした。

其その晩ばん寢ねる前まへに、楓かへは其その本ほんを今いま一ひと度ど眺ながめた。其後そのこは本ほんの傍そばへ腰こしを掛かけて繰返くりかへし繰返くりかへし繪えや説明せつめいを見るみのが何なにより嬉うれしかつた。夜よるになると隠居いんきよに、『さ、楓かへや、讀よんで御吳おくれ。』と言いはれて、讀よめる

のが又また嬉うれしく、大おほきな聲こゑをして讀よむ。隠居いんきよは尙なほ、種々いろくと物語ものがたりの説明せつめいをして呉くれた。楓かへは繰返くりかへの牧場まきばの處ところが一いん番ぱん好きすで羊飼ひつじかひが長ながい棒ぼうを突ついて群むれの間あひだに立たつて眺ながめて居ゐる處ところを繰返くりかへして見た。

次つぎの處ところには此この羊飼ひつじかひが父ちちの家いへを離はなれて他國たこくに漂泊さすらひ、豚ぶたの群むれを番ばんする身みとなつて豆敷まめがらの外食はかく

ふ物なく瘦せ衰へた様が書いてある。そこには金色の日の光もなく全面が暗擔として居る。其の次には、ぼろを着たその放蕩息子が萎れて歸つて来る、夫れを老父が門の外に出て兩手を擴げて迎へてゐる處がある。此の話を繰返し繰返し音讀したり默讀したり、隠居の説明を幾度でも倦きすに聞く、其の他にも種々の話が載つてゐる。夫れ等を讀んだり繪を見たりして居る間に、時はすんすん經つて隠居が歸國する日が近付いた。

第十一章 楓の物思ひ

午後には何時も久良子は休息する。古井も極まつて引き退がる。隠居は久良子の傍に五分位居ると自分の室へ入り、楓を呼んで話をしたり何かさせたりして面倒を見てやつた。隠居は可愛ら

しい小さな人形や綺麗な布切れを出して楓に人形の着物や前垂れを作らせるので、楓は自然に針の運び方を會得した。

字も讀める様になつたので大きな聲で隠居に本を讀んで聞かせる。讀めば讀む程本とも親しんで其の中の人物を了解して來た。然し楓は一向幸福相でない、楽しいと云ふ様子が見えない。隠居が愈々歸國する其の週であつた。久良子が晝寢の間楓を自室に呼んだ。楓は例の大きい本を抱へて室に入ると、隠居は傍近くへ呼び寄せて、

『今日ばれ、何故御前が樂し相で無いのか其の譯を聞かしてお呉れ、矢つ張り前と同じ譯かい。』
『えゝ。』と楓は頷いた。

『神様に御願ひしたかれ。』

『え、しました。』

『幸あちらにして下くださいと御願おねがひをする？ 毎日まいにち。』

『此この頃ころはしません。』

『まあ、まあ、何故なぜ此この頃ころしませんか。』

『駄目だめ、聞いて下くださらないわ、私あたしね。』楓かへては少し興奮こうふんして、『フランクフルトのひと人は皆毎晩御願おねがひひするでしょ、だから神様かみさまは忙いそしくて私あたしの御願おねがひひは聞きいて呉くれないんだと思おもふの。』

『どうして。』

『だつて、随分永ずぶんい間あひだ毎晩御願おねがひひしたけど、ちつとも聞きいて呉くれないから。』

『夫それは間違まちがひですま。左様思さうおもつては勿いけません。神様かみさまは良いい御父様おとうさまですから此方こちらで良いいと思おもつて

も、夫れが私共の爲めにならない事なら許して下さらない事も有ります。夫れだから直ぐに許して下さらないとて御願ひを止めてはなりません。今までした御前の願ひは御前の爲めになら無い事だつたのでせう。神様は人間と違つて幾人同時に願つたつて、ちゃんと御解りになつてます。其の願ひを許す方が爲めになると云ふ時が來れば屹度許して下さいます。若し今許して、後で御前が考へて、あの時許して下さら無ければ良かったと思ふ様な事の無い様にして下さるのです。さうして神様は御前が絶えず信じて御祈りをするか、夫れとも止めて終うかと見て御居でなさるのです。人かみさまおまへが神様を忘れて口に祈が無くなれば、神様も其の人を御助けなさらなくなりまして。困つた事の起つた時に誰も助けて呉れないと云つて歎いても、夫れは自分が神様を忘れて居るからで、自業自得と云ふものです。御前も左様な人になり度いかれ、夫れとも今一度神様の前に出て疑つた御詫をし

て良い途に導いて下さる様に御願ひをしますか。』

楓は良く注意して聞いた。隠居を信じて居るので其の一言一句よく頭に入つた。

『直ぐ御詫びをします。之から神様を忘れません。』と楓は後悔した様に言つた。

『左様おしなさい、良い時が来れば、願ひを許して下さるから、信じてね。』隠居が奨勵を與へると楓は直ぐ自分の室へ入つて、再び守り給ふ様、悔の心を持つて熱心に祈つた。

愈々隠居の出發する日が來た。

久良子と楓とに取つては哀しい日であつたが、隠居は巧みに二人を慰めたので、哀しい様子でなく反つて賑かに送られて隠居は出發した。然し後はカランとして其の日は二人ともぼんやりして居た。

よくじつおけいこす かへて れいはん かゝくちこ そは
翌日御積古が済むと、楓は例の本を抱へて久良子の傍へ行き、

『常時の様に大きい聲で讀まうか知ら、聞く？』

くちこ さんせい まつそくはじ ものがたり をは ちか
久良子が賛成したので早速始めたが、物語の終り近くなつて、祖母の臨終といふ處まで來たら
讀むのを止めて、

『祖母さんが死んだ——』と云つて、わつと泣き出した。

讀んでる本の中の事を總な實際の事にして居るので、此の祖母を辨太の祖母と考へて居た。夫れ
が死んだと云ふのでわつわつと泣く。

『祖母さんが死んぢやつたあ——』
『祖母さんが死んぢやつたあ——』

それは御話しの中の祖母さんの事で、山の祖母さんとは違ふと久良子が説明して、辛つと解つた

が、今度は眞個のお婆さんや御祖父さんが死にはせぬか、若し死ねば久し振りに山へ歸つても誰も
過ふ人が無いと心配し出した。

古井は先程から來て居て、久良子が言ひ聞かせてるのを聞いて居たが、楓が何時までも啜り泣き
をして居るので堪え切れず、

『アデライドさん、もう泣くのは澤山です。本を讀んでは、そんなに泣くなら本を取り上げて返し
ませんよ。』と云つた。

之は大分感じたと見えて楓は青くなつた。此の本は何より大事なのだから急いで涙を拭ひ一生
懸命泣くのを堪へた。之は餘程利いたと見えて其の後、何を讀んでも決して泣かなくなつた。詰り
泣き度いのなちつと我慢するのだから大變な顔付きをする事がある。

『何うしてそんな怖い顔をするの？』と久良子が尋ねる事もあつた。顔付き丈けなら幾分かめても音がしないから古井様は咎めなかつた。然し楓の物思ひは日増しに加はり食事進まず、顔色も悪くなつた。旨い物も手を着けないので柴田が怪しむ様になつた。

『之は美味いからやつて見給へ、もつと、もつと。』なぞと食事の時に柴田が私かに注意してやつたりした。故郷病とでも云ふ様な具合で床に入ると人知れず山の家戀しさに泣いて居た。

斯んな風で可成りの月日を送つた。何時も家の中に斗り、久良子の工合が餘程良いと馬車で戸外へ一緒に出る事も有るが、それも一寸の間で、通る處は街中の人家の込んだ處斗りで、とても草原や樹木鬱蒼たる山々なぞは見られない。さうなると楓は愈々夫れが戀しくて堪らず、山とか林とか名を聞いた丈けでも泣き度い程であつた。

其の中に秋去り冬來り、それも過ぎて太陽が向ふ側の白壁にキラ／＼反射し出した。今頃は辨太が山羊を連れて出る時分であらう、金色の岩菖薇が咲いたらう、こんな事を聯想し出すと、楓は自分の室に入り椅子に少さくなつて思出の種になる日光を見まいと兩手に眼を蔽ふて心の惱みを免がれ様とするのが常であつた。

第十二章 本間邸に怪しの事

三四日此の方古井は仔細有りげに家の中を見廻つて居た。暗くなつて室から室へ行く時や、廊下を通る時などは妙に四邊を氣にする。後髪でも引かれる様な氣持ちがするのか始終後を振り返へる。下の室は良いが二階の大きな書室の邊、下でも歩くと響のする廊下の珠に先代の白い肖像

が大きな眼を開いて睨めて居る邊なぞを通る時は意を用事を作つてお常と一緒に連れて行く。お常も二階を上り下りする時には一人では仕ない。乾度用を造つて柴田と連れ立つて行く。柴田が矢張り左様だつた。

邸内の離れた建物の方へ行かねばならぬ時なぞは、何とか用事を作つて馬丁の職次を呼んで一緒に行く。頼まれた者も喜んで行く。詰まり自分の時にも行つて貰はねばならぬからだ。實際は二人で行く用は無いのであつた。終には料理番までが臺所で『おや變だぞ。』なんと云つて氣味を悪がる様になつた。

實際一つ不思議な事が有る。夫れば毎朝僕が出て見ると誰れも開け無いのに表の戸が開いて居る事である。初めは泥棒では無いかと家中を良く調べて見たが何一つ紛失して居無い。どうしても

盗賊では無い。

夜は締りを二重にして其の上、木の門までして置くのに、朝になると開いてるので有る。僕が幾分早く起きて見ても、ちやんと開いて居る。家の者は寢て居るし、他は悉く締つてゐるのに唯入口丈け開いて居るのである。終に讓次と柴田とは古井の勧めに基き勇を奮つて大廊下の次の室で寢ず番をして見る事にした。

古井は武器などを持ち出して柴田に貸して居た。當夜宵の口は二人で種々世間話などして居たが、其の中に眠くなり、椅子に靠れて静かになつた。古塔の時計が十二時を打つと柴田は氣を引き立てて讓次を呼んだが、讓次は寢て終つて起き無い。柴田は耳を欹て、眼を皿のやうにして周圍の様子を伺つた。往來も全く途絶えて四邊は全くしーんとして居る。淋しくてならぬので讓次を無

理に起した。讓次は幾度か寢違けながう辛つと眼を醒すと大に勇氣を出して、

『さ調べやう、何に、びくともするもんか、來給へ。』と始めから少し開けてあつた室の戸を押し開

いて、一歩外へ踏み出した。途端に、表からブーツと強い風が吹き込んで讓次の手にした燐燭を消

して終つた。讓次は後に續いた柴田を突き飛ばす様にして室に戻り、戸を堅く締め急いで錠を掛け

寸燐を取り出して燐燭を點した。柴田は讓次の後になつて居たので何やら一向解ら無かつたが燐

燭が點つて讓次の顔を見ると眞青になつて居るので喫驚した。

『何うしたんだ、え？ 何か居たか。』と柴田は氣遣はしげに尋ねる。

『矢つ張り開いてら。』と讓次は息を切らしてゐる。『それから、段の處に白い者が、居たんだが、ば

つと消えちまつた。』

柴田はぞつとした。二人は互に寄り合つて身動きもしずに居たが其の中に夜が明け、表に人聲が聞えて來たので二人は室を出て、早速古井の許に此の旨御注進に及んだ。古井も昨夜はまんぢりともせず、二人の返事を待つて居たが、話を聞くと即座にペンを取つて巴里の本間に手紙をしたため一部始終の様を知らせ、早く歸宅して呉れる様、一同安き心も無いとの旨を書き添へた。間も無く返事が來て用事の都合で直ぐには歸宅出來ぬ、幽霊談はちと時勢遅れた。然し若し已を得なければ隠居に來て貰へ、隠居なら幽霊の方で驚いて直きに出なくなるからと云ふので有つた。

手紙の調子では、本間は幽霊の件を大して氣に止めて居ない様なので、古井は甚だ不平であつたが、兎に角直ぐ隠居に手紙を出すと返事が來た。然し之も冷笑的の言葉が多かつた。ホルスタインからフランクフルトまで慈々幽霊を見に行く必要は無い、昔から本間の家に幽霊は居ないのだ

から、多分生きてる人間を間違ひたのだらう、然したつて氣になるなら夜番を雇へと云ふ意味が書
いてあつた。

古井は幽霊の事を二人の子供には決して話さなかつた。話せば怖がつて晝でも一人で居られなく
なり、結局は古井自身が迷惑をするから秘密にして居たが到頭二人に話して聞かせた。久良子に
は夫れは大變だ、御父様に歸つて來て貰ふ、古井に毎晩泊りに來て呉れと叫ぶ。楓も一人で居ると
幽霊に喰はれて終うと云つて騒ぐ。

久良子は殊に怖れるので古井も弱つた。で之からは古井が久良子の室で寝る事にし、楓も怖けれ
ばお常を傍へ寝かすと言つたが、楓はお常の方が怖いからとて矢つ張り獨りで寝る事にした。一體
かへて楓は幽霊なぞと云ふ者を今まで見も聞きもしなかつたから割に平氣である。

古井は二人の方を濟ませ又本間に手紙を書いた。不思議は相變らず續いて此の儘にして置けば御様様の健康を害し、容易ならぬ事になるかも知れぬとの意を認めた。

今度の手紙は効果が有つた。二日経つと本間は歸宅した。戸口の鈴が烈しく鳴るので一同は日中幽霊の到來かと怖れをなし、柴田が先づ二階の半開きの戸の間から表を覗いたりして居たが餘り烈しい鳴らし方に人間だと一同安心した。

柴田は主人らしいと飛び出して戸口を開ける、本間は直ぐに久良子の室へ行つた。久良子は涙を流して喜んだ。其の様子が何時もと變りがないので本間も安心した。久良子は幽霊の御蔭で御父様が歸宅して反つて有難いと喜んで居た。

「幽霊が何んな惡戯をするかれ、古井さん。」と本間は口元に滑稽味を浮べて訊く。古井は大真面目

目で、

『いえ、お笑ひ事では御座いません。明日と申しません中に御解りになります。』

『左様か、何んだか私には解らんが、餘り疑心暗鬼を起さん様に願ひ度いね。兎に角柴田を呼んで御呉れ。良く聞いて見るから。』

本間は食堂へ行き、柴田が其處へ入つて來た。本間は兼てから柴田と古井と仲の良く無い事を知つて居るので、若しやとの考へが有る。

『あゝ柴田か、御掛け。』本間は柴田を近づけ、『正直に言つて貰ひ度いんだが、若しや御前が古井を恐怖して遣らうと幽霊の眞似をしたんでは無いか、どうだね。』

『と、とんでもない。どう致しまして。私だつて氣味が悪い位なんですから。』柴田は有りの儘を

答へた。

『左様か、よし、よし、夫れぢやあ、僕が明日の朝、幽霊の正體を現はして見せやう。意氣地が無いな、良い若い者が。それで、醫者の倉瀬の處へ使に行つて來て呉れ、宜敷く言つてな、御相談があるから、今晚九時には是非御出で下さい、そして今夜は泊つて頂かねばなりませんから其の御積りでと。よいか。』

『は、承知しました。』柴田は出て行つた。

其の夜正九時、子供達は皆寢床に入り、古井も自室に退いた頃、醫者がやつて來た。白髮童顔で、めつ眼付きの優しい此の人が、稍々心配相に入つて來たが、挨拶が済むと忽ち呵々大笑して本間の肩を叩き乍ら、

『今夜は看護かれ。君は良い御父様だなあ。』

『今夜看護して捕へる相手は一寸違ふよ、君。』

『看護して捕へる、とは變だね。』

『いや、困った事なんだ。此の家へ幽霊が出るんだよ。』

夫を聞くと醫者は大聲で笑つた。

『どうも困つちまうんだ。古井が酷く氣にしてね、何でも先代の幽霊が出て仇をすると云ふんだ。』

『どうして夫れが解るね。』醫者は相變らず面白がつて尋ねる。

そこで本間は一通り成り行きを説明して今夜は寝ず番をする積りだ、室にはピストルを二挺置いたから、若し其の幽霊が下僕の友達か何かで主人の留守を付け込んでの悪戯なら空を打つて赫

かしてやるし、若し又盗賊の仕業でもあれば大にピストルの効用を知らせてやる積りだ。』と告げた。話し乍ら二人は二階を下り讓次と柴田が徹夜した室に入つた。机の上にはピストルが二挺と燭臺には煌々と蠟燭が燃えて居る。室内の光明が餘り廊下に射すと幽霊が恐れて出ぬと勿けないと戸は半ば閉めてある。二人は安樂椅子に倚つて菓子などを摘まみ乍ら四方八方の話をして居る中に何時か十二時が鳴つた。

『今夜はお休みかな。』と醫者が言つた。

『さあ、一時までは。』と本間が答へた。

二人は尙ほも話し續けて居る内に一時を打つた。往來も途絶えた様、四邊が森閑とした。突然醫者は指を擧げた。

『しッ、あの音。』

ふたりは耳を欹てた。極めて静かではあるが徐々と門を外づす音がした。次いで鍵を廻はす音、夫れから戸を開く音がした。本間はピストルに手を掛けた。

『大丈夫。』と醫者は立上りながら言つた。

『用心に如くは無い。』と本間は呟きながら、左手に三挺の蠟燭の立つた燭臺を持ち、右手にピストルを握つて醫者の後に續いた。醫者も矢つ張りピストルと燭臺とを持って居る。二人とも廊下へ出た。開いた戸口から薄い光が射して入口に白い姿の物が立つてる。

『誰れだッ。』と醫者が怒鳴つた。聲は廊下に鳴り響いた。二人は燭臺とピストルとを握つて其の方へ進んだ。

しろすがたふむ
白い姿は振り向いてきやつと言つた。立つてたのは楓である。探足の儘で白い寝巻を着て、燭臺とピストルとをきよろ／＼見ながら全身をぶろ／＼震はせて立つて居た。二人は顔見合せて、おつけに取られた。

たしこれみづく
『確か之は水を汲んでた兒だ。』と醫者が言つた。

なに
『何をして居る。何んで此處へ來たのか。』と本間が尋ねた。

かへてゆきやうしろ
楓は雪の様に白くなつて怖けて口が利け無い。

あた
『私し………知らない。』

いしやまへで
醫者は前へ出て、

はんまくんこれ
『本間君、之は僕の受持ちらしい。君は休息して居給へ、兎に角寢室へ連れて行くから。』左様言つ

てビストルを床に置き小兒の手を取つて親の様に勞りながら二階へ上つて行つた。

『良いよ、心配しないで。』上り乍ら醫者は優しく言ふ。『良く落ち付いて、何も悪い事ではないから心配しないで。』

楓の室へ入ると燭臺を机の上へ置き楓を寢床の上へ載せ、丁寧に蒲團を掛けてやつた。楓の震ひが靜まるのを待つて、

『もう落付いた様だから御話をおし、何處へ行く積りだつたね。』

『何處へも行く積りぢやないの。』と楓は答へた。『下へ行つたんぢや無いけど彼處に居たの。』

『うん、うん、何か夢を見るかい、有り有りと。』

『夢なら毎晩見るわ。同じ夢を。祖父さんと一緒に居る夢を。小屋の戸を開けて表を馳け廻ると隨

分面白いの。だけど眼が醒めて終うと詰らないわ。楓は込み上げる悲しさを堪へて言つた。

『うむ、うむ、それで何處か痛い處は無いかな、頭とか脊中とか。』

『何處も痛が無いけど此處が始終重たいの。石見たいに。』

『うむ、うむ、何か食べると苦しいかね。』

『いゝえ、だけど重たくつて泣きたくなるわ。』

『ばゝあ、それで泣くかい、聲を出して。』

『いゝえ、泣かないの。古井さんが勿け無いつて言ふから。』

『ふむ、ふむ、我慢して終うんだね。成程。此の家に居度いかね。』

『ええ。』と云つたが氣の無い返事で實は左様では無いらしい。

『ふふむ、祖父さんと一緒に居たのは何處だい。』

『山。』

『山は淋しくつて詰らんだろ。』

『面白いわ、随分面白いわ。』

楓は夫れ以上言はなかつたが、昔の記憶が浮び出ると共に堪えて居た悲しさが急に瀧の様な涙となつて兩眼から溢れ出て、とう／＼聲を立てて泣き出した。醫者は立ち上がつて楓の頭を枕に付けて遣り、

『構はんから、少し御泣き、泣いて終つたら良く眠るんだよ。明日になれば萬事都合よく成るから。』と言ひ残して下へ行き待ち兼ねて居た本間の傍へ腰を掛けて説明をした。本間は熱心に耳を傾け

てる。

『つまり、あの兒は夜遊病に罹つてゐるんだ。夫れで、毎晩室を出て歩いて居たのを家の者が隣室と思つたんだ。そこで原因は故郷病だ。夫れが爲めに段々衰弱して行くのだから早速何とかしてやらねばいかんよ。つまり早速故郷へ送り歸すんだね。明日にも。まあ僕の診断では左様だね。』

本間は可成り興奮して室を行つたり、戻つたりして居たが、

『夜遊病……故郷病……此の處へ來てから……それを誰も知らずに……君何う思ふね、來た時には丈夫だったものを病人にして歸へすと云ふ事は。どうも僕には仕悪いね。何うだらう君、あれを連れて行つて、何んとか丈夫な體にして貰へまいか。さうしてから歸したいんだが、何うだらう。』

『いや、夫れ程の心配は要らんよ。』と醫者は熱心に、『病氣と云つても藥で直す病氣ぢや無いんだ。

つまり住み馴れた其の山の空気を吸へば直ちに元の通りになる譯なんだ。然し、君が………君が還へす氣が無けりや仕方が無い、置くさ。』

本間は驚いて立ち止まり、

『いや、君が夫れが最も良いと思へば、外に方法は無い、直に決行しやう。』

二人は尙ほ種々相談して居る内に何時か夜が明けた。本間は自身で戸を開けて醫者を送り出した。

第十三章 再び山家へ

本間は非常に激して二階に上り、足音高く古井の寢室に行き強く戸を叩いた。古井は眼を醒まし驚いて大聲を上げたが室の外で本間の聲が聞えた。

『急いで食堂へ来て御呉れ、直ぐ出發するんだから。』

古井は時計を見ると午前四時半であつた。こんなに早く起きた例は無い。何事が起つたのであらうと、あたふたするので、反つて手間が取れる。着て居るものを捜したり餘計な時間を取つた。

其の間に、本間は廊下をすつと歩いて方々の鈴を片つ端から引き鳴らしたので、何れも床から飛び起きて身仕度を急いだ。何んでも幽霊が主人を何うかしたので、斯く非常召集を行つてゐるんだと思つた。

やがて何れも怖るゝ出て來たが、主人は元氣良く室を闊歩して居るので、さては幽霊の爲めでは無いかなと皆不思議な顔をして居た。

巖次は直ちに馬車の仕度に取り掛かつた。お常は楓を起して旅行の仕度をさせよと命ぜられ、柴

田は楓の伯母の勧め先きへ使に遣られた。古井は辛つと身仕度を済ましたが髪丈けはぐる／＼巻で、どうやら顔が引つ込んで見えた。本間はそんな事は頓着なく、靴を出して楓の持物を悉く詰め、久良子の衣服も多少分けて入れて遣る様に、兎に角大至急にと命令した。

古井は床から生えた様に突つ立つて、呆氣に取られて本間を見て居た。屹度前夜の幽霊の話でも有るのだらう、朝なら怖くは無いと思つて居た處が、案に相違した甚だ面倒臭い用事を命ぜられた。臍に落ちぬ顔付で黙つて立つて居た。

本間は夫れ以上説明もせず、娘の室へ行つた。久良子は家中の騒ぎに眼を覺まし何事が起つたかと耳を敏て居た。

父は寢臺の傍に行き幽霊の正體を話し、此の儘にして置けば益々楓の病氣が重つて終には、

屋根の上へでも登る様な事が出来するかも知れ無い。預つて居る以上、責任があるから、醫者の意見に基き直ぐに故郷へ送り歸す、久良子も其の積りで居る様にとの事であつた。

久良子の驚きは一通りで無かつた。初めは何とか止まらせる工夫なと考へたが、父の決心は堅く駄目であつた。然し父は、若し久良子が聞き分けて承知をすれば、來年瑞西へ連れて行つてやると約束した。久良子も仕方が無いので承知をした。そして風の鶴は此の室で詰める様に自分も入れて遣る物が有るからとの事。父も夫れを承知して、成る可く氣持ちよく送り出す様にと勧めた。其の間に伊達の伯母も到着した。不時の召喚だから何れ並の事では無いと豫期して居たが、本間は出で一部始終を話し、今直ぐ連れて歸る様にと云つた。伯母は大層失望した、山爺と別れる時に言はれた言葉が未だ耳に残つて居る。二度と連れて來るなと言はれて居るのだから、何うも具合が悪

い。そこで今日は都合が悪くて行けぬ、翌日も翌々日も矢つ張り都合が悪い、其の後と懇願した。
 本間は伯母が逃げ口上を言つてゐるのを察して、何も言はず歸らせ、更に柴田を呼んで直ぐ楓を
 連れて出發する様、今夜途中で一泊し、明日山の家へ届ける様、口上は何も要らぬ萬事は手紙
 に有るからと言ひ付けた

『おゝ、未だ大事な事が有つたぞ』と本間は付け足して、『途中の宿屋は心安いのあるから私の
 名刺を持つて行けば良く取扱ひをして呉れ様が、先づ第一にあの兒の室の窓を確かり閉ぢて出ら
 れない様にして置けよ、床に入つたのを見たら入口の戸も外から鍵を掛けて置け、知らぬ家へ泊つ
 て夜中に歩き廻りでもして萬一の事が有つてはならぬから、良いか』

『へえ、左様でしたか、へえ左様でしたか』柴田は幽霊の正體が解つたので夫れ斗り感心して居る。

『左様でしたとも、君達は臆病だからさ、君でも讓次でも馬鹿々々しいね』

本間は左様言つて自室に入り、山爺に宛てた手紙を認めた。柴田は未だ室の真中に立つて同じ事を言つてゐる。

『何に。讓次が止めなきやあ、正體を見届けたんですが………』

喧嘩過ぎての何とやらで大層威張つて居た。

楓は何が何やら更に解らず、他處行きの着物を着て立つて居た。お常が起して衣服を着せて呉れたが何事も云は無い。尤も平常から二人は話しなぞしない間であつた。

本間は手紙を持つて食堂へ行つた。そこには已に朝食の用意が出来て居た。

『あの兒はどうした』

楓は呼ばれて本間の傍へ行き、『御早う御座います』と言つた。本間は怪訝な顔をして、

『之は不思議だ、今までそんな事を言つた事が無かつたが………』

と笑ひ乍ら、『鬼に角之から家へ歸るのだよ、直ぐに』

『家へ？』楓は餘り急な話なので息も止まらん斗りに思つた。

『嫌かれ？』

『いゝえ、いゝえ』と眞赤になつて答へた。

『左様だらう』本間は席に着き、楓にも掛けろと合圖をして、『さあ、澤山食べて、それから馬車に

乗つて行くんだ』

楓は食べやうとしたか、どうしても喉へ通らない。何だか夢の様に今に眼が醒めて又支那の虎

に立つてゐるのでは無いかなどと思つて居た。

『柴田に辨當をうんと持たせてお遣り。此の兒は今食べないから』

折柄食堂へ入つて來た古井に向つて本間が言つた。

『夫れから馬車の仕度が出来るまで久良子の處へ行つて居な』と楓の方を向いて言つた。

楓は馳け出して久良子の室へ行つた。室の眞中には大きな籠が口を開いて居る。

『楓さん、來らつしやい！』と久良子は聲を掛けた。『之れ！ 私が入れて上げたのよ、良くつて』

衣服類、前垂類、下衣の類、裁縫の材料、その他数々の物を楓に示して、

『夫れから之れ』と籠を持ち上げた。楓は中を覗いて飛び上つて喜んだ。中には辨太の祖母にやる旨相な巻廻籠が十二入れて有つたのである。二人は間も無く別れるのも忘れて話をして居たので、

『馬車の仕度が出来ました』と言ふ聲のした時には別れの悲しみをする暇が無くなつて居た。

楓は己が室へ走り入り、夜晝傭を離さぬ例の本を枕の下から取り出した。誰も氣が付かずに居たのであつた。之は籠の中の廻籠の上へ入れ、尙ほ戸棚を開けて何か残つて居無いかと調べて見ると、有る有る、古い赤い手巾が有る。古井は拾てる積りで包み込まずに置いたのだ。楓はそれな籠の上へ掛け、赤い包みを造らへ、さて帽子を被つて己が室を出た。

本間は已に玄關で楓の來るのを待つて居たので二人の兒は大意で『さよなら』をした。古井は階段の上で見送つたが、楓が無遠慮時、ちらと赤い切を見て手早く夫を取つて床の上へ捨てた。

『勿けません』と相變らす小言口調で『そんな物を持つて行つては、では左様なら』

楓は手巾を拾ひ上げなかつたが、何より大切なものを取られた様に本間の顔を見た。

「何んでも持つて行き度い物なら持たして遣れ、良いではないか」

と本間が判然言つたので、楓は夫れを拾ひ上げて嬉し相で有つた。

かへてげんくわんで、楓は夫れを拾ひ上げて嬉し相で有つた。楓が玄関へ出ると本間は楓に手を差し出し自分や久良子の事を忘れ無い様に、又途中氣を付け

よと懇ろに注意した。楓も今までの體を立派に述べ、

「御醫者さんも眞個に有難かつた。明日から何にも出ません」と云つた。之は前夜醫者が言つた事を

覚えて居たし、幽霊の一件も自分が原因だと解つたので左様言つたのである。楓は馬車に乗せられ、

柴田は籠と辨當とを持つて次いで乗つた。本間は今一度「氣を付けて」と云ふと馬車は軋り出した。

暫らくの後、汽車に乗り代へた。籠は辨太の祖母にやる大切な物だから膝の上に載せて暫らくも

離さない。時々中を覗いては嬉し相な顔をする。數時間ちつとして居たが刻一刻故郷へ近付く

と思ふと山の祖父さん、お婆さん、辨太、山羊の事なぞ順々に眼の先へ現はれて、家へ行つたらどんなであらう、皆に遇ふたなら、どんなに嬉しいであらうと果てしもない想像に耽つて居たが、急に心配になつた。

『柴田さん、山のお婆さんは大丈夫だれ、死んでやしないね』

『大丈夫さ、多分生きてるよ』

楓は考へ込んで居るかと思ふと折々籠を覗いて見る。此の廻籠をお婆さんの前へ並べて遣る事が何よりの願ひなのである。暫らくすると又言つた。

『生きてれば良いがねえ』

『大丈夫、大丈夫』柴田はうとくしながら、『生きてるよ、死ぬ氣遣ひなし』と答へた。暫らくす

と楓も眠くなつた。何しろ前夜からの疲れが有り、今朝も早くから起きてるので、知らぬ間に眠込んで終ひ、柴田に揺り動かされて氣が付いた。

『起きて、起きて、下りるんだ』

翌朝又汽車に乗つて數時間走つた。楓は相變らず儘を膝から離さない。刻一刻と山が近くなるので益々胸を轟かせて居たが、不意に『マイエルンフェルト』と叫ぶ聲に楓は飛び上つた。柴田も不意であつたと見えて飛び上がり、二人とも靴を持って表へ出た。汽車は又汽笛を鳴らしながら靜々と進んで行つた。汽車に乗つてれば樂だが之から上り道を徒歩で行くのは中々容易でない。停車場の近くに小さい馬車が一臺有つて大きな男が汽車から下した袋を積み込んで居たので柴田は逸み寄り、途を尋ねた。

『何方がら行つたつて樂な途だよ』と馬子が言つた。

柴田は尙ほ鞆を運ばねばならぬが何うしたもんだらうと訊くと馬子は一寸鞆を見て、大して重く無けりやあ載せて行つてやらうと云ふ相談の末、序に鞆も載せて行つて貰ふ事にし、村迄行きやあ、それから上は楓を誰かに送つて貰ふと云ふ事にした。

『獨りで行けるよ、村から先は知つてるよ』

左様すれば柴田も山を登らずとも濟む譯なのだから大喜びで、傍の方へ一寸鞆を呼び、重たい包と手紙とを渡し、殊に金は本間の主人から呉れたものだから、大切に於て籠の底の方へ入れて、失しては大變だ、呉れ々々も氣を付けよと言ひ聞かせた。

『なくなさない、大丈夫。』と云つて二つとも籠の下の方へ入れた。鞆は車に積み、楓は籠を持つ

た儘御車臺に載せられた。柴田は別れ際に今一度渡したものを注意せよと手眞似、眼付きで知らせた。馬子は楓の傍に腰を掛け、山の方へ徐々と車を進めた。柴田は停車場へ戻つて歸り汽車の來るのを得つて居た。

此の馬子は村の麵麴屋で、仕入れた材料を積み込んで村へ歸るのであつた。楓を見た事は無かつたが、山爺の處に居た楓と云へば村で噂さを聞かぬ者は無いから話は聞いて居た。夫れに此の麵麴屋は楓の兩親を良く知つて居た。楓が今頃歸つて來たので不思議がつて聞く。

『御前は山爺の處に居た兒だろ』

『あゝ』

『嫁になつたのかい向ふが』

『いゝえ、嫌ぢや無いんだけど』

『夫れぢやあ何故歸つて來たんだい』

『御暇を貰つたんだよ』

『嫌でないのに御暇を貰うものがあるかい』

『だって、山の祖父さんの處へ行き度くつて仕様が無いんだもの』

『爺は前と違ふぜ。御前は知らないんだな』

廻籠屋は夫れ限り何も言はず頻りに口笛を吹き鳴らして居た。楓は夢中になつて四邊をぐるぐる見

て居る。道端の樹木でも向ふの山でも皆自分を歓迎してゐる様に見える、馬車の進みがもどかしく

飛び下りて馳け出し度い程に思つた。村へ着くと丁度午前九時だつた。村の女房や子供達が車

の周圍へ集まつて、子供と鞆が載つてゐるのを珍らしく思ひ、何處から來たのか何處へ送るのかなぞと尋ねて居た。

『有難ふ。祖父さんが鞆を取りに來るよ』楓は馬車から下ろされると直ぐに左様言つて馳け出さうとしたが、周圍りに大勢居て行かれない。口々に種々な質問をするので楓は堪らず無理に問を掻いくぐつて逃げ出した。

楓は出來る丈け急いで山を登つたが籠も可成り重かつたし、途も段々險阻になつたので折々止つて息を吐いた。

『お婆さんは矢つ張り隅の方で糸車を廻してゐるかしら。生きてゐるかなあ』楓の頭の中には今他の考は無い。

竊て凹に建つてゐる小屋が見えろと、胸を躍らせて、益々急いで走けた。辛く上り着いて、小舎の戸を推し開け室の内へ躍り込んだ。興奮して口が利けない。

『おや』と隅の方で云つた。『楓ちゃん見たいな入り方だね。誰か來たの?』

『ね、お婆さん、私! 私が來たの!』と楓は叫んで隅へ走り行き、老婆の膝の上へ上つて手を握つたり揺ぶつたりした。老婆も最初は口が利けなかつたが辛つと落ち付いて、楓の髪を撫でゝ見て、

『あゝ、おゝ、確かに楓ちゃん髪の毛だ。聲も左様だ。あゝ有難い。神様の御引合せだ!』熱い露がほろ／＼と楓の上に落ちた。

『良く來たね、眞個に良く來たね!』

「来たのよ、之れから毎日来るわ。もう何處へも行かない事よ。之れからお婆さん堅い麵麩を食べないでもいゝの。ほら、れ」

楓は籠から麵麩を出して一つ一つ老婆の膝の上へ積み上げた。

『まあ、まあ、何んといふ有難い事でせう。だけれども麵麩より楓ちゃんの方が尙ほ有難いよ』と尙ほ楓を撫で廻しながら、『良く御話をしてお呉れ。御婆さん聞き度いから』と老婆は言ふ。

そして楓は麵麩を持つて来て遣るまでに御婆さんが死にはせぬかと氣遣つたり、とても歸れまいと心配した事などを話した。折柄辨太の阿母が入つて來たが暫しは茫然として居る。

『あま、矢つ張り楓さんだ。どうしてまあ』と言つた。楓は起き上つて握手をした。阿母は楓の周圍をぐるりと歩み、

『お婆さん、楓さんは立派な着物を着て居るんですよ。間違へましたね。此處にある飾りの着いた帽子も左様でせう。一寸被つて見せて御呉れよ』

『いやだわ』と楓は断つた。『私もう、それ要らないの。お婆さんに上げるわ、自分のがあるから』左様言つて楓は自分の赤い包みから一層もみくちやになつた古帽子を取り出した。曾ての爺處に出る時に飾の着いた帽子なんぞ被つた姿は見度くないと云つた言葉を覚えて居るので、山へ歸る時には被つて行かうと此の古帽子を大切に保存して置いたのである。

辨太の阿母は夫れは間違つてる、嫁なら村の娘に賣つたつて可なりの御金になると言つたが楓は堅く決心して居ると見え、夫れを室の隅へ推し込んで終つた。それから着てゐた綺麗な着物も脱ぎ捨て下着の上へ赤い手巾を巻き付け兩腕をむき出しにして、

『私、祖父さんそこへ行くのよ。明日又来るわね、お婆さん、さよなら』

『あ、明日又御出で』と云つて老婆は楓の手を握つて離し度くもない様である。

『何故着物を脱いで終つたの？』と阿母が尋ねた。

『だつて、祖父さんが間違へるといけないもの。斯んな着物を着て居て』

辨太の母は送り出して、『大丈夫だから着て御出でよ。だけど氣をおつけ、爺さんは此の頃怒つて口

も利が無いつて言ふから』

楓はさよならと叫んで籠を持つて走け出した。夕日は今將に緑の山々を照らして遙か彼方の雪の

原は映ゆい程の光彩を放つて居る。

一足毎に楓は立止まつて周囲を眺めた。振り返ると懐しい夕映が美しく輝いて足許の草地を赤く

染めて居る。鷹巢山の頂きが赤く反射し、雪の原は悉く血の様になり、蔷薇色の雲が其の上に漂ふて居る。全山の草は金色となり、麓の方には金色の霞さへ棚引いて居る。

楓は此の景色の真たゝ中に立つて嬉し涙を頬に傳はらせ兩手を握つて空を仰ぎ大聲で無事に故郷に歸し給ふた神に感謝した。殊にあらゆる物が昔の儘の美しさであつた事を感謝した。實は感謝の言葉が無い程有難く感じてゐた。其の内に夕日の色が段々薄くなり掛けたので、楓は再び走出した。間も無く小屋の上の樅の樹が見え、次いで小屋が見えた。小屋の傍に祖父さんが煙管を喰へて腰を掛けて居るのが見えた。樅の梢は夕風に唸を立てて揺れて居た。楓は全速力で馳け登り、爺が氣づかぬ内に手にした籠を放り出して、老人に嚙り付いた。何とも言はぬ、唯一

「祖父さん！ 祖父さん！ 祖父さん！」と叫び続けた。

爺も何も言はず、此の人としては珍らしくも兩眼に手を當てて居たが、聽て楓を膝の上に載せ
ちつと眺めて、

『歸つて來たね。楓、どうした、え？ 斷られたのか』

『ううむ』楓は勃然になつて、『左様ぢやないよ、皆良い人——久良子さんも、おばあさんも、本間
さんも。だけど私家へ歸り度くつて仕様がないの。死に相だつたけど、黙つてたの、そしたら御
醫者様の御蔭でね……此の中に書いて有るつて』と地面へ下りて手紙と包とを籠から取り出して
祖父さんに渡した。

『之れは御前のだ』と包の方は傍へ置き、手紙を取り上げて眼を通したが駄つて衣囊へ入れて、
『乳を呑むかい』と言ひ乍ら楓の手を取つて小屋の方へ歩み、『御金は御前のだから納つて置いて寝

『臺や衣服を買ひな。夫れ丈け有れば随分買へるから』

『私は要らないよ』楓は言ふ。『寢床は有るぢやないか。衣服も久良子様が澤山入れて呉れたから、』

もう澤山だ』

『でも戸棚へ納つて置きな、要る時があるから』

楓は承知して祖父さんの後に従いて小屋へ入つた。小屋の中の何を見ても嬉しい。彼方の隅、此方の隅と馳け廻り、しまひには梯子を登つて家根裏へ上つた。

『祖父さん、寢床が無いね』

『直ぐ出来るよ。お前が歸つて來ると思はなかつたからさ。さあ乳をお呑み』

楓は下りて來て昔ながらの腰掛けに乗り、小さい井を引き寄せて飲むわ、飲むわ、すつかり飲

み干して、ほつと息を吐いた。

『祖父さん、斯んなに旨い乳はどこにも無いね』

をりからゑもてすぞとくちぶえきこかへていなづまやうかだたみやまど。澤山の山羊が躍りつ跳折柄表で鋭い口笛が聞えた。楓は電の様に馳け出して見ると山羊だ。辨太は楓を見ると立ち止まつた。楓は、『辨ちやん、今晚れつ辨太を真中にして山から降りて來た。辨太は楓を見ると立ち止まつた。楓は、『辨ちやん、今晚は、白、赤、私覺えてるかい』と言ひ山羊の中に進み入つた。

山羊は確かに覺えて居ると見えて頭を楓に摺り付け、喜ばし相に鼻を鳴らし出した。楓は一つ一つ名を呼ぶと皆競つて傍へ寄らうと大騒ぎが始まつた。楓は舊友を見て夢中になり、兩手で矮しろ、白を抱へたり手取りを撫でて見たりして段々辨太の傍へ來た。辨太は相變らず黙つて立つて居る。『辨ちやん、今晚はつて言はないの』

「歸つて來たな」と辛つと辨太は口を開いた。そして平常歸り掛けにやる通り、

『明日も一緒に行く?』と尋ねた。

『ううむ、明日は行か無い。其の次の日。明日はお婆さん處へ行くんだから』

『歸つて來て良いね』辨太は嬉し相に顔を歪めて、やがて歸途についた。楓は白と赤とを抱へる様

にして小檻へ入れ戸を閉めた。小屋へ來て見ると未だ枯れ切らない良い香の草が澤山積み上つて、

其の上に布が掛かつて寢床が出來てた。楓は其の上に横になると、今までに經驗の無い程良い心持

ちで寢入つて終つた。夜中に爺は幾度も梯子を登つて楓の様子を見た。楓は故郷の空氣や景色に満

足して夜遊病は何處へやら、朝まで熟睡した。

第十四章 教會の鐘の音

翌朝、楓は樅の樹の下に立つて之から村へ靴を取りに行くといふ祖父の出て来るのを待つてた。自分には又お婆さんの處へパンを喰べたか何うか聞きに行く積りで爺を待つてた。山の風物に飢えて居た楓には草地の香りや花の色は幾ら見て居ても倦きが來ない。

爺は小屋を出て周りを見て満足したらしく、

『さ行かう』と云つた。丁度土曜日であつた。何時も土曜日には小屋や山羊の檻などを掃除する事になつて居る。今日しも午後から出掛けるので朝の中にすっかり掃除を済ませて置いたのであつた。辨太の小屋まで來ると二人は別かれて楓は内へ入つた。老婆は足音を聞いて

『來たれ、來たれ』と叫んだ。

らうは、かへててしつかりにきき
老婆は楓の手を確と握つてパンの旨かつた事や前よりも體に精が付いた様な氣がする事などを話
すと、辨太の母も傍から、昨日も今日も惜しくて一つづゝしか食べない、一つづゝ喰べても二週間
は無いと言つた。楓は夫れを聞き乍ら頻りに考へたが辛つと考へ付いた様に、

『良い事があるよ、お婆さん』と熱心になつて「久良子さん處へ手紙を出せば送つて呉れるよ。私
が戸棚に入れといた二倍呉れるつてつてたもの、もつと呉れるよ。』

『まあ左様、でも向ふの方に悪いよ。少しお金があるとなれ、村にも賣つてゐるんだが、黒げんにさへ
差支へてる位でね』と阿母が言つた。

楓の顔に急に喜びの色が漲つた。

『ああ私あたしお金かねを澤山たくさん持つてら』と言いつて室へやを跳はね廻まはつて、『何なんんでも無ないや。毎日まいにち一つづつ買かへるよ。辨べんちやんに買かつて來きて貰もらわ』さも得意とくいに言いふ。

『いけませんよ。そんな事ことに使つかへとて呉くれたんぢや無ないから。爺おやぢさんに渡わたして御前おまへのものを何なにか買かふんだから、』然しかし楓かへでは喜よろこんで叫さけんだり跳はねたりして居ゐる。

『お婆ばあさん、毎日まいにち食たべられるよ、そして丈夫ぢやうぶになるよ』と言いつたが急きふに大聲おほこゑを出だし、『ああ左様さやうだ丈夫ぢやうぶになれば眼めが見みえる様やうになるよ屹度きつと。今は弱いいから見みえ無ないんだね、お婆ばあさん』

老婆らうばは子供こどもに氣きを落おとさせまいと、何なんとも言いはずに居ゐた。楓かへでは跳はね廻まつてゐる内に、ふと老婆らうばの古ふるい讀美歌よみびかを見付みづけた。

『お婆ばあさん、私あたし字じが讀よめる様やうになつたよ。讀よんで上あげ様やうね』

『夫れは有難いね、ほんとに讀めるのかい、ほんとに。』

楓は椅子に上つて埃だらけの本を取り下ろし良く叩いて夫を持つて老婆の傍へ坐り、何れを讀まうと尋ねた。

『何れでもお前の好きなので良いよ。』老婆は糸車を側へ推し遣つて耳を欬てた。

楓は頁を繰り乍ら處々を讀んだ。日の光に關する歌を特に熱心に讀み聞かせた。

老婆は手を握つて喜ばしげな顔をして、今までに見た事のない程、眼さへ潤ませて聞いて居た。

楓が讀み止まると、

『もう一通今のを。』

楓は一層心を籠めて讀んだ。

『あゝお蔭で眼が開いた様な氣がする、有難うよ。』

老婆は再三喜びを述べた。楓も嬉しくて老婆の喜んで居る顔を稍や暫し眺めて居た。老婆は以前の様な淋しい様子が無い。如何にも幸福らしく見える。心の眼が開いて造化の美しい花園を一瞥した爲であらう。

誰か来た氣配がした。楓は眼早く夫れは祖父さんが迎へに來たんだと知つて、老母には又明日來る、若し辨太と牧場へ行つても、半日丈けにして此處へ來るからと言ひ残して出て行つた。楓は牧場で花や山羊を相手にする樂より、老婆の心の眼に愉快を與へる方が一層の樂しみになつたのである。

辨太の母は楓に衣服と帽子とを持ち歸る様に勧めた。楓は衣服の方は受取つたが帽子は何うして

も嫌だいやと云いつて受うけ取とらぬ。楓は金かねさへあればお婆さんばあに白しろいパンを買かつてやれる事ことと、白しろいパンを喰たべた爲ために、其後そのこお婆さんばあの體からだが丈夫ぢやうぶになつたと云いふ事ことを祖父さんおぢいに話はなし出だした。

『お婆さんばあはいけないつて云いふけど、私わたしのお金かねで毎日まいにち一つづつパンを買かつてやつても良いいね、祖父さんおぢい』

『ぢや寢臺ねだいは何どうするんだ』と祖父そふが答こたへた。

『眞個ほんとの寢臺ねだいも要いるよ。寢臺ねだいを買かつてもパンを買かふお金かねは残のこるよ。』

楓は今いまの寢臺ねだいだつてフランクフルトに居ゐた時ときよりどんなに良いいか知しれないと言いひ張はるので祖父そふも仕方しかたなしに、

『お金かねはお前まへのだから何どうでも良いいけどれ、一年ねんや二年ねんちや食たべ切きれないよ。』

かへてよろこ
楓は喜んで、

「萬歳！ それぢやお婆さんはもう堅いパンを食べなくつても良いんだ。嬉しいな、嬉しいな。」と
叫び祖父の手を握つて、びよい／＼飛び上つたが急に又眞面目になり、

「私がお祈をした時に直ぐ歸れば、こんな澤山パンを買ふお金なんか無かつたんだ。矢つ張り本間
のお婆あさんの言つた通りだ。神様にはちやんと解つてたからあの時に歸さなかつたんだ。之から
私、始終お祈りをするの。そうすれば屹度之れからも守つて下さるから。私達が神様を忘れずに
居れば神様も私達を決して忘れなされやしないや』

「忘れられた人は仕方がないよ。」

「夫れはいけないの、祖父さん。神様を忘れてる人は困る事が出来て誰れも助けて呉れなくても夫

『じごふじとくれば自業自得なんだつて。』

『それさう夫は左様さ。何うしてそんな事知つてゐるんだ？』

『ほんま本間さんのおばあさんに聞いたの。』

『おやぢしほ爺は暫らく無言で居たがやがて獨り言の様に……………」

『いまさらしやう今更仕様が無い……………。忘れられてゐるんだから……………」

『ちが違ふ祖父さん。誰れでも神様の處へ歸れるよ。私あたしの本に出て居らあ。祖父さん、未だ見無いか
ら知らないんだ。家へ行つたらみせたげ様れ。』

楓は早く小屋へ戻らうと一生懸命で歩いた。やつと上り詰めると一足先きに小屋へ駆け込んだ。

爺は籠が重たくつて一度に運べないので半分丈げ籠に入れて持つて來てあつた。楓は其の中から

大きな本を出して來た。爺はベンチに腰を掛けて頼りに考へ込んで居る。

『此處が良いや』と楓は爺の傍へ走り寄り、本を開けると、幾度も讀んだので獨り手に放蕩息子の處が開いた。楓は夫を讀んだ。

『ね、面白いだろ、祖父さん。』

爺は黙つた。楓は祖父さんが唯面白がると豫期して居たので尋ねた。爺は

『うむ、面白いお話だね』と言つたが、顔を曇らして繪を眺めてゐる。

楓は本を爺の前に推し遣り乍ら、『そろこんなになんなくなつた、ね』と放蕩息子が村の家へ歸つて、美しい衣服を着て、父の傍に立つてゐる繪を描し乍ら云つた。

楓が眠りに付いて暫らく經つと、其の夜爺は梯子を登つてランプの光に楓の寝顔を見た。楓は所

り乍ら眠たと見え、兩手は合せた儘である。薔薇の様な顔に平和の笑を湛えて、さも爺の覺醒を促がす様に見えた。爺は暫し寝顔を見て居たが、やがて自分も兩手を合はせ頭を垂れ

『天の父よ。此の罪深い私は神の子となる價打はありませんが……』

とかなり聲高に言つて兩眼からばら／＼と涙を流した。

翌朝早く、爺は小屋の前に立つて元氣よく周圍を眺めて居た。安息日の朝の光は山や谷を隈なく照らし、下の村からは鐘の音が聞え、樅の樹には小鳥が朝の歌を歌つてゐる。

爺は小屋へ戻り、

『楓や』と下から叫んだ。『日が出たよ。善い衣服を御着。今朝は二人で教會へ行くから』

爺からこんな誘ひを受けるのは實に始めてだから、大急ぎで衣服を着た。暫らくすると本間で貰

つた衣服を着て下りて來たが、不思議相に爺の顔を見て居る。

『祖父さん、今日は何うしたの。こんな光つたボタンの付いた外套を着て、随分立派だ、ね！』
爺はにこつとして、

『お前も立派だぞ、さ行かう』

爺は楓の手を引いて山を下りた。村に近づくに随つて氣持の良い鐘の音が彼方此方に響く。

『祖父さん、鐘の音がするね。まるで御祭りの様だね、』と楓が言つた。村の人等は早や教會に集まつて歌を歌ひ出して居た。爺は一番後ろの席に腰を掛けた。歌の途中だつたが、隣に居た人は次ひとちよつとつ
の人を一寸突いて、

『來たよ、山爺が』と囁やいた。次から次へと知らせたので間もなく隅々まで傳はつた。『山爺、』

山爺』何れも此方をちよい／＼見るのて司會者は困つて居た。

然し牧師の説教が始まると皆な静かにした。説教には力があつて聴衆に多大の感動を與へた。

禮拜が終ると山爺は楓の手を引いて外へ出て牧師館へ入つて行つた。さあ皆んなが寄り集つて大

騒ぎである。山爺が教會へ來たのさへ非常な出來事であるのに、牧師館へ行つたのであるから

何んな顔をして出て來るかと思味を知らぬ人達はわい／＼言つて居る。

『山爺だつて噂さ程悪い人間ぢや無いんだよ、小兒だつて可愛がつて傍を離さないぢやないか』

と一人が云ふと、

『それだからさ根から惡人なら牧師に會ひに行く筈も無いよ。噂が大仰なんだ』と言ふ人もある。

『夫だからさ。僕が前から言つてゐるんぢやないか。子供が暮つて歸つて來る位だからそんな恐ろし

い人間ぢや無いんだつて」とパン屋が言つて居た。

山爺に對する評判が大層變つて來た。婦人等も辨太の祖母さんから聞いた爺の親切な行動なぞを話して、何れも今迄の事は忘れた様に山爺を賞め始めた。

一方爺は牧師の書齋を訪づれると牧師は戸を開けて迎へた。先程教會で姿を見たので、恰も豫期して居た人を迎へる様に招き入れた。心を籠めた握手をした。爺はかゝる歡迎を受けるとは思つてゐなかつたので無言の儘に立つて居たがやがて、

『先日山で失禮をしたお詫びに來ました。親切に言つて下さつたのに、あんな挨拶をして、全く言はれる通りで私が間違つて居たのです。お言葉に従つて此の冬から村に住まうと思ひます。華車な兒ですから山の寒さは良くないと思ひます。村の人が相手にして呉れないかも知れませんが、

いままでです。今迄が今までですから仕方がありません。牧師さん丈けでも承知して居て下されば。』

牧師は喜びに輝やいて老人の手を確と握り、

「第一に教會へ行かれた事は實に結構でした。村へ住まうと決心されたのは何よりです。何うか相變らず舊友として親しい御交際を願ひます。冬にでもなつたら御二人とも始終お話しに來て下さい。丁度いゝ話し相手ですから。』

牧師は左様云ひ乍ら楓の顔を撫てやがて二人を送り出し戸口で別れを告げた。牧師が親友にでもする様に爺と握手し、別れを惜む。牧師が戸を閉めると群集は我先きにと進み出で爺がまごつくばかりに握手を求めた。

『良く來ました、良く來ました』と言ふ人もある。『久し振りですな』と云ふ人も有つた。てんでに

左様云ふ挨拶をした。爺が此冬には村へ引き越すので宜敷頼むと云ふと何れもこんな喜ばしい事はない、是非と勧められた。一同は可なり遠くまで二人を送つて、今度村へ來たら是非立ち寄つて呉れと口々に約束して居た。皆が山を下りて行く姿を爺は立止つて眺めて居たが、心の中の喜が溢れて顔が晴れ渡つて居た。楓は爺の顔を見て居たが、

『祖父さん、今日は随分立派に見えるよ』と言つた。

『左様か』と爺は笑ひ乍ら『御祖父さんわれ、今日村の人や神様と仲善しになつたから氣持ちが良
いんだよ。お前は神様のお使に來た様なもんだ』と言つた。

辨太の小屋まで來ると爺は戸を開けて内へ入り、

『お婆さん今日は。秋風が立たない内にも少し修繕しなくちやいけないね』と言つた。

『おや、爺さんだよ』と老婆は驚いたが喜んで言つた。『まあ珍らしい種々お世話になりましたよ。』

お禮の申し様もありません。ほんとに有難う』

喜ばしさの餘り老婆は手を出すと爺は心を籠めて握手した。

『爺さん、お願ひがあるんですよ。私共に氣に入らない事があつてもね、どうか楓丈だけは寄こして下さいよ。私が死ぬまでね。本當に親切な兒なんだから』と言ひ乍ら老婆は先程から傍に来て居た楓に廻り付いた。

『お婆さん大丈夫だよ』と爺は慰める様に、『仲善くしませう、神様の御心通り』と言つた。

阿母は意味有りげに爺を室の隅へ連れて行き、鳥の羽で飾つた帽子を示して譯を話し、こんなものを貰ふ考への無い事を語つた。爺は一寸見て機嫌よく、

『當人が嫌つて上げるのなら良いぢやないかれ貰つて置けば。』

阿母は眞逆と思つたのが爺に斯う言はれて非常に嬉んだ。

『まあ、良ござんすか、五圓ぢや買へませんよ、ね』

と言ひ乍ら嬉し相に帽子を高く差し上げて、

『大したお土産を貰つたわね。家の辨太もフランクフルト邊りへ奉公に出し度いと思ふんだがど

うでせうね』と云つた

爺はそれは悪い事もないがまあ良い口があつたらと答へた。

折柄當人の辨太が歸つて來た。入り際に戸に頭を打ち付け、ガタビシさせて入つて來た。大分

急いでると見え室の眞中へ來てぜい／＼言つてゐる。見れば手紙を差し出して居る。手紙なぞの來

るのは實に珍らしいのであつた。名宛は楓で村の郵便局から頼まれて來たのである。皆な珍らしく思つて見て居ると楓は夫を開いてスラ／＼と讀んだ。久良子から來たのである。内容は楓が歸つて以來淋しくて淋しくて我慢が出来ず、父に頼んで秋になつたら旅行をする事になつた。おばあさんも一緒に楓や山の祖父さんを訪問するとの事、尙おばあさんよりの傳言として、お婆さんにパンを遣ると云ふのは良い心掛けだ。パン斗りでは勿けないからコーヒーを送つて上げる。間もなく届く。今度山へ行つたら其お婆さんの處へも案内してお呉れと有つた。

夫を聞いて一同の喜は譬ふるに物が無かつた。

『今日は何と云ふ良い日だらうね。爺さんが來て元の様に交際つて呉れるし、すつかり昔の様な氣持になりました。此からも度々來て下さい楓さんも。明日またね。』

爺も心こころ良よく承知しょうちしやがて別わかれを告つげて山やまを登のぼつた。今朝けさ此方こちらから鐘かねの音ねが心こころ持もち良よく迎むかへて呉くれた様ように今又いままた二人ふたりは鐘かねの音ねに送おくられ乍はがら夕日ゆふひを浴あびた山やまの小屋こやへ立たち戻もどつて來た。

後編

第一章 旅の仕度

楓を故郷へ歸さねば勿けぬと診斷した例の醫者は今日しも本間家を訪づれる可く大通りを歩いて居た。晴れ渡つた九月の朝、麗はしい日の光に氣も心も爽々しく有るべきに、何故か此の醫者は物思はしげに首を垂れ髪の手さへ春頃から見るとすつと白くなつて居る。

無理もない、妻に先立たれた後に唯一つの實とも云ふ可き最愛の一人娘が不幸にして先頃死んで終つた。醫者の落膽は一通りで無く、夫れ以來様子が全然變つて、淋しく沈み勝ちになつて終つた。

のである。

鈴の音に柴田が出て感勲に挨拶をした。此の醫者は主人の親友と云ふ斗りでなく近邊で評判の親切な人で在るから柴田も出来る丈け恭々しく迎へるのである。

『御變りは無いかね』と例の通り親しげな調子で尋ね掛け、柴田の後について階段を上つた。

『や、入らつしやい。實は例の瑞西行きのこと。も一邊考へて貰ひたいんだ。久良子も大分良いんだが、矢つ張り旅行は勿かんかしら』と本間が尋ねた。

『どうも困るね、君』と醫者は本間の傍へ腰を掛けながら『隠居さんでも居て呉れると良いんだけどもな、何うも君は感情に傾くので困るよ。之れで三度目の質問ぢや無いか、同じ事は何遍聞いても同じだよ。』

『夫りや左様だ。君も焦れつたく思ふだらうが、僕もね實際……』本間は醫者の肩へ手を載せ、
一旦約束して、然も其の約束を唯一の樂しみにして萬事を忍んで來たものを今となつて頭から勿
けないとは言へ無いんだ、僕として夫れは出來無いんでね。』

『何處までも勿かんよ』と醫者は斷乎として言つた。本間は無言で下を向いて居る。『まあ考へて見
給へ、此の夏程具合の悪かつた事は無いぢやないか。之れで今長旅をやれば結果の悪いのは見え透
いてる。今はまだ九月だから山登りも時遅れと云ふ程でも無いが、山はもう寒いよ。日は短かいし
あの體で山の中には泊れず、往復を差引くと二時間位しか居られやしない。登るたつて勿論椅子
だろ、つまり不可能な話ぢやないか。何うだらう僕から良く話して見やうか、僕の考へを。僕の思
ふにはね、來年の五月まで待つて、麓の温泉に暫らく逗留して、山の氣候の良くなつた頃を見て出

掛ける事ことにするんだ。今無理いまむりをして行くより幾いくら良いか知れ無い、病氣びやうきを癒なほさうと云ふ考かんがへなら非常じやうちやういな注意えうを要するかられ、君きみ。』

先程さきほどが黙だまつて困こまつた顔かほをして聞いて居ゐた本間ほんまは、之こゝに至いたつて立たら上あり、

『君きみ、眞個ほんとの處ところを聞きかして呉くれ給たまへ、實際じつさい癒なほる見込みこみが有あるのかね』と尋たづねた醫者いしやは肩かたを窄すばめ、

『まづ無い方ほうだね』と力ちからの無い聲こゑで言いつた。『然しかし君きみ、僕ぼくの事ことを考かんがへて見み給たまへ、他處よそから歸かへつても家うち

に待まちつてゐる者ものは無なし、そこへ行ゆくと君きみなぞは何どんなに良いいか知しれんよ。尤もつと健康者けんかうしやほどには行ゆかん

が夫それでも世間せけんの多おほくの人ひとに比くらべれば體からだこそ惡わるい何なに不足ふそくなく家うちに居ゐるんだかられ、どつちかと云い

ふと君きみなぞは幸福かうふくの方ほうだよ僕ぼくなぞに比くらべると。』

本間ほんまは常時考いつもかんがへ事ことをする時ときにやる様ように、室へやの中なかを大跨おほまたに往ゆきつ戻もどりつして居ゐたが、登のぼり思おもひ付つ

いた様に立ち止まり、

『之は何うだらう。君も近頃様子が餘り良く無いし、ちと氣晴らしをする必要が有ると思ふが、何うだれ一つ旅行がてらに楓の山家を訪問して見て呉れんか、君』

とつぜん此の申し出に對して勿論驚いたし、又辭退する考が有つたらうが、本間は之を非常な名案と獨り極めにして相手に口を利かせず、醫者の腕を握つて引つ張る様に娘の室へ連れて行つた。久良子は醫者に親しんで居るので醫者が來ると嬉しく感ずるのであつたが、然し近頃は夫れが以前程でない。勿論其の原因は久良子も良く承知して居るのでは有つた。

醫者は久良子の傍に腰を掛けた。本間も自分の椅子を近付けて久良子に瑞西行き話を始めた。

此の旅行は本間自身も非常に楽しみにして居る事を先づ言つて、話頭を急轉し、但し目下の狀態

では旅行が出来ぬが其の代り御醫者様に頼んで楓の山家を訪問して貰ひ、山の様子を見て来て貰ふとの事を話した。本間が豫期した通り果して久良子は兩眼に一杯涙を湛へた。父に泣き顔を見せまいと非常に力めて堪えはしたが、何しろ夏中、楓の家を訪問する事を唯一の楽しみとして病苦を堪えて來たのだから、行け無いと聞いて、どう思ひ切られやう。然し父が勿け無いと云ふのは體に良く無い爲めだとは解つてゐるので、決して駄多は言は無い、泣き度い程の辛さをちつと堪え、せめてもの望みと、醫者の手を握り、

「御醫者様、行つて頂戴、ね、さうじて歸つて來て楓さんや、祖父さんや、辨ちやんや夫れから山羊や、私皆な聞いて知つてゐるのだから話して、ね。楓さんに遣らうと思つて取つてあるものみんな持つて行つて、それから御婆さんにも届けて、ね、さうすれば私肝油を我慢してちやんと飲

むわ。』

此の談話が何う進んだか知らぬが、兎に角醫者を説き伏せたと見える。結局醫者は微笑しながら、

『夫れぢや行くとしやう。其の爲めに皆の望み通り久良子ちゃんがりくりり肥つて呉れれば何よりだからね。そこでと、何時出發仕りませうか、御考へは如何で御座りますな。』

『明日、明日の朝行つて頂戴』と久良子は言ふ。

『夫れが良いでせう、天氣都合もよし、斯んな時に山登りをしなきや嘘ですよ』と父が合槌を打つた。『や、驚いたれ是りやあ愚圖々々して居ると何を言ひ出すか知れんな、退却、退却。』

久良子は醫者を確かと捕へて、先づ第一の要件として楓への傳言。之は呉々も忘れぬ様に頼み、

贈る物は今古井が散歩に出て留守だから、後程荷造りをして醫者の許へ届けさせると言つた。

醫者は、すべて仰せの儘、早速出發して萬事御報告致すで御座らうと約束した。

僕婢と云ふものは何うして探るか、主人の行動を大方は推察するものだが、柴田やお常も此の點に掛けては仲々機敏な技能を持つてるので、醫者が階段を下りる頃には、早やお常は久良子の室へやつて來た。

『此の箱へね、常時食べる様な旨しい御菓子一杯入れて來て御呉れ』と、久良子は兼ねて用意してあつた箱を指してお常に命じた。お常は無造作に箱を取り上げ一寸揺つて出て行つたが、室の外へ出ると

『勿體無いや』と憎まれ口を利いた。

柴田の方は醫者を送り出しながら、

「何うか私からも宜敷と御傳へなすつて下さい」と言つた。

「やあ、もう知つてるのかね、私の行くのを」と醫者は機嫌よく云つた。柴田は一寸まごついて嘆でこまかし乍ら、

「いえ、なに、一寸その、食堂の前を通りますと名前が聞こえましたから多分、大方、でせうと思ひまして、一寸、その………」

「や其の通り、其の通り。以心傳心と云ふ事が有るからね。良いとも、よろしく申し傳へませう。さよなら。」醫者は笑ひ乍ら左様云つて開いて居る戸口を出やうとすると、散歩に出て居た古井が、餘り風が強いので戻つて來た。肩掛が風で濡らんで、丸で帆掛船の様な形格で、今や戸口を入らう

とする、出會頭に醫者と出會した。醫者は後へ退る。古井も一寸後へ退つたのだが、折柄強い風が吹いて來で帆を張つた古井の體が獨り手に前へ推されて將に醫者に打付からんとした。幸ひ醫者が身を替はしたので危く正面衝突を免かれたが、古井は二三歩行き過ぎて、くろりと振り向き、丁寧に挨拶した。多少極りが悪る相なので、醫者の方から機嫌を取るやうに、自分の出發の事を話し、楓への贈り物は他の人では解らぬから、何うか古井さんに宜敷く纏めて貰ひ度いと頼んで歸つて行つた。

久良子は楓に贈る物に付いて、古井が何か故障を言ふだらうと豫期して居たが案外だつた。古井は大層機嫌よく、直ぐ様、大きな卓子の上へ全部載せ、久良子の眼の前で荷造りを始めた。種々雑多の物が有るのだから荷造りも容易で無い。先づ第一に頭巾付きの外套、之は楓が冬になつてお

婆さんの處へ行くのに其の度に袋にくるまつて行かずに済む様にとの考へから。第二に厚い肩掛け。これはお婆さんへの贈物。次は菓子入りの箱、同じくお婆さんへ、お婆さんも巻麴飽斗り食べても居られまいから珈琲と共に食べる様にとの事。次が大きな腸詰。之は始め辨太へ贈る積りで居たが辨太が夢中になつて若し一度に食べて終つては反つて毒だからと云ふので、辨太の阿母に送り祖母や辨太に適當に分配して貰ふ事にした。小さい煙草入りの箱。之は祖父さんが夕方小屋の前に腰を掛けて一服やると云ふのを聞いてゐるからである。尙ほ其他、楓を喜ばせやうと、兼ねて樂しみに集めた小袋、小包、小箱の類を澤山入れた。辛つと包み終つたのを見ると、立派な荷物が出来上つた。古井は荷物の出来具合を熟と見てゐる。久良子は此の大荷物が届いて、楓が喜んで飛んだり、跳ねたりする姿を眼前に思ひ浮べて居た。

やがて柴田が来て荷物を肩に載せ、直ちに醫者の家へ持つて行つた。

第二章 山へ御客様

山では夜の明けるのが早い。新鮮な朝風が樅の樹の大枝を前後に揺り動かして居る。楓は其の音で眼を醒ました。楓は此の音を聞くと妙に引き付けられる様に樹の下へ行き度くなる。寢床から飛び起きて身仕度する間ももどかし相に、やがて梯子を下りて見ると、祖父さんの寢床は空で在つた。戸外へ走り出て見ると、祖父さんは小屋の前に立つて常時の様に天氣具合などを觀察して居た。折柄、太陽が向ふの大岩の邊りから上つて来るので、刻一刻青くなつて行く空に蒼蒼色の雲が漂ひ、高原や牧場の方は金色に彩られて來た。

「綺麗だ、綺麗だ。祖父さん御早う御座います」と楓は飛び歩き乍ら近づいて来た。

「御早う。もう起きたのかい」と爺は答へた。

楓は横の樹の下へ走つて行つて、揺れ動く梢を見ながら躍り廻はり、風が當つて枝の動く度に益々喜んで飛び跳ねた。

爺はその間に檻へ行つて白と赤との乳を搾り、ブラシで體を綺麗に拂つてやつて檻外へ出した。楓は山羊を見ると馳け寄つて其の頸を抱へる、山羊も甘へる様に兩方から楓を挟んで體を推し付けた。

聽て辨太の口笛が下の方で聞えた。暫らくすると山羊の群が活潑に上つて来た。辨太も續いてやつて来た。

『今日は来るだろ?』と辨太は稍々拗れる様に訊いた。

『行け無いよ、御客様が来るかも知れないから家に居るの』と楓が答へる。

『毎日そう言つてゐるぢやないか』と辨太は澎れて言つた。

『だつて眞個だよ、来るんだもの。皆が来た時私家に居なくちや勿け無いぢや無いか、辨ちやん
聞らないの?』

『爺が家に居るから良いぢや無いか。』辨太は喧嘩腰になつて言つたが小屋の内から爺の太い聲がした。

『軍隊が動かないぜ。兵隊が悪いのか大將が悪いのか。』

辨太は夫れを聞くと、くろり向き直つて棒を振り廻はし口笛を吹いた。山羊は進軍の合圖をちや

こころえゐるたいしやうしんが
んと心得て居るから大將を殿として全軍頂上へと突進した。

かへてやまごやかへ
楓が山小屋へ歸つて後は、昔と大分違つて來た。毎朝自分の寢床の後仕末をする。椅子なども整然と片付け、散らばつて居るものは戸棚の中へ納ひ、三脚へ上つて卓子を雑巾で綺麗に拭く。

いつきれい
『何時でも綺麗だな。修業しただけ有るね。』と何時も爺は喜んで言つて居た。

けふべんたい
今日も辨太が行つた後で、楓は朝食を食へ終ると、常時の様にせつせと働き出した。戸外は良い天氣で、片付けものをしながらも楓は折々手を止めて戸外を眺めた。窓から射し込む美しい日の光が恰も、

かへてそと
『楓や、戸外へ御出よ』と誘ふ様に見えるので、到頭我慢が出来ず走り出した。小屋の周囲は麗らかな日光を受け、山々は言ふまでもなく遠方近方平野が煌々反射して、崖の上などは黄金の様

に光つてゐるので、暫し楓は見惚れて居た。が、小屋の内に三脚が出し放しになつてゐると、卓子が未だ拭いて無いのを思ひ出して又内へ馳け込んだ。

間もなく今度は縦の樹が風で唸り出した。此の音は楓の足に電氣でも掛けられる様で、とても溜らず又戸外へ飛び出して四邊を跳ね廻つた。爺の方は中々忙しい。でも折々戸口へ出て来て楓の飛び廻つてゐるのを見て微笑して居た。丁度爺が内へ引つ込まうとする途端に楓の叫び聲がした。

『御祖父さん、来たよ！』

爺は何事が出来たかと驚いて振り返ると楓は叫び乍ら下の方へ馳けて行く。

『来たよ！ 来たよ！ 一番先きのは御醫者様だ。』

楓は一行を出迎へる可く一敷に馳け出した。醫者は之を見て手を差し出して見せた。楓は傍まで

● 行くと其の手を握り無性に嬉しがりながら、

『御醫者様！ 今日ば。此の間は有り難う御座います！』と叫んだ。

『や楓さん、御早やう。有難いつて何だれ』醫者は笑ひ乍ら訊いた。

『家へ歸れたからさ』と楓は説明する様に答へた。

醫者は楓に斯んな歓迎をされるとは思つて居なかつたので、非常に喜んだ。淋しい氣分で山に登つて來たので周囲の光景の美しさも録に見ずに来た。第一、楓が自分を覺えてるか何うか、夫れさへ確で無い。久良子を連れて來れば兎に角、自分丈けでは餘り喜ばれ無いものと極めて居たのである。ところが全く反對で楓が嬉し相に迎へ、殊に感謝の念さへ持つて居て呉れるので、醫者も案外の思ひがして自分の子の様な氣持ちがした。

『どれ親父さんの處へ御案内をして御呉れ』と言つた。

しかかへて知なところた然し楓は同じ處に立つて不思議相に下の方を見て居る。

『久良子さんやお婆さんば？』と尋ねた。

『やあ、其の質問には閉口するんだ』と醫者は困つて、『御覽の通り僕一人なんだ。久良子さんは夏中具合が悪かつたので今旅行が出来ないんだ。だから御婆さんも來ないのさ。春になつて時候が良く日が永くなれば屹度來るよ。』

かへてひじやうしつぽう楓は非常に失望した。勿論と思つた事が違つたので暫らくは茫然として居た。醫者も氣の毒に思つて之亦暫し無言の儘立つて居た。

四邊は寂として閑こゆるものは樅の梢を訪れる風の音斗り。楓は辛やく我に返つて顔を上げると、

「いしや 醫者が氣の毒相に自分を眺めて居るので、楓の方で反つて氣の毒になり、

「直きに春が来るから良いや、今来て直ぐ歸るより其の方が良いや」

と健氣にも諦めたか、慰める様な言を云つて、小屋へと案内した。二人は手を連れて途を上つた。

其の間も、楓は餘り自分の失望した事が醫者に對して氣の毒に感じたと思へ、『山では夏が直来る』

とか知ら無い中に春になる』とか種々慰める様な事を云つたが、夫れは反つて自分の慰めとなつ

たので有らう大層元氣が良くなり、

『皆は來ないよ。だけど今に直来るつて』と爺に報告して居た。

醫者の事は兼ねて楓から聞いて居るから、爺は喜んで迎へた。やがて三人がベンチの上へ腰を下ろすと、醫者は、本間が訪問し度い希望のあつた事や、醫者が保養の必要があるので旅行を勧めら

れた事ことなぞを語り、更に楓かへでに向つて贈り物ものが問も無く届とどいて来る事ことを話すと楓は早く見たいみたいと大層期待きたいしてゐた。

爺おやぢは醫者いしやに是非せひ暫らくの間此このの山で保養はやうする様にと勧めた。尤も自分の家には泊める丈だけの設備せつびは無いが、室丈へやだげなら下したの村でも借りられるから、さうして毎日運動まいにちうんどうがてら登のぼつて來たら屹度きつと體からだの爲ために良よからうと云つた。醫者いしやは此このの勧めを大層賛成たいそうさんせいして、左様さうする事に決めた。其そのの中うち、正午ただひらきとなり風かぜがないで、樅もみの梢こずえも静しづかになつた。高たかい所丈ところだけに氣候きこうも柔やはらかで日當ひなたに居ても少しも暑あつくない。爺おやぢは小屋こやから卓子ていおるを持ち出して夫れを腰掛こしかまの前へ据えた。

『楓かへでや、種いろいろんな物を運はこんでおいで』と爺おやぢが言つた。『御馳走ごちそうは有ありませんが食堂しょくどう丈だけには天然てんねんの大廣間ひろまですから。』

「や、全く良いですな。」醫者は日光を浴びた平原を眺めながら言つた。『斯う云ふ處で食事をしたら喉旨いでせう。』

楓は馳の様にちよこく馳け廻つて、戸棚の中から必要品を残らず取り出して來た。

爺は其の間に小屋の内で食べ物を調理して居たが、やがて湯氣の立つた乳の瓶、狐色に焼けた乾酪、透き徹る様に乾燥した手製の肉などを持て來て醫者に勧めた。

「本間の久良子が斯う云ふ處で斯う旨く食事をしたら瞬く内に肥つて丈夫になりますな」と醫者が言つて居た。實際斯んなに旨く食事をした事は無かつたのである。

誰か大きな荷物を擔いで下から上つて來た。小屋まで來ると荷を放り出してほつと息を吐いた。『あゝ之れだよ届け物は』と醫者は立ち上がり乍ら楓を呼び、荷物の傍へ行つて解き始めた。上の

包みを解くと、

『さ後は自分で楽しみに開けて御覽』と云つた。

開けるに従つて種々の物が出て来るので楓は夢中になつて解いて居る。醫者は又遣つて来て、大きな箱の蓋を開けて楓に見せ、『そら、お婆さんの珈琲の時の』と云ふと、楓は『こんだは御菓子が出来た』と喜んで叫び其の箱を持つて躍り廻つて、直ぐに持つて行つて遣らうと云つたが、爺はいづれ夕方御醫者様を村まで送つて行くから其の時一緒に持つて行けば良いと止めた。楓は包みの中から煙草入りの箱を見付け出して爺に與へた。爺は非常に喜んで直ぐに煙管に詰め、醫者と四方八方の話をしながら冒相に爐らして居る。楓は尙も大騒ぎを續けて居た。

日が大分傾いたので、醫者は立ち上つて村へ下りる仕度をした。爺は菓子箱、腸詰の包み、肩

掛け、などを小脇に抱へ、楓は醫者に手を引かれ、一同山を下りた。辨太の小屋まで來ると楓は二人と別れた。別れ際に、

『あした山羊と一緒に牧場へ行く?』と醫者に尋ねた。牧場は楓に取つては唯一の名所なのである。

『是非御案内を願ひませう』と醫者が答へた。

二人は降りて行く。楓は小屋へ入つた。贈物は戸口の處へ爺が置いて行つたが、楓には一度に持ち込め無いので幾度にも運び入れ、何れもお婆さんの觸つて見られる様にと傍へ並べた。肩掛けは特に膝の上へ載せて置つた。

『皆久良子様とお婆さんとが呉れたの』と楓が叫んだ。辨太の母は先程から楓が運び込む品物を

呆然として見て居たが、

『まあ、祖母さん、嬉しいでせう御菓子、御旨し相だ事』と言つた。

『何と云ふ親切な方々だらうね』と言ひ乍ら老婆は福々した肩掛を撫で『冬になつたら何んなに助かるか知れない。斯んな立派な物が出来るとは夢にも思はなかつたよ』と言つて居た。

楓は老婆が、菓子より肩掛の方を嬉しいがるのを不思議に思つて居た。阿母は卓子の上へ置いてある腸詰の前に立つて忝々しく眺めて居る。全く以て今日迄斯んな偉大な腸詰を見た事が無い。之を切つて食べるのかと思ふと何んだか勿體無い様に思つた。

『爺さんに相談して見やうかしら』と阿母が言ふと楓は『食べられるんだよ』と言つた。
丁度其の時辨太が馳け込んで来て、

「爺が後から来たよ。楓ちゃんに……」と言ひ掛けたが卓子の上に安置してある腸結の大塊を見るとき、驚いたのか口を緘んで終つた。

山爺も今では此の小屋を素通りしない。屹處立寄つて老婆の機嫌を尋ね何かしら元氣を付けて遣るので、老婆も今では爺の足音を聞くと喜ぶ様になつた。然し今日はもう遅いし朝が早いから『もう楓を寝かさなくちや勿かん』と云ふ譯で、戸外で聲を掛け楓の手を探つて星明で小屋へ歸つた。

第三章 慰めを得て

翌朝早く、醫者は、辨太や山羊と一緒に山へ上がつて來た。醫者は途々辨太に話を仕掛けるが短い答をする斗りで一向辨太は話をしない。黙まりのまま爺の小屋まで來た。楓は二疋の山羊と

一緒に元氣充々として一同を建へた。

『来る？』例の通り辨太が尋ねた。

『行くよ。御醫者様行けば行く』と楓が答へた。

辨太は醫者の方を横目で一寸見た。

爺は辨當の包を手にして出て來たが、先づ醫者に丁寧に挨拶して辨太の傍へ行き其の肩へ包を載せた。包の中には乾肉が可なり入れて有つたし、二人分だから例より重かつた。辨太は特別なものが入れて有ると察して大きな口を横に擴げてにやりとした。

一同出掛けた。楓は山羊に取り巻かれて居る。山羊は互に推し除け合つて楓の傍へ寄らうとするので楓は歩く事が出来ない。

『駄目だよ。そんなに推しちや歩けないよ。御醫者様と一緒に行くんだからさ。』

と言つて居た。辛く群を推し分けて醫者の傍へ走せ寄り、其の手にすがつた。忽ちの内に話が始まる。

山羊の事。草花の事。山の事。鳥の事。夫れから夫れと話す中に何時しか牧場へ着いた。

辨太は歩き乍ら折々醫者の方を、いやにぢろぢろと見たが良い按配に醫者の方では氣が付か無か

つた。

牧場へ着くと、楓は例の一番良い場所へ醫者を案内し、そこへ座つて四邊を見廻した。此處は

楓の最も御得意の場所なのである。醫者も傍の日常りの良い處へ座つた。秋の日影が山々の頂

や遙の縁の草原を金色に照らし、あちこちから響いて来る山羊の鈴の音は平和を唱ふ音楽の様で

あつた。遙かの高い雪の原は煌々と日光に反射し、白山の峯が青空の中へ塔の様に聳えて居る。

朝風は柔かに四邊の草花を撫で動かし、大きな圓を畫いて空を飛んでる。鷺も今日は聲も立てず、極めて穏かな光景である。

楓はあちこちを満足げに打ち眺め、醫者は何う感じて居るか。何ふ様に其の方を見た。醫者は先程より黙つて四邊を眺め頼りに考へ込んで居たが、楓と顔を見合せ、

『成る程、此原は良い景色だね。だが……心の中に悲しい事があると美しい景色を見ても矢つ張り……』と云つた。

『ううむ、此處へ來れば悲しい事は無いの、フランクフルトに居ると有るけど。』

醫者は一寸微笑んだが、

『悲しい事の有る人が若し有れば何うするね。』

『左様すりやあ神様に願へば良いや』楓は受合ふ様に言ふ。

『左様。然し其の悲しい事が矢つ張り神様から與へられたものなら何うするね』

楓は一寸答へに詰つた。左様いふ時には何と言つて良いか解らない。然し悲しい時に神様に願へば良いと云ふ事丈けは實際して堅く信じて居た。

『それならね、待つてれば良いや』と楓は確信があつた。『その内に屹度良くなるから。神様を忘れ無いで願つて居れば後になると解るの、其の時は悲しくつて仕様が無いけど。』

『成る程夫れは立派な信仰だ』と醫者は言つて、暫し無言で山を眺めたり苦射す緑の草原を見下ろしたりして居たが、

『悲しい事が有つて眼が塞がつて居れば美しい景色も見え無いで、反つて餘計悲しくなるよ。其の

心持ちが解るかれ』と言つた。

楓は之を聞いて急に胸が詰つた。眼が塞がつて居ればと云ふ事から、直ぐに辨太の祖母を聯想したのである。二度と目の光を見る事は出来ぬと御婆さんの言つた言葉は、楓の心に深い悲しみとなつて入つて居る。それが頭を擡げたのである。暫らく楓は黙つて居た。

『解るわ。だげどお婆さんの讚美歌を聞けば少しは眼が見えるやうになるわ。お婆さんが左様言つたもの。』

『何んな讚美歌かれ』と醫者が尋ねた。

『御婆さんが一番好きだから何時でも三遍づゝ歌ふ歌。』

『私も聞き度いね』と醫者は眞直ぐに座り直して耳を傾けた。

楓は歌ひ出した。暫らく歌つて居たが、ふと止めた。醫者が兩眼を手で抑へて身動きもせず
居るのが何うやら眠つて居る様に見えるので、眼を醒ましたら歌はふと中止した。四邊が寂し
た。醫者は寢て居たのでは無く、遠い昔を思ひ出して居たのである。丁度今楓が歌つた歌は自分
が子供の頃母の手に抱かれ乍ら屢々聞かされた歌であつた。そして遠い昔の母の姿が有り有りと心
に浮び出で懷舊の思ひに堪へず、兩手に顔を埋めて身動きもせず居たのである。やがて心付いて
立ち上がると楓が自分を凝視して居るのに氣が付いて其の手を探り、
『良い讃美だね、今度來た時にも歌つて御呉れ』と言つた醫者の聲は如何にも快活であつた。
辨太の方では甚だ詰らなかつた。此のところ二三日楓が山へ來なかつた。今日は來たと思へば見
知らぬ人が傍に居て近寄る事も出來ない、甚だ以て不平であつた。そこで二人の方から見えない小

高い處へ登り、拳骨を造らへて、幾度か醫者を打つ眞似をしたが、何時までも二人が話してるので辨太は二つの拳骨を振り廻はして怒つて居た。

其の中晝頃になつた。辨太はとつくに氣が付いて居たが我慢し切れなくなつて、

『御盃だよう』と不意に途方もない大聲で怒鳴つた。

楓は立ち上がつて包を取りに行かうとすると、御醫者様は辨當は食べ度くないから乳を一杯吞ませて呉れ、そしてもつと高い處へ登つて見度いと云ふ。さう言はれると、楓自身も矢張り辨當はよして乳丈け呑み、何時かデスが落ち相になつた崖の處へ案内しやうと考へた。そこで辨太の許へ走つて行き、其の事を話して白の乳を搾つて呉れと頼んだ。辨太は驚いた顔をして暫らく楓を見て居

たが、

『袋の中のは誰れが食べるんだい』と尋ねた。

『辨ちやん御食べよ。其の前に乳を搾つとくれ、急いで』と楓が云つた

辨太は非常な元氣で急いで乳を搾つた。何しろ袋の中の御馳走を食べても善いと言はれたので二人が乳を呑んで居る間に、先づ袋の中を一寸覗いて見ると、肉の大切が見えたので喉をぐびぐびさせた。手を差し入れて出さうとしたが急に引つ込めた。先程後の方で拳骨を振り廻はし鬚者を打つ眞似をした事を思ひ出し、御蔭様で今食べられるのだから申譯の無い氣がしてならない。そこで躍り上がると再び先程の小高い處へ走つて行き、大手を擴げて空中に差し延ばし、先づきの拳骨は取消しだと云ふ意味を示した。可成りの間やつて居たが辛く氣が擠んだと見えて袋の處へ馳け戻り、安心して當時にない此の珍味を賞玩した。

御醫者と楓とは連れ立つて彼方此方を暫らく歩き廻つた。もう制限も良い加減になつたし楓も山羊と遊び度からうから、醫者は歸ると云ふと、連れ無しでは淋しいから楓は自分の小屋まで一緒に行くと言つて又も連れ立つて山を下りた。山羊の一番好きな草の生えてる處や、夏になると花の一番澤山咲く處などを案内し乍ら下りるので、途中話の種が盡き無い。やがて醫者は楓に別れを告げ村へ歸つた。楓は同じ處に立つて頻りに手を振つて別れを惜んで居る。亡なつた醫者の娘が丈夫の頃父親が外出する時に、能く同じ様な事をしたのを思ひ出して、醫者は後を振り返り返へり下りて行つた。

晴れ渡つた秋日和に醫者は毎日山登りをした。時折は爺と一緒に高山植物のある邊、虎の巢のある岩山の邊までも登つた。醫者は爺との交際を非常に愉快に感じた。爺が山の植物殊に其の

かうようよ^しし効用を良く知つて居るのに驚いて居た。植物斗りで無く、山に住み、動物類に關しても爺は中々詳しく、岩穴や木の枝に巢を造つて居る小動物などに付いて醫者に面白い説明をする。醫者も興に乗じて時の移るのを忘れ、夕方になつて急に別を告げ、

『又此の次に教へて頂きませう』と言つて歸る事も屢々であつた。

然し天氣の良い日には多く楓と一緒に往つて例の崖の邊へ陣取る。楓は讚美歌を歌つて聞かせ、辨太も後の方に座つて聞いて居る。近頃は、辨太も溫和くなつて蔭で拳骨を振り廻したりなど仕無くなつた。

さうかうする内に、九月も終りになつた。或る朝、御醫者様がやつて來て、大層親しくしたので残念だが最早やフランクフルトへ歸らねばならぬ、今日は暇乞に來たと残り惜しさうに告げた。

爺は大層名残を惜んだ。楓は勿論のこと、急に楽しみを奪はれる様な氣がして解せぬ顔付をして居た。醫者は爺に別れを告げ、楓を誘ふて一寸下まで一緒に行かうと手を取つて下つた。暫らく行くと醫者は立ち止まり、可成り來たから、もう歸るやうにと勧め二三度楓の頭を撫で、

『さ、もう御家へ御歸り。私と一緒にフランクフルトへ來られれば良いんだが……』と云つた。

不意に楓の心にフランクフルトの生活が思ひ浮んだ。澤山の建築物。石疊の往來。古井の姿。久良子。お常。と順々に浮んで來ると何うやら氣が通まない。

『御醫者様が又泊りに來る方が良いや』と云つた。

『左様だ、其の方が良いかも知れない』と云つて楓と別れの握手をした。

醫者の眼には露さへ宿つて居る様であつたが、其の儘別れて麓の方へと急いだ。

楓はちつと立つて身動きもせずに居たが、別れの悲しみが泌々と感じると、わつと斗り泣き出して離れて行く醫者の後を追つて馳け出した。『御醫者様！ 御醫者様！』

醫者は振り返つて立ち止まつた。楓は追ひ付くと泣き乍ら、

『フランクフルトへ行き度い、行つても良い？』と尋ねた。醫者は興奮して居る楓を抱いて馴す様に、

『今は來ない方が宜いだろ、又病氣になると勿けないから。其の代り御約束をしやう。若し私がいれば、病氣にでもなつて淋しい事があつたら屹度來て御呉れ、良いかい。』

『行く行く、直ぐ行く。私御醫者様が好きなもの。祖父さんも好きだけど。』

そこで醫者は最後の握手をして麓を指して行つた。楓は何時迄も立つて見送つて居た。愈々見え

無くなる間隙に、醫者は再び振り返つて楓の方に手を振つて、

『山へ來た御蔭で靈肉共に健康になつた。何うやら活き返つた様な氣がするわい』と獨り言を云つて居た。

第四章 村で冬を

山では雪が段々積つて、小屋の窓と同じ高さになり、入口が閉されて終つた。爺が山小屋に居れば今時分は辨太の小屋と同じく閉ぢ込められて居たのである。

辨太は毎朝の様に窓から外へ匍ひ出して雪の中へ飛び込み、先づ全身を働かして身の周の雪を拂ひ除け、多少の空所を作らへる。夫れから、阿母の差出す箒を取つて一生懸命に出入口までの途

なつけ、段々と小屋の周囲の雪を掻くのだが、夫れが中々容易の仕事では無い。雪が固まらない内は、戸を開ければ内へ崩れ込むし、固まつて終へば、塀の縁になつて如何とも出来ず、要するに、雪の融けるまでは辨太の他は一步も外へ出られないのである。

尤も雪の凍つてゐる間は辨太に取つては實に便利な事がある。村へ行かうとすれば、窓を開けて初ひ出しさへすれば良いのである。阿母が後から櫓を推し出して呉れる、之に乗れば行き度い方角へ走つて行ける。つまり村までが一面の平らな大きな阪になつて終つて居るのである。

爺は言つた通り山を下りた。雪が降り始めたので小屋を閉ぢ楓と山羊とを連れて村へ來た。教會の牧師館の傍に、以前は立派な邸であつた一つの大きな建物がある。何んでも昔、勇敢な一武士がスペイン戦争に出陣して武勳を建て、富を得て、此の村に廣大な邸宅を構へた。然し活動の舞臺

に馴れた人には永く此の静寂の地に住んで居られず、他郷に移り住んで其の儘歸つて來ない。其
 後亡き人となつた事が知れて此の村に住んでた遠い親戚が譲り受けたが、破れ放題で手入れもせず
 に其儘貧乏人に貸して有つた。其後暫らく經つて山爺が息子の苦次と此の村へ歸つて來た時に
 此の邸を借りて住まつたが、以來誰れも借りるものが無い。冬になれば壊れた處から用捨無く風が
 吹き込んで燈火さへ保たないから、幾ら貧乏人でも我慢が仕切れないのであつた。山爺は修繕に
 かけては黒人だから、村へ住む決心をすると同時に此の邸へ移る覺悟をして、秋の間に方々修繕
 して置いて、七月の半頃楓と共に愈々此處に住む事になつたのである。
 裏口を入ると双方の壁が崩れ落ちた廣間がある。上には半圓形の窓が付いてるが硝子も無く藁が
 からみ付いて居る。尤も其の御蔭で持つてると言つても良いのである。何んでも此處は禮拜堂に用

ゐたものらしい。室へやといつても戸とが無いから、入口いりぐちから見透みとおしである。床ふかには苔こけに埋うもれた立派りっぱな瓦かわらが所々ところどころに見えて、有りありし昔むかしの榮華えいけな物語ものがたつてゐるかの様ようである。屋根やねも大半たいはんは朽くち二本ほんの大きおほな柱はしらで辛やつと保もつて居ゐる。爺おやぢは此この室へやの周圍しうゐに板いたをうんと打ち付うけ、床ふかには乾草はしぐさを敷しき詰つめて此處ここを山羊やぎの御室おへやにした。

表口おもてぐちの櫳かしの大戸おほど丈だけげばちやんとして居ゐた。入はいつた處ところは廣々ひろとした室へやで此處こゝは壁かべも羽目板はめいたも満足まんぞくであつた。隅すみに天井てんじようへ届とどき相さうな大きおほな暖爐すとうが取り付つけてある。其その暖爐すとうの白しろい煉瓦れんぐわに青色こじやうで古城こじやうの畫えがかいてある。古城こじやうの周圍しうゐに樹木じゆぼくが繁しげつて、犬いぬを連つれた獵師れふしが一人立ひとりたつて居ゐる。傍そばに湖水こすゐがあつて、岸邊きしべの大きおほな櫳かしの木きの下したで釣つりをして居ゐる人ひとがある。楓かへでは早くも此この畫えに眼めを付つけ、ベンチこしに腰こしを掛かけて此この畫えを眺ながめた。暖爐すとうの後あとの方ほうへ廻まはると、壁かべとの間あひだに林檎りんごの箱はこの様ようなものが置おいてある、

これかへてねどこ
之は楓の寢床で有つた。上敷も上かけも掛けてある。

『私の寢床だね、良い處だね。御祖父さんのは？』何處と楓が尋ねた。

『寒いから御前のは火の傍にしたんだ。祖父さんのも有るよ』と爺が答へた。

楓は室を方々捜すと隣に小さな室があつて其處に爺の寢床が出来て居た。其の向ふに月があつて夫れを開けると臺所である。實に大きな臺所で楓は驚いて居た。此の邊は爺の最も修繕に苦心した處で、壁には到る所板を打ち付けてあるが、未だ完成してゐないのであつた。

楓は家が變つたので大喜び。次の日辨太が家を見に来ると方々案内して頻りに説明をして居た。

暖爐の傍の楓の寢床は大層具合が良かった。然し朝眼が醒めても一寸の間は茫然として、何んだ

か山小屋が懐しい様な氣がした。でも爺が山羊に何か言つて居る聲を聞くと、矢つ張り自分の家だと

云ふ心持ちになり、嬉々として山羊の御室へ走せて行くのであつた。

『今日は御婆さんとこへ行き度いな、随分行かないから』と、四日目の朝楓が訊くと、

『今日も明日も行けないよ。山は六尺も積つてて辨太でさへ辛つと歩いてるんだから、御前の様な少さい兒は雪の中へ埋まつて了ふ。も少し經つと氷つて雪の上を歩ける様になるから』と爺が言て居た。

それ迄待つのは楓に取つては可なり辛かつたが、家の中にも用事は澤山有るから日一日と過ぎ行く。楓も今では午前と午後學校へ通ふひ、課業も著しく進歩して來た。辨太は減多に學校へ出席しない。先生は溫厚な人で、『辨太は又休んだね。來れば爲めになるんだが、雪が深いから來られななんだ』と同情してゐたが、然し辨太は夕方學校が終つた頃になると楓の家へ遊びに行くのであ

つた。

数日後空が晴れたが夏の様に山が青々として居ず、花も咲いて居ないので、太陽も張り合ひが無いのか直きに引つ込んで終つた。其代り夜は大きな月が終夜廣々とした雪の山を照らして居た。朝見ると何處もかも水晶の様になつてた。辨太は何時の様に雪の中に躍り出したが表面が非常に固くなつてるので體がつるつるに滑る、そこを踏み敲いて見たが少しも壊れない。金山が米の固まりになつて終つて居るのである。斯うなれば楓が遊びに来られると知つて、辨太は兼ねてから之れを待ち設けて居た。そこで直ぐ様家に入り、阿母が注いで呉れた乳を呑み下すと、麵粉を衣褌へ捻ぢ込んだ。

『學校へ行くよ』と言つた。

『あゝ御出で、よく習ふんだよ』と阿母は勵ます様に言つた。辨太は櫓を引き出して窓の外へ伺ひ出し、それに乗つて送り出した。

まるで電光の様に走つて行つた。猛烈な速力で走つたので村の邊で止めやうとしたが下り坂で止まらない。無理に止めれば櫓が壊れるので、仕方なく可なり下の方の平な處まで行くと、燭りに止まつた。随分下り過ぎて終つた。村まで戻るには餘程時間が掛かるから結局學校の時刻には間に合はない事になつて終つた。辛やく村まで上ると楓は丁度學校から歸つて爺と晝食をして居た。辨太は内へ入り兼ねて考へて居たが、突然、

『占めたよ！』と言つた

『占めた？ 景氣が良いね。何を占めたんだい？』と爺が尋ねた。

『雪が米つたよ』

『やあ。夫れぢやお婆さんとこへ行けらあ』と楓が嬉し相に叫んだが、『辨ちやん、何故學校へ來ないの。櫓に乗れば來られるぢや無いか』と詰る様に尋ねた。

『迂り過ぎて遅くなつたんだ』と辨太が答へる。

『夫りやあ軍隊なら酷い目に合ふんだぜ』と爺が言つた。辨太に取つては山爺以上に畏敬すべき者は無いので、怖がる様な身振りをした。

『夫れに御前位、櫓の上手なものが、迂り過ぎるなんてなあ恥ぢや無いか。山羊が勝手放題な方角へ行つて、言ふ事をきか無い時にや何うするい？』

『ぶん殿ぐるよ』と辨太は知れ切つた事の様に云ふ。

『學校の生徒が山羊の様に、勝手な事をして殴られたつて文句が言へるかい？』

『あたりまへだ？』

『それ見な。迂り過ぎて學校の時間に遅れたんだから殴られても仕方があるまい。此處へ來な、俺が殴つて遣るから』

此の理屈は辨太に良く解つたので困つた様にきよろしくして居た。

『まあ善いや、此方へ來て食べな。楓も行き度きや行つても良いよ。夕方楓を送つて來て呉れりやあ夕飯を御馳走するぜ。え大將』と爺ばにこゝくして言つた。爺が急に打ち解けたので、辨太は喜んで額を縦横に歪めながら、楓と並んで食卓に向つた。楓は、もう澤山食べたし、山へ行けると思ふと嬉しくて、何も食べられないので、自分の皿に残つて居た大きな芋や乾酪の焼いたのなぞ

を辨太の前に推し遣つた。爺も辨太の皿に入れて遣つたので、双方から食物の挟み打ちに遇つたが、此の辨太と來たら多々益々辯する勇敢なる食手だからピクともしなかつた。楓は戸棚の處へ行き、久良子に貰つた小さな外套を出して來た。頭巾も付いて居るし、之なら雪道でも暖く歩ける。辨太が最後の一塊を口へ入れると、楓が『さ行かう』と促した。

二人は連れ立つて出掛けた。楓は白と赤との事で辨太に話す事が澤山有つた。引つ越した初めの日は小舎が違ふので、ちつとも草を食べなかつた事や、終日頸をうな垂れて鳴きもしなかつた事や、祖父さんに訊いたら、山羊は始めて山から下りたのだから、丁度楓がフランクフルトへ行つたのと同じなのだと答へた事などを語り、『辨ちゃんだつて矢つ張り左様だよ』と附け加へた頃には、二人は早や小屋に着いて居た。辨太は常時になく大層考へ込んで居たが、小屋の處で立ち止

まり一寸膨れて、

『爺に殴られるより學校へ行つた方が良いや』と云つた。

こ
之れは楓も同感で大に辨太を獎勵して居た。

うちなか
家の中では辨太の母が、斯んな寒い日には、體が良くないのだから寢て居る方が良いと祖母に勵め自分は繕ひ物をして居た。楓は室の中へ入つて見ると、常時隅に腰掛けて居るお婆さんが、今日は肩掛にすつぱり包まつて寢て居る。

『まあ有難い』と、楓の入つて來たのを聞いて祖母が言つた。此の秋以來老婆には一つの心配がある。といふのは辨太の話に由ると、何んだか見知らぬ人がフランクフルトから來て、毎日楓と一緒に牧場へ行くとの事で、てつきり之れは又楓を連れに來たのだと老婆は考へた。其の中に

其の人は獨りで歸つたと聞き、さては誰かを迎へに寄越す積りだらうと想像して、又楓に遇へなくなるかと獨りで心配して居たのである。

『お婆さん、病氣で苦しいの?』と楓は小さな寢床の傍へ行つて老婆に尋ねた。

『否え、寒いのでね、少し手足が痛い丈だよ』と楓の頬を撫でながら慰める様に言つた。

『そいぢや暖くなれば直きに癒るよ、ねお婆さん』と楓は熱心に訊く、

『あゝ癒りますとも、今日あたりも起きて、ちつと糸をやつて見やうかと思つた位だから、明日は

もう起きられるよ。』楓が心配して居るのを見て老婆が左様答へた。楓は夫れを聞いて大層安心し

た。實は今迄に老婆が病氣で寝たのを見た事が無いので、一方ならず困つて居たのであつた。楓は

暫らく老婆を見て居たが、

「フランクフルトではね、肩掛けは戸外へ出る時にするのよ。お婆さんは寝る時にするの？」と尋ねた。

『寒いからね、床の中でもして居るの、是れをして居ると暖かいから。』

『お婆さん！ 頭の處が何うして低いの變だね。』

『之れはね』と老婆は枕を動かして乍ら『始めは枕が高かつたのだけれども、常時して居るので斯んなに平たくなつて終つたんだよ。』

『久良子さんに貰へば宜かつたね私のな。大きな枕が三つ載つてね、餘り高くつて寝られなかつたの。お婆さんなら寝られる？』

『そんな良い枕だつたら暖かいだらうね。それに頭も楽だらう！』と老婆は高い處を探がす様

に顔を曇げなまら言つた。『だが、もうそんな御話は止めませう。有難い事だ、斯うやつて寫て居ても旨しい通帳が食べられるし、暖かい肩掛けもあるし、楓ちゃんも来て呉れるし。今日は又何か讀んで頂きたいわ。』

楓は例の古い讚美歌を探つて来て、好いのを順々に歌つた。老婆は手を組合せ顔色を柔げ感謝の念に充たされて聞いて居た。

『老婆さん！ もう癒つた？』と不意に楓が歌を止めて尋ねた。

『大層良くなつたよ歌を聞いたので』と、老婆は歌の終りの句を幾度も繰り返して喜んでゐるので、楓は嬉しくてならなかつた。

『老婆さん。もう暗くなるから家へ歸るよ』と言つた。

老婆は楓の手を握り、

『有難うよ楓ちゃん。お婆さんはね、例令癒らなくつても泣きませんよ。幾日も床について何一つ見ることも出来ずに居ると泣き度くなるが、今の様な歌を聞くと心の眼が見える様で何んなに嬉しか知れませんか』と言った。

楓は別れを告げ、隣りの室に居る辨太を促した。日はもう暮れたが月があるので雪の夜は真昼の様に見える。辨太は楓の仕度をして楓を自分の後に座らせ、丸て飛ぶ様に山を下り下りた。

其の夜、寢床に入ってから楓は老婆の事を種々と考へた。歌を唱つてやると、あんなに嬉しがるのだから毎日唱つてやれたら常時喜んで居るだらう、然し今はさう度々行け無いので残念だと思つて考へて居たが、不意に氣が付いて床の上に起き直り、祈禱を始めた。老婆や祖父さんの爲

めに心を籠めて蹲つた。そして辛つと安心して再び乾草の中にもぐり平和な寝りについた。

第五章 長い冬

爾來辨太は正確に學校へ出席した。正午になると近處の者は我家へ歸り。遠方の者は持つて來た辨當を出して晝食をする。二時迄賑かに遊び、それから又稽古が始まる。學校が済むと辨太は爺の家へ寄つて行く。

『辨ちゃん』と或る時改まつて楓が呼び掛けた。

『何だい』

『お讀みの御稽古をおしよ』

『役に立たないや』

『ううむ立つんだよ。少し御稽古をすれば直きに出来るよ』

『駄目だあ』と辨太は言ふ。

『私も左様思つたけど、フランクフルトのおばあさんが、駄目だと思つては不可ないつて言つた

よ。』

辨太は茫然して聞いて居る。

『私が讚美歌を教へて上げるから、毎日お婆さんに讀んで御遣りよ。』

『嫌なこつた』と辨太は唸る様にいつた。

良い事でも悪い事でも兎角辨太は強情である。楓は辨太の反對は覺悟して居たと云ふ様に。突と

辨太の前に進んで言ひ聞かす様な口調で、

『辨ちやん！ お稽古をしないと駄目だよ。辨ちやんの御母さんが左様言つたよ、フランクフルトへ奉公に出すつて。フランクフルトではね、何んな子供でも皆御稽古をするんだよ。此處の學校よりもつと大きな學校があつて、大人でも行くんだつて久良子さんが左様言つた。先生が大勢居て列の様に並んでゐて、皆黒い服を着て、斯んな大きな帽子を被つてゐるんだつて、』と楓は床から手を掲げて帽子の大きさを示した。辨太は唯驚いて聞いて居る。『辨ちやんなんで、其處へ行つて先生に訊かれてさ、何んにも讀め無ければ皆に笑はれちまわ。お常さんにだつて笑はれら、随分見つともないなあ。』

『すんぢやあ、すらッ』と辨太は半ば怒り半ば泣聲になつて言つた。

『する！ 然んなら直ぐしやう』と楓は忽ち機嫌を直して、辨太を食卓の處へ推して行き、直ちに稽古に取り掛かった。

久良子の送つて呉れた包の中に楓が親しんでた本が入つて居た。實は之を辨太に讀ませやうと昨夜から考へてゐたので有つた。ABCの幼年讀本である。二人は食卓の上の讀本に眼を注いだ。辨太がすら／＼讀めるまでは楓が中々承知しない。

『未だ本可ないよ。宜いかい。』

ABCが讀めないと、黑板の前に立たされる』

『嫌だ』と辨太は怒つた。

『何が』

『立たたされるのは』

『だから覺おぼえ無なくつちや勿いけないんだよ。覺おぼえれば大丈夫だいぢやうぶだよ』

と楓かへてが慰なぐさめる。辨太べんたは我慢がまんしてABCエービーシーの三字じを暗誦あんしようした。

『もう宜いいや、此この三つは』辛やつと楓かへては満足まんぞくした。『さあ其その次つぎ』と大おほきな聲こゑで次つぎを讀よんだ。

DEFGディーエフヂーすらく、讀よめれば不幸ふかうが推おし寄よせる。

HIJKエッチアイヂイーケー忘わすれると、矢やつ張はり不幸ふかうが直すぐに來る。

LMエルエム支つかへりや罰ばつを受うけ、おまけに耻はぢなぢかぢされる。

未まだ未まだ怖こはい事ことがある。NOPQエヌオーピーキユー習ならひなさい。

RSアールエスTティー支つかへると、自業自得じごふじとくで御仕置おしおきだ。

辨太が餘り靜かにして居るので楓は讀むのを止めて辨太を見た。辨太は不幸が來るの罰を受けるのと有るので、すつかり怖けてしまつて身動きもせず居る。楓は氣の毒に思ひ、

『怖が無いよ。之から毎日來て今日の様に御稽古をすれば直きに覺えるから、御仕置をされないよ。學校の様に忘れ無いで、毎日來るんだよ、いゝかい？』

辨太は脅かされたので素直になり、堅く約束して歸つた。夫れ以來毎日來て一生懸命に暗誦した。爺は傍に居て煙草をふかし乍ら聞いてる事もあるが、折々口を歪めたり吹き出したりして居た。一生懸命に習つた後は晩食の馳走があるので、辨太も稽古の辛さを我慢して居た。

冬も何時しか終りとなつた。辨太は段々進歩して來た。それでも毎日の暗誦には閉口して居る。楓が、

UとVとを間違へば、嫌な處へ遣られます。

と讀むと、誰れかに引つ立つて行かれる様に思ふのか、いきみ出す様な聲をして讀んだ。次の日かへて楓が、

Wと云ふ字を忘れると、棒が有ります打たれます。

と讀むと、辨太はあたりを見廻はして腹立たしげに、

『無いぢやないか棒は』と言つた。

『此處には無いけど祖父さんが筆筒の中に納つてあるよ。辨ちゃんの手位太いのが。だから「こゝろに棒があるぞ」つて出されらあ』

辨太は爺の大きな棒の棒を見て知つて居るので、直ぐに本の土へのし掛かつてWを習ひ出した

つひ
次の日、

エツキスわす X 忘れる子供には晩の御飯を食べさすな。

と讀むと、辨太は麵乾や乾酪の入つてゐる戸棚をぢろぢろ見乍ら噛み付く様に、

エツキス 『X なんて忘れやしないよ』と言つた。

『忘れ無きや宜いんだよ。も一つやらう左様すりやあ明日一つでお終ひだから』

辨太はも一つ習ふ事は不賛成だつたが、楓は構はず讀み出した。

けふワイジ 今日Yの字を覚えぬと、叱られ、笑はれ、恥をかく。

辨太の眼前に楓の話したフランクフルトの學校の高帽子を被つた先生がすらりと並んで、冷笑するのが見えたので、早速習ひ出した。

つぎひ、辨太は鼻を高くして楓の處へやつて來た。もうあと一つ丈けしか無いからである。

ズイ
Zが讀めない人間はホツテントツトの國へ行け。

と楓が讀むと辨太は冷笑ひ、

『そんな國何處にあるんだい』と云つた。

『祖父さんは屹度知つてゐるよ。待つといで聞いて來ら。牧師さんとこへ行つてゐるから』と楓は戶外

へ馳け出した。

『止しなよッ』と辨太は大聲で叫んだ。何んだか爺と牧師とが來て、自分を捕へて其の國へ連れて行く様な氣がするので、大急ぎで止めたのである。

『何故さ』と楓は立ち止まつて不思議相に訊く。

『いゝよ。來なよ。な、ならへばいいいだる』と辨太は吃つた。楓は聞き度かつたが辨太が遮二無二引き止めるので止して戻つて來た。辨太は乙が中々覺えられ無いので生涯忘れられ無い程幾度も讀まされた。それが濟むと楓は直ぐに綴り方を教へ始めた。其の日辨太は随分多くの事を教へられた。

斯んな風に毎日を送つてたが、氷つた雪が柔くなり親規の雪が又降つた。楓はもう三週間も辨太の家へ行けないので、特に辨太が讚美歌を讀める様にと、一心になつて教へた。或る日、辨太は家に歸ると、

『なつたよ』と云つた。

『何にが。なつたの』と阿母が訊く。

『字が讀めるやうになつたよ』

『ほんとかい？ 御祖母さん！』

辨太が字が讀める様になりましたとさ』

祖母は不思議に思つて聞いて居た。

『楓ちゃんが左様言つたから讚美歌を讀まあ』と辨太が言ふので、阿母は本を下ろしてやつた。祖

母は暫らく聞かぬので喜んだ。

辨太は食卓に向つて讀み出した、一節毎に阿母は喫驚して、

『不思議だねえ』と言つた。

祖母は何にも言はず聞いて居た。

其翌日であつた。學校で讀方の時間に辨太の番が廻つて來た。

『辨太！ 常時の様に御前は抜かさうか。夫れとも試つて見るか。拾ひ讀みでも宜いが、何うだ
い？』と教師が尋ねた。

辨太は直ぐに讀んだ。すら／＼と三行讀んでのけた。教師は本を側へ置いて黙つて辨太の顔を見て
居た。未だ會て辨太が字を讀んだ試が無いのだから驚くも道理である。

『辨太！ 實に奇蹟だな。A B Cさへ覚え無いので仕方なしに諦らめて居たんだが、A B Cどころ
か立派に讀めるね。今の世に誰れが斯んな奇蹟を御前に施したんだろう』と教師は心から不思議が
つた。

『風ちゃん』と答へた。

教師は驚いて風の方を見たが、風は一向無心で座つて居た。

『夫れ斗りぢやない。前には休んで斗り居たのに近頃は一日も休ま無くなつたが誰れかが言つて聞かしたのかい。』

『爺』と辨太が答へた。

教師は益々驚いて、辨太と楓とを交々眺めて居た。

『今一度讀んで御覽ん!』と教師は確める様に言つたので辨太は同じ處を讀み更に次を三行讀み足した。もう讀み様を習つてあるので辨太に取つては何んでも無かつた。學校が済むと、教師は直ちに教師を訪れて、爺と楓が此の土地の者に良い感化を與へて居る次第を語つた。

夜になると、辨太は當時も讀美歌を讀んだ。但し同じもので、他のは讀まうとしない。題母も他のを讀めと言はなかつた。それに辨太は六ヶ敷い處は遠慮なく厭かして讀む。一行の中で二字や三

字は脱かしても差支へないと思つて居るらしい。従つて祖母には楓が讀む程明瞭に頭へ入らないのか、早く春になつて楓が來て呉ればよいと楽しみにして居た。

第六章 手紙で前觸れ

いよいよ五月が來た。高い所から平原の方へと幾筋も小川が流れ始め、暖かい日の光が山中を照らし出した。草は萌え、幾んの雪も早や解け去つて影も無い。日光に呼び醒まされた小さい草花が、綠草の間から頭を擡げ、柔かい春風が桜の樹を揺ると、古い葉が落ちて、新緑の若葉が得意げに梢を彩つた。空には高く雲が舞ひ、山小屋のあたりは金色の日光に暖められて、何處へでも座れる様に地面が軟いて來た。

楓は、もう山小屋に移つて居たので相變らず處撰ばず走せ廻はり、峯から吹き下ろす風が次第に勢を増して、縦の樹を訪れると、樹が喜ぶ様に枝を振る。其の下で楓は木の葉の様にあちこちへ吹き廻はされながら一緒になつて喜んで居た。左様かと思ふと、小屋の前の日當りの良い地面へ座つて、あたりに吹き出した草花を數へながら思ふ存分春の香りを吸ふ。山に住む幾千の小動物も春の到来を喜んで『山へ、山へ』と歡喜の歌を唱つて居るであらう。

小屋の後の仕事場から、折々槌の音、木を鋸く響が聞えて来る。之は、楓が山住居の始めから聞き馴れた親しい響である。音が耳に入ると、思ひ出した様に急いで其の方に馳けて行く。今しも楓が仕事場へ來て見ると、入口に見事な三脚が一つ出來上つて、今一つの方も將に出來上り掛かつて居た。

『私知つてるよ何んだか』と楓が叫んだ。『フランクフルトから皆が来た時のだろ。之れはおばあさんの、今度出来るのは久良子さんのだれ、祖父さん。夫れから……』と楓は一寸躊躇して『古井さんも来るかね』と尋ねた。

『夫りや祖父さんには解らないよ。だけど造つて置けば安心さ』と爺が答へた。

楓は頼りに三脚を検査しながら考へて居たが、

『古井さんは屹度斯んなのへ掛けないよ』と言つた。

『之れで良く無ければ草で作つた長椅子さ』と爺は平氣で言つた。

楓は其の長椅子が何處にあるかと考へてると、突然何處からか口笛と杖との音が聞えて來た。楓は夫れを良く知つて居るので、馳け出して行くと、山から下りて來る山羊の群に出遇つた。久し振

の山^{やま}上^{のぼ}りに、山^{やま}羊^{ゆくわい}も愉快^みだと見え、躍^{をど}りつ跳^はれつ鼻^{はな}を鳴^ならして楓^{かへてそは}の傍^よへ寄^くつて來^くる。辨^{べん}太^たは山^{やま}羊^を左右^{さいう}へ推^おし除^のけ、楓^{かへてそは}の傍^きへ來^きて一通^{つう}の手^{てがみ}紙^さを差^だし出^だし、

『之^これ！』と言^いつた。

『牧^{ぼく}場^{ぢやう}に手^{てがみ}紙^あが有^あつたの？』と楓^{かへておどろ}は驚^きいて訊^きいた。

『ううむ』

『そいぢや何^{どこ}處^こにあつたの？』

『辨^{べん}當^{たう}の下^{した}にあつたの』

確^{たし}かに其^その通^{とほ}りであつた。實^{じつ}は前^{ぜん}夜^や村^{むら}の郵^{いう}便^{びん}局^{きょく}から楓^{かへて}へ届^{とど}ける様^{やう}に頼^{たの}まれたので、辨^{べん}太^たは夫^それを辨^{べん}當^{たう}の袋^{ふくろ}へ入^いれ、翌^{よく}朝^{あさ}其^その上^{うへ}へ廻^{ばん}轉^{てん}を推^おし込^こんで山^{やま}へ上^{のぼ}つた。爺^{おやぢ}の山^{やま}羊^を集^{あつ}めに行^いつた時^{とき}に、

楓の姿を見たのだが、其儘にして、晝になつて辨當を食べて終ひ袋を倒にした時に、手紙が出て来たのだから『辨當の下に有つた』と答へたのである。

楓は注意して宛名を讀んだ。それから爺の仕事場へ馳けて行つて手紙を見せて御機嫌である。

『フランクフルトから！ 久良子さんから！ 讀むよ』

爺は向き直つた。辨太も楓の後から來て戸口に凭れ乍ら耳を傾けた。手紙の内容は、

旅行のしたくはすつかり出來ました。お父様のおしたくが出來しだい二三日たつと出か

けます。お父様はバリーにご用があるので先に其の方へおいでです。おいしやさまは毎日

來て『山へゆけ、山へゆけ』と言ひます。おいしやさまは、とても山をほめてます。楓ち

やんや、祖父さんや、山がしづかで美しいことなどを話します。そして、あすこへ行けば、

誰れでも丈夫になると言つてます。おいしやさまは山からかへつてから、丈夫になつてた
いそうわかくなりました。私も早く行つて楓ちゃんといつしよに山へのぼつて、辨ちゃん
やぎを見るのが、たのしみです。でもふもとで六週間ばかりりようぢをしるとおいしや
さまに言はれて居りますから、夫れから山の村へとまつて、天氣のよい日にはいすで楓
ちゃんのところへ行くつもりです。おばあさんもいつしよに行くんです。おばあさんは楓
ちゃんにあふのたのしみにしてゐます。古井さんは行きません。おばあさんが『スイスへ
りよこうしてはどうですか、ゆくならつれてゆきます』と言つても、おれいばかり言つて
行くと言ひません。私はそのわけを知つてゐます。いつか柴田が楓ちゃんを送つて歸つ
て來た時に、山のおそろしい事を話したからです。いわがあたまの上につき出て居るとか、

がけから答そこへころがりおちさうだとか、やぎにはのぼれるが人間がのぼるのはいのちがけだなぞと言つたので、古井さんはそれを聞いてからいやになつたのです。お常もこはがつていきません。柴田はふもとまでは行きます。早くいきたくてたまりません。さやうなら。おばあさんからよろしく。

久良子より

楓さまへ

辨太は聞き終ると大に憤慨して馳け出し、棒を無暗に振り廻はしたので山羊は非常に恐れて一齋に山を馳け下りた。辨太は尙も追ひ馳けながら、フランクフルトから来る客が憎らしいのか、棒を矢舞振り廻はしながら大層怒つて行つて終つた。

楓は嬉しくて溜らない。早く此の事を辨太の祖母に話し度い。祖母にはフランクフルトの人達
の事は話して有るのだから、是非告げなければならぬと思つた。翌日の午後、楓は一人で辨太の家
へ行つた。天氣は良し、日は永し、途も乾いてるので、春風に送られながら出掛けて行つた。
辨太の祖母は病氣も癒り、相變らず隅の處で糸を繰つて居た。昨夜から氣になつて居たが、辨太
が大に憤慨して歸つて來たので、大方フランクフルトから大勢客が來るので有らうと察しては
居るが、然し其の後如何なるかしらと考へると何うも氣になつてならないのであつた。ところへ楓
が入つて來ると、直ぐに老婆の傍の小さい臺の上へ常時の様に腰を掛け、熱心に事の次第を物語
つた。

『お婆さん何うしたの、嫌なの？』楓は不意に尋ねた。

『いゝえ、結構ですよ』と老婆は力めて左様言つた。

『だつて、嫁な様だもの、古井さんは来やしないのよ、お婆さん』

『いゝえ、善い善いの』と老婆は打ち消す様に、『矢つ張り楓ちゃんの爲めには善いだから』

『だつて御婆さん』楓は老婆が何やら心配らしいのを見て、『私の爲めなんか何うでもいいわ』と言

つた。老婆の心では楓も今では丈夫になつたし、事に依ると御客が歸りに連れて行くかも知れぬと

の氣遣ひが大に有る。然し夫れを言ふと邪魔をするやうになるから言はずに居るのである。

『楓ちゃん、あの、逆巻く浪路の歌を讀んで御呉れな』

楓は例の讚美歌の中から探し出して讀んだ。

逆巻く浪路もいと安し。神汝が爲めに備へ給ふ。

『それ、それ、夫れが聞き度かつたの』と老婆は大層喜んで今一度讀んで呉れと言ふので楓は三度繰り返して讀んだ。

其の中に夕方になつたので楓は自分の小屋へ歸つて行つた。見上げれば空には星が一つ二つ現れて恰も自分を見護つて呉れてる様燐燐光つて居る。

『神様は何んでも知つてゐるんだ。私達を幸にして下さるんだ。有難いな』と楓は叫んだ。

星は小屋に着く迄ピカピカ瞬き乍ら見送つて呉れた。小屋の前には爺が之亦空を仰いで星を眺めて居た。珍らしく良く晴れた晩であつた。夜斗りではない、晝でも近頃は珍らしく良く晴れて一點の雲も無い。

『珍らしい天氣の良い年だな。大將。確かりしないと山羊が丈夫になり過ぎて、あばれるぞ』と爺

が言ふと、辨太は棒を強く振つて見せ、

『山羊に負けるもんか』と言ふ様子をするのであつた。

青緑の五月も去つて六月となり、日は益々永く暖かになつて來たので、山中の花が咲き出し、到處に佳い香がして來た。六月も終らんとする或る朝、楓は片付を終つて小屋の周りを馳けて居たが、急に大變な聲をして叫んだので、爺は何事かと小屋から出て來た。

『祖父さん！ 祖父さん！』と楓は夢中になつて、『來て御覽よ。あら、あら』と叫んだ。

爺は楓の指さす方を見ると、珍らしい行列が上つて來る。眞先きに二人の人足が少女を乗せた山轎を擔ひ、次に一人の婦人が馬上で案内の若者と熱心に話しながら來る。其の後から一人の人足が車付きの椅子を空の儘推して來る。最後に一人の人足が包を山の様に背負つて隨いて來る。

『来た、来た』と楓は嬉しがつて躍り跳れた。確かに来たのである。一行は段々近づいて終に小屋へ着いた。人足が轎を下ろすと待ち構へた楓は走り行き、二人の少女は互に喜ばしい挨拶をした。次いでおばあさんが馬を下りる、楓は其處へ走つて行つて抱き付いた。おばあさんは迎へに出た山爺の前へ行き、双方とも兼ねて話を聞いて知つてゐるので、永年の知己の様に親しい挨拶を交はした。

『何んと云ふ良い場所です。想像以上です。王様だつて羨ましいでせう。楓さんも丈夫相になつてまあ』と楓の頬を撫でながら、

『如何だれ、久良子、良い處ぢや無いか。』

久良子は四邊の景色にみいられて終つて居た。何しろ斯んな場所は會つて見た事が無いので、

『良いわ、良いわ。私何時までも此處に居たいわ。ねお祖母さん』と言つてた。

其の間に、爺は車付きの椅子を推し出し、籠の中から肩掛けを取り出して之に懸け、

『お嬢さんは此方の椅子が良いでせう。轎では窮屈ですから』と言つて、久良子を出立から抱き上

げて丁寧に椅子に載せ、膝や足へ肩掛けを巻き付け、大層勞つて遣つたので祖母は感心して居た。

『まあ病人の世話が御上手ですこと』と祖母が言ふと、爺は微笑んで、『見様見真似で』と答へた

が、爺は昔し、シシリーの激戦に自分の隊長が負傷したのを自分一人で最後まで介抱した時の事

を思ひ出し、出来る丈けの世話を久良子にして遣り度い氣がして居た。

空は濃藍の様に晴れ渡り、高い峯は煙々として高く聳えて居る。久良子は、四邊の景色にただ見

惚れて居た。

『私、楓ちゃんと一緒に方々行けると良いんだけどね』と残念相に叫んだ。『あなたに聞いた處へ行つて見たいんだけど駄目ね。』

楓は全力を出して樅の樹の下の乾いた草地へ椅子を進めてやつた。久良子は斯んなに枝を擴げた樅の大木を見た事が無い。枝がこんもりと垂れ下がつて居る。祖母も後から來て感心して眺めて居た。有爲轉變の人生をよそに、幾百年を此の山上に送る此の老木には言ふ可からざる威嚴と偉大さが有つた。

楓は更に椅子を山羊の樅の前へ推し行つて中を見せた。尤も山羊は牧場へ行つて御留守であつた。『お祖母さん、山羊だの、辨ちゃんが下りて來ない中に私達が歸つて終へば見られやあしないわ』と口惜氣に久良子が言つた。

『此の景色を見た丈でも澤山ぢや無いか』と祖母は楓が推して行く椅子の後について歩きながら言つた。

『あら、花が』と久良子が叫んだ。『赤いのが充滿！ あら桔梗が。採り度いわ』

楓は直ぐに行つて一握り採つて來た。『斯んなの何んでもないのよ』と楓は花を久良子の膝へ載せ乍ら『牧場へ行けば夫りや良いのが有るわ。赤いのや、青いのや、黄色いのや、金色のや、夫れから茶色で小さな圓い頭の付いた良い香のものもあるわ。綺麗よ。そこへ座るともうどけ無いの。』
久良子は楓の話しにすつかり刺激されて終つた。

『祖母さん、私行き度いわ。駄目？ 楓ちゃんと一緒に上つて見度いわ私』と熱心に言ふ。
『私が推して行くわ』と楓は力を籠めて椅子を推すと、途が傾斜して居るので椅子が下の方へ下り

掛けたが、爺が傍に來て居たので直ぐに止めた。

皆が縦の樹の下に居る間に、爺は食卓や腰掛けを小屋の前へ引き出し總ての準備をしておいた。鐵瓶は沸き出す、乾酪は焼けて來た。間も無く一同食卓に向つた。

何しろ食事をしながら、青空に聳え立つ山の頂から麓の方まで見晴らせるし、涼しい微風が靜かに頬を撫で、縦の樹の梢をそそつて音楽を奏でるので、祖母はすつかり此の食堂が氣に入つた。

『斯んな氣分を味ふのは始めてです。實に雄大ですれ』と頷りに喜んでたが急に、『おや！』と驚いて『久良子！御前乾酪は二つ目ですれ』と尋ねた。實際久良子は黄金色に焼けた二つ目の乾酪を食べ掛けて居た。

『だつて旨しんですもの。私、家で食べるのより旨いわ』と旨相に味ひ乍ら久良子は答へた。

『さあ澤山召し上がれ』と山爺も喜んで、『料理方は下手でも場所が旨しくして呉れます』と言つた。

食事は愉快に進んだ。爺と祖母とは話が良く合つて段々會話が熱して來た。人世問題などに付いても永年の友達の様、二人の意見は能く一致した。やがて氣が付くと祖母は西の方を見て、『久良子や、もう下りませう。日が傾いて來たし、皆も迎へに來ませうから』と言つた。久良子は悲し相な顔をして、

『もう一時間位いいでせう。まだ小屋の中を見ないんですもの。楓ちゃん、の寢床も見たいわ。日をもつと永ければ良いのに』とすれる様に言つた。

『不可ませんよ、もう』と祖母は言つたが、内心小屋の中を見度くもあつた。そこで一同は食卓を

離れ、爺は椅子を戸口へ推して行つた。入口まで行くと椅子が大きいので入らない。爺は直ぐに久良子を太い腕に確かと抱へ上げて中へ入つた。

祖母は中の備へ付けをあちこちと眺め小綺麗にしてあるのに感心して居た。

「あすこですれ、楓ちゃんの寢室は」と言ひ乍ら祖母は平氣で梯子を上つて乾草の寢床を見た。

「まあ香りの良い事。斯ういふ處へ寢てゐれば丈夫になる譯ですれ」と言ひ乍ら小窓から外を眺めた。爺は久良子を抱いて上つた。楓も後から隨いて上つた。一同寢床の周圍に立つた。祖母は頷り

に草の香りを嗅ぎながら感心して居る。久良子はすつかり此の寢室が御氣に入つて了つた。

『良いわれ楓ちゃん！　こんな良い處へ寢られて。寢ながら空が見られるし、樅の樹の音も聞こえ

るし、始めて見たわこんな良い寢室は』

爺は祖母の方を見て

『如何でせうな。御差支へが無ければ、お嬢さんを當分此處で御養生をおさせなすつては。肩掛も

澤山お持ちなすつたし、良い寢床が出来ますが。それに此處に居れば御心配はちつとも有りません。

如何ですな』と尋ねた。久良子と楓とは、それを聞くと待つて居た様子に聲を上げて喜んだ。祖母の

顔も活氣付いた。

『まあ、何んといふ御親切な事でせう。願つたり叶つたりといふのは此の事でせう。實は當分斯う

いふ處へ置いたら嘸丈夫になるだらうと考へて居たんですが、あなたには一通りの御迷惑では有り

ませんから控へて居ました。さう願へれば眞個に有難いのです』と祖母は爺の手を幾度も振つて感

謝の意を表はした。爺も早速の賛成に大層満足した。

そこで爺は直ぐ其の準備に取り掛つたり、先づ久良子を小屋の前の椅子へ安置した。楓はもう有頂天になつて喜んで居る。

『祖母さんが籠城の用意を充分にして來て下すつたから大變好都合です』と爺は肩掛や毛皮を兩手に積み上げて笑ひながら言ふと、

『私に先見の明が有つたんでせう』と祖母も笑ひながら答へ、二人は二階へ上つて草の上へ肩掛を敷き寢床を作つた。材料が豊富だから御城の様な立派な寢床が出来上つた。祖母は梯子を下りて戸外へ出ると、子供は互に寄り添ふて顔りに相談をして居る。一體久良子を何時迄此處に滞在さすべきか、折柄出て來た爺に相談すると、まづ四週間も居つたら氣候の適不適が明瞭にならうと云つた。子供達は夫れを聞いて大層喜んでた。

人足や案内者が迎へに來たが、人足は用無しになつたので、歸して了つた。祖母が馬に乘らうとすると、

『祖母さん！　ちきに又來るでせう？　だから左様ならを言はずに置くわ！　ね、楓ちゃん』と久良子が元氣よく言つた。楓は此の日は色々の嬉しい事が重なつたので、唯躍り跳ねるのみで何も言へなかつた。

總て祖母は馬上の人となると、爺は手綱を取つて山を下りた。祖母は頻りに辭退したが、山途は危険だから村迄送ると言つて従いて行つた。祖母は自分丈けなら態々淋しい山の村に滞在する必要は無いから麓の町へ泊つて、そこから折々山を訪れる事とした。

爺が歸らぬ内に、辨太が山羊を連れて山から下りて來た。山羊は楓を見ると忽ち推し合ひ、へし

合ひ、我勝ちに近づかうとする。楓は一々久良子に名を知らせたので、久良子は兼ねてから見たか
 つた矮だのデスだの爺の家の二正だのと近付きになつた。辨太は其の間傍に立つてデロ／＼久良
 子を睨めて居た。やがて二人が『辨ちやん、今晚は』と言つて、辨太を呼び掛けたが、辨太は返事
 もせず棒を振り上げて憤慨の様を示して、其の儘逃げて行つた。勿論山羊は皆後からついて行つた。
 久良子の山上の一日は斯くして終り、草の寢床に入つた。楓も同じく床に入ると、久良子は周
 圍の窓から煌々する星影を眺め、

『楓ちやん！ まるで御星様の世界に寝て居る様ね』と言つた。

『えゝ左様よ。久良子さん御星様は何うして下の方を見て眼をパチパチさせてるのか知つてる？』
 と楓が尋ねた。

『私知らないわ、あなたは？』久良子が問ひ返した。

『あのね、御星様はね。神様が私達を護つて下さるでしよ、それだから喜んで眼をバチバチさせてるの。だから私達も忘れないで神様に御禮を言はなければ勿けないのよ』と言つた。そしてふたりとこゝろへすわ、ゆふべいのり、二人は床の上に座つて夕の祈をした。やがて楓は横になると忽ち寝て了つた。久良子は星を見ながら寝るなぞといふ事は、生れで始めてだから仲々寝付かれない。夜戸外へ出た事のない久良子は星と云ふものを殆んど見た事が無いといつても宜いのだから、一寸眼を閉ぢても、又開いて星を見る。暫らくは開いたり閉ぢたりして居たが到頭睡くなつて寝て了つた。

第七章 賑やかな山小屋

太陽は今將に山背より登らんとして小屋の家根や麓の方に金色の光を送りつゝあつた。山爺はいつもの様に餘念もなく此の光景を眺めて居た。高根や平地に布かれた薄霧が次第に消えて、全山の光景が朝日に目覺めて行くやうに眺めてゐた。霧は次第に透明になつて燦爛たる太陽が姿を現はすと、巖も森も山の頂も悉く黄金の光に浸された。爺は小屋に歸つて、そうつと梯子を登つて見ると、久良子は今しがた眼を覺まして、日光が圓窓から寢床のあたりに射し込んでゐるのを驚異の眼を以て唯茫然と眺めて居た。

『良く寢られましたかね』と爺は優しい調子で尋ねた。

久良子は一度も眼を醒まさなかつたと答へたので爺は喜んで直ぐ様久良子の身の周りの世話を甲斐々々しくしてやつた。俄も眼を覺まして、爺が久良子の身仕度をして兩手に抱いて下りて行くの

を見て驚いて居たが、自分も後れてはならぬと、瞬く間に衣服を着け梯子を下りた。爺は昨夜二人が寝てから、何とかして車付きの椅子を屋内へ入れ様と考へた結果、裏の仕事場との間の大きな羽目板を二枚外して椅子の入る丈け出入口を作つて置いた。楓が出て來て見ると爺は久良子を椅子に乗せ、日當りの良い處へ推し出して、自分は山羊の方へ行つたので、楓は久良子の傍へ走り寄つた。涼しい朝の軟風が二人の面を撫で、其の度に氣持ちの良い樅の若葉の香りがする。久良子は夫れを心ゆく斗り呼吸すると、何んだか體が丈夫になつて行く様な氣がした。青空の下で斯んな新鮮な朝の空氣を呼吸した事なぞ、決して無かつたのだから、實に蘇返つた様な心持ちがした。日光は輝いてゐても山の上では決して暑くない。

『楓ちゃん、私、何時までも此處に居たいわ』とあちこちを向き乍ら久良子が言つた。

『だから私が云つたのよ。此處こゝみたいの良い處ところは世界中せかいぢうにないつて』と楓かへでも喜んで言つた。

折柄せりから、爺おやぢは二つの井どんぶりに泡立あはだつた雪ゆきの様な乳やうを排ちしほつて來て、一つを久良子くらこに、一つを楓かへでに渡した。

『之これは白しろのだから利ききますよ。さ、ぐつと吞のんで』と爺おやぢが久良子くらこに言つた。山羊やぎの乳ちひは久良子くらこに取

つて、始はじめてで有あつたから一寸香ちよつとを嗅かいで居たが、楓かへでが旨相うまさうに息いきも吐つかずに吞のみ干はしたので、一

口二口くちの飲みんで見ると、まるで砂糖さとうと肉桂にくけいとが交まぜて有ある様やうな味あじで、とても美味おいしい。

到頭たうとう皆みんな飲のんで終しまつた。

『あすの朝あさは二杯はいの吞のむんですよ』と楓かへでは久良子くらこが飲のみ干はしたのを見みて非常ひじやうに満足まんぞくして言つた。

其その中に辨太べんたが山羊やぎを連つれて上のぼつて來た。楓かへでは山羊やぎの間あひだに入はいつて、一つ一つ撫なでゝ居ゐる。山羊やぎは

楓かへでを見みると鼻はなを鳴ならして甘あまへるので中々なかやかましい。爺おやぢは辨太べんたを傍そばへ呼よび、

「今日からな、白の行き度い處へ行かしてくれ。良い草のある處はちやんと知つてゐるから、常時より上へ行き度がつたら行かしてやつて呉れ、構はないから。良いか。なんでも良い草を食はして良い乳を搾るんだから。何んだつて然んな怖い顔をしてあつちを見るんだ。さ行きな、今言つた事を良いか」と辨太に言ひ聞かした。

辨太は爺の命令は堅く遵奉するので直ぐ出かけたが、何んだか邪魔物が居るかの様に、振り向いて眼をぎよろ／＼させて居た。山羊は辨太の後を追ひながら楓を推して行くので、楓は少し計り一緒に行つた。辨太は夫れを見て大層喜んだ。

『一緒に来なよ。今日は白の後へくつ付いて行くんだからお前も來なつてば!』と脅かす様に辨太が言つた。

『駄目、久良子さんが居る間は行かない。だけれどね、何時か皆で上へ行くつて祖父さんが言つたよ』
 楓は左様言つて山羊と離れて戻つて來た。辨太は久良子の方に向かつて兩の拳を猛烈に振り廻はしたので山羊が怖れて片側へ寄つて終つた。辨太は自分の素振りを爺に見られまいと、としどし馳けて行つた。

久良子と楓とは種々の計畫があつたが、先づ第一におばあさんに手紙を書かうと楓が言つた。之れば祖母が歸る時に安心の爲め毎日手紙を送る様にと約束して置いたからである。

『それぢやあ小屋の中へ入るの？』久良子は手紙を書くのは大賛成だが、家の中へ入るのは惜い様な氣がしたので尋ねた。楓は其の意を察し、直ちに小屋へ行つて學校道具と三脚とを持って來た。手紙を書く臺に、讀本と習字帖とを久良子の膝の上へ載せ、自分は三脚へ腰を掛けて、さて二人と

も頼りに何か書き始めた。此の日四邊の景色は殊に美しかった。微風は段々暖くなつて相變らず、
の樹を揺つて居る。虫が長閑な音を立て、空中を飛び廻るのと、折々下の方から羊飼ふ子供等の叫
び聲が軽く反響して傳はつてくるとの他は、森閑として、高い峰も低い平野も唯雄大靜寂の中
に包まれて居た。

晝になつた。晝食は前日の通り小屋の外で楽しく済ませた。食事が済むと、兼ての相談通り楓は
久良子の椅子を櫟の樹の下に推して行つた。此處で楓がフランクフルトを去つて以來の積る話に
午後を送らうといふ計畫である。二人は老樹の蔭に座し夢中になつて話し合ふた。二人が樂し相
に物語つてゐる様を見て、梢の鳥も羨ましいのか負けずに聲高く囀つて居た。何時の間にか夕方にな
ると、山羊の一行が下りて來た。辨太は肩に八の字を寄せ、ぶりぶりして後から付いて來る。

『辨ちやん！』辨太が行き過ぎ相なので楓が聲をかけた。

『辨ちやん今晚は』と久良子も元氣よく呼び掛けた。

然し辨太はぶりぶりし乍ら山羊を追ひ立てて行つて終つた。爺は山羊が來ると、早速白の乳を搾り出した。久良子ば夫れを見ると急に乳が飲み度くて溜らぬので自分ながら不思議であつた。

『不思議だわ、楓ちやん。私ね、今まで何か食べるの眞個に嫌だつたの。仕方無しに食べてたの。食へずに居られたら何んなに良いだらうと思つてたの。夫れがね、今日は早くお乳が飲み度くつて仕様がないのよ。』

『私知つててよ』と楓が如何にも同情する様に言つた。フランクフルトに居た時に楓は食物が喉へ通らなかつた事を思ひ出して、フランクフルトに居れば皆左様なるんだと思つてゐる。日光

浴と山上の新鮮な空氣との爲めだとは久良子も知らなかつた。

爺が井を持つて来ると久良子は待ち兼ねた様に受取つて、楓が飲み終らぬ内に飲んで終つた。

『もう少し下さい』と久良子は井を差し出した。爺は大層喜んで楓の井と一緒に小屋へ持つて行つたが、今度は井の上へ何か載せて出て来た。爺は晝間、鳥を飼つてゐる家へ行き、新鮮な牛

酪を買つて来てあつたので夫れを麵麴の切れへ延ばして子供達の晩食に與へたのである。二人が

旨相に食べるのを爺も喜んで眺めて居た。

寢床に入ると久良子は昨夜の様に煌々する星を眺めて居たが、楓が寢付くと久良子も直ぐに睡つ

て終つた。次の日も其の次の日も同様に楽しく送つたが其の翌日には二人を喫驚させる事があつ

た。二人の屈強な人夫が名々大きな、新らしい、立派な薪ひの寢臺を附屬品と共に運んで来た事

である。祖母そぼからの手紙てがみが付ついて居ゐて、之これは久良子くらこと楓かへでとに贈おくるから草製くさせいのと取り換かへる様やうに、尤もつとも冬ふゆになつたら久良子くらこのは來年らいねん來る迄まで收しまつて置おいて呉くれる様やうにとの事ことが書かいてあつた。尙なほ附つけ加くはへて、二人ふたりからの手紙てがみを喜よろこんで見みた、續つづいて毎日まいにち書かき送おくる様やうに、萬事ばんじの様やう子が知しれて大層たいそう安心あんしんするとの事ことであつた。

爺おやぢは早速さつそく二階にかいへ上あつて敷物しきものと草くさとを取り除とけ、人足にんそくに手てを貸かして寢臺ねだいを上げ、子供達こどもたちが寢ねながら窓まどの見える様やうに並ならべて置おいた。

祖母そぼは麓ふもとの町まちに滞たい在ざいして、二人ふたりから毎日まいにち來る手紙てがみを見みて非常ひじやうに喜よろこんで居ゐた。久良子くらこは益々ますます山上さんじやうの生活せいくわが氣きに入いつて、充分じゅうぶんに言いひ表あらはせなかつたが爺おやぢの親切しんせつな看護かんご、楓かへでの快活くわいくわつな態度たいど、そして朝あさ眼めが覺さめると、

『有難い、未だ山に居たんだ』と思ふ事などを手紙で祖母に知らせるので、祖母も山道を馬で登るのは骨が折れるし、第一安心なので暫らく山小屋へは行かずに居た。

久良子が日一日と健康になつて行くので、爺も甲斐があると大層興味を以て世話をした。爺は毎日午後になると岩山へ上つて香りの良い草を一束づつ持つて来て白に染へる、白は益々元氣よく澤山の良乳を供給した。

久良子が此處へ來てから二週間経つた。近頃は朝戶外へ椅子を推し出す度に、『一寸でも良いから地面へ立つて見ませんか』と爺が言ふのである。久良子はやつて見るが忽ち『おゝ痛い』と言つて踵り付いて終ふ。それでも少しづつ立つてゐる間が長くなつて來た。

近頃の様な好天氣は山でも珍らしい。空には一點の雲も無く、花は皆花瓣を一杯に擴げて四邊へ

香かほりを放はなつてゐる。夕方ゆふがたには山やまの頂いただきや雪ゆきの原はらが紫むらさき、菖薇色あいらろ、それから段々だんぜん黄金色がねいろに變かはつて行く。楓かへでは何時いつも久良子くらこに、夕方ゆふがたの景色けしきは何どうしても牧場ぼくぢやうへ行いかなければ眞個ほんともに見みられない。あすこの坂さかとこゝろいいどこどこの處ところへ行いけば何處どこもかも花はなを敷しき詰つめた様やうだなぞと、夢中むちゆうになつて説明せつめいするのであつた。或る日あるひ楓かへでの樹きの下したで、楓かへでが例れいの通り山やま上うへの光景さんじやうを話わして居ゐたが、行き度ゆたくて溜たまらなくなり、爺おやぢの仕事場しごとばへ馳かけていつて、

「祖父おぢいさん！」と遠くとほの方ほうから聲こゑを掛かけ、『明日山あしたやまへ登のぼらうよ、今いまが綺麗きれいなんだからさあ！』とねだつた。

『よし、よし』と爺おやぢは受うけ合あふ様やうに「其その代かり、夕方ゆふがたになつたら御義様おぢやうさまが又また一生しやうけん懸命めいたに立たつ積けい古こをするんだよ』と言いつた。

楓は嬉しがつて叫びながら久良子の許へ来て、其の旨を告げた。久良子も明日山へ連れて行つて呉れるといふので、一生懸命に稽古をしようと云つた。喜んで有頂天の楓は、夕方辨太の姿を見るとき、

「辨ちゃん！ 辨ちゃん！ 明日一緒に行くよ。晩迄上に居るよ」と聲を掛けた。辨太は返事をせず、熊の様に唸つて傍に居たデスを打ち据え様としたが、デスもさるもの、素早く矮を飛び越えて逃げたので棒は空を打つた。

久良子と楓とは、其の夜非常な期待を持つて寢床に入つた。翌日の山登りに就いて寢ながら種々話をする積りで居たが、枕につくと二人とも忽ち話が途切れて後は夢の幕になつて終つた。

第八章 之は不思議

よくあるはや 翁は小屋の外に出て天氣具合を見た。山の頂は赤味を帯びた金色で彩られ、涼しい風が樅の小枝を動かしてゐる。太陽は今將に上らんとするところである。見る見る高峯も丘も金色となり低地が菖薇色の海と變ると、やがて何處にも此處にも黄金の光が閃き渡つた。太陽が地平線を離れたのである。

翁は山登りの用意にと椅子を表へ推し出して子供達を起しに入つた。丁度其の時辨太が下から上つて來た。山羊も近頃は以前の様に辨太の前後を取り巻いて來ない。辨太が矢鱈に打ち叩くので怖けて離れゝになつて寄り付が無いのである。辨太は怒り切つて居る。

朝寄れば何時も見馴れぬ子供が椅子に載つて楓を占領して居る。夕方寄れば矢張り車付きの椅子
めが縦の樹の下に居て、楓が其の傍に斗り付いてゐる。夏になつてから殆んど楓は牧場へ來ない。
今日は行くと昨日言つたが辨太の心では、どうせ車付きの椅子が一緒に行くのであらうから、楓は
矢つ張り其の方へ占領されるに極つてゐる。と思ふと癪に障つて溜らない。見れば憎い椅子が小屋
の傍に高慢相な様子をして出て居る。幸ひ四邊に誰も居らぬので、むら／＼とすると辨太は突と走
せ寄つて、椅子に手を掛け、推し出して腹立ちまぎれに下り坂の處で突つ放した。椅子は轟々廻
轉して行つたが忽ち見えなくなつて終つた。辨太は葦太天の様に山へ馳け登り、とある大きな桑の
茂みの蔭に隠れたが、椅子が何うなつたか見度くもあり、幸ひそこは小高いので、そつと下の方を
覗いて見た。こはいかに、椅子は益々速力を早めて下へ突進したものと見え、幾度か轉覆し幾

度が空中へ躍り上つたり、突つかつたりしたのであらう、結局滅茶滅茶に壞れて終つて居た。脚
 ふとん、まはり、みんな
 蒲團、周圍、皆ばらばらになつて四邊に散らばつて居る。辨太は實に痛快を感じて飛び上つて喜ん
 だ。大聲で笑つた。足をばた付かせたり、グルグル廻つたり、躍り跳ねて喜んだ。憎い敵を打ち倒
 して終つた様な感じがして嬉しくてならなかつた。椅子が無くては何うする事も出来まい、氣に喰は
 れ彼の奴も家へ歸らずばなるまい。さうすれば楓が又牧場へ一緒に来るであらう。萬事元の如く
 で何んたる好都合だらうと思つて居た。悪い事をすれば何んな結果を生むか然んな事は考へて居な
 かつた。

楓は支度をして一足先きに仕事場へ行つた。仕事場は入口が廣くなつたので中が明るく隅々まで
 良く見えた。楓はそこを見過して居たが不思議相な顔付きをして戻つて來た。處へ丁度爺が

久良子を抱いて出て来た。

『何うした？ 椅子を何處へ持つて行つた？』と爺が尋ねた。

『私も捜してゐるんだけど無いよ。祖父さん、仕事場の處へ出て居るつて言つたね』と楓はあちこちを見ながら言つた。折柄強い風が吹いて来て戸に酷く當つた。

『吹き飛ばされたのかね』と楓は眼を見張つた。『下の方へ飛んで行つちまへば取りに行つても間に合はないね。』

『下へ落ちれば粉々になつて終ふが』と爺は下を眺めて、『然し不思議な事があるもんだな。』若し下へ轉つて行つたとしても、第一小屋をぐるりと廻つて行かなければならぬ譯だから爺も不思議がつた。

『困つたわね！ 椅子が無くなれば家へ歸らなくつちならやないわ。何うしませう、困つたわ、困つたわ』と久良子が泣聲を出した。

『大丈夫だわよ。ね祖父さん！ 歸らなくつたつて大丈夫よ、ね』と楓が言ふと、

『まあ、兎に角牧場へ行く事にして後で調べて見やう』と爺は小屋へ入つて、敷物を澤山持つて来て其の上へ久良子を座らせ、夫れから乳を二人に吞ませ、白と赤とを檻の外へ出した。

『今朝は来るのが遅いなあ』と爺は辨太の口笛が未だ聞えぬので獨言を言ひ乍ら片手に久良子を抱き、片手に敷物をかゝえて出掛けた。

『さ出發だよ。山羊はついて来るだらう。』

楓は大喜びで二疋の山羊をかまひながら後から行くと、山羊も喜んで楓を間に挟み山を上つた。

牧場へ着くと、山羊は彼方此方に群まつて吞氣相に立つて居る。其の中心の處に辨太は長々と寢て居た。

『おい怠け者！ 何故寄らずに來たんだ。え？』と爺が呼び掛けた。辨太は聞き馴れた聲に飛び起きた。

『だつて、皆寢て居たもの』と答へた。

『途中に椅子が無かつたか？』

『何が？』と辨太は空惚けた。

爺は其の上は訊き質さず、日當りの良い處へ敷物を擴げ、其の上へ久良子を下ろした。

『樂よ！ 椅子が無かつたつても同じだわ』と禮を言ひ乍ら、『良い處ね此處は。楓ちゃん随分良い

われ』と四邊を見廻し乍ら言つた。

爺は、晝になつたら用意の辨當を出す事、乳が呑み度ければ辨太に搾つて貰ふ事、但し白の乳に限る事、尙ほ夕方迎へに来るが兎に角之から椅子が何うなつたか捜しに行くからと、種々楓に言ひ聞かせて下りて行つた。

空は晴れて一點の雲もなく、彼方の雪の高原は煌々反射して千萬の黄金、白銀を敷き詰めた様。こゝかしこに聳え立つ灰色の高峯は嚴として動かぬ姿を示して居る。鳶は高く舞ひ峯々を吹きやう。下ろす山風は涼しく肌に觸れる。折々山羊が傍近くへ来る。矮なぞは度々訪れて楓に頭を擦り付ける。山羊は久良子にも馴れて來た。暫らくすると楓は、例の花の澤山ある處へ行つて見度くなつた。夕方祖父さんが來れば久良子と一緒にに行けるけれども、夫れまでには花がつぼんで終ふだらう。

と思ふと、どうも夕方までは待つて無い。

『久良子さん！

怒らない？

私、大急ぎで

行つて来るけど。

花が何んなだか見て来たくつつて仕

様が無いから。ね待つて……』

と言ひ掛けたが急に思ひ付いて、草を一束むしり取つて矮を呼び

寄せ、『矮が居れば淋しいわね』と言つた。矮は其の心を知つてか、久良子の傍へゴロリと横に

なつた。楓は久良子の膝へ草を載せてやると、久良子も承知して矮と待つて居ると言つた。

楓が馳けて行つて終ふと、久良子は草を一本一本矮にやる。矮は夫れて受けては喰べて居た。實

際矮に取つては他の山羊と一緒に居れば兎角いぢめられるから、此處に居た方が平和なのであつた。

久良子も、斯んな山の上で小山羊を相手に暫し獨りで横になつてゐるのは、矢つ張り愉快でもあつた。

自分が受ける斗りで無く、よく弱い者を勞つてやる事の愉快さを泌々感じて、

『御前と二人で何時までも此處に居たいよ』なぞと矮の頸を抱へて言つたりして居た。

其の間に、楓は、一面花で包まれた例の場所へ行つて種々の色、香に酔つて居たが急に馳け戻つて來た。

『久良子さん！ いらつしやいよ、』と遠くの方から聲を掛けた。

『夕方になれば萎んちまうから。私連れてくわ。連れて行けてよ。』

久良子は楓の興奮した顔を見て頭を振り、

『駄目よ。とても駄目よ。あなたは私より小さいんですもの、私歩けるといふんだけど……』

楓は何んとかなら無いかと四邊を見廻すと、矢つ張り元の處に横になつて居る辨太が眼に止まつ

た。辨太は椅子さへ壊せば歸つて終ふと思つた久良子が直ぐ傍へ來て居るので、計畫が互餅に歸

した様な氣がして茫然として居たのであつた。

『辨ちやん御出でよ』と楓が叫んだ。

『嫌だ』と辨太は答へた。

『來とくれよ。私獨りぢや駄目だから手傳つて御呉れよ。早く來てさ』と云ひながら楓は辨太の方へ馳けて來た。

『私の言ふ事聞か無いなら良いよ。覺えておゐで』と辨太を脅した。辨太は何んだかギクリとした。誰れも知らぬと思ふ事を楓が知つてゐる様な氣がした。そして夫れを爺に告げられたら大變だといふ様な心持ちもしたので、起き上つて楓の傍へやつて來た。

『來たから良いだろ』と降参した様な言ひ方をして、楓が言ふ通り久良子の片手を持つた。楓は他

の腕を抱へて久良子を引き起した。起すことは起したが、楓が小さいので久良子は立つて居られない。

『私の頸へつかまつて！ 辨ちやんにぶら下つて！』

辨太は他人の手を引いた事なぞ無いから唯棒の様に自分の腕を突つ張つてゐるだけだ。

『駄目よ辨ちやん。手を輪の様にして、久良子さんがつかまるんだから。離しちや不可ないよ……』

辨太は其の通りしたが、餘り旨く行かなかつた。久良子は可なり重いし、楓と辨太とは割に姿が小さいから良い案配に吊合がとれない。久良子は足に力を入れて見るが前へ出ない。

『足を踏む様にするのよ』と楓が教へる。

『左様？』と久良子はビクビクしながら言はれた通り片足を踏み次に又片足を踏み付けた。夫れか

ら又丁寧に片足を上げて下ろした。

『之なら痛く無いわ』と久良子は喜んで言つた。

『もう一遍！』楓は熱心に言ふので久良子は又繰り返し、又繰り返した。

『出来るわ、そられ、出来るわ、出来るわ』と久良子が叫んだ。

『歩けたわよ、久良子さん歩けたわよ。祖母さん居ると良いわね。歩けた！歩けた！』と楓は凱

歌を舉げた。二人に凭れてそろりそろりとやつて居る内に段々確に踏めて來た。楓は大變な喜びだ。

『もう毎日來られるわ。どこへでも行けるわ。椅子なんてもう要らないや。嬉しい』と楓が叫ぶ。

久良子も體が丈夫になつて他人の様に歩ければ、之れ程の喜びは無い。終日椅子の中に籠城して居

たくは無いのである。花の場所は遠く無かつたので、やがて其處に着いた。で一同花に取り圍まれ

て座つた。地上へ直かに座るなぞとは、久良子には始めての経験であつたので、其の喜びは譬ふる

に物が無い。周圍は悉く花で其の色、其の香、實に美事であつた。

楓は久良子の傍に座したが嬉しさを包み切れず、興奮して叫び續けて居た。此處へ來た事の嬉しさ斗りではない。いや、夫れよりも久良子が歩ける様になつた事は更に嬉しかつた。久良子も景色の美しさや新らしい經驗をした嬉しさで無言の儘であつた。辨太も花の間に横になつて無言。寢て居るやうであつた。風は軟かく草叢の間をそそり廻る。楓は時々立ち上つては、あちこちを飛び廻る。花から花を尋ねては其處へ座る。

正午を過ぎた。山羊は一同の後を追ふて、のそりのそりやつて來た。眞先には全權大使といふ格でデスが居る。一同に晝食の時間を知らせに來たかの様であつた。三人の姿を見て、デスが聲高く嘶くと他の山羊も之に和して聲を挙げたので、辨太は眼を醒ました。辨太は車付きの椅子が元の儘

で嚴然と小屋の前に置いてある夢を見て居たのであつた。眼が醒めると、知れやあしないかと又心配になるので、大層柔順なく楓の言ふ事を聞いた。やがて三人は又元の牧場へ戻つて來た。楓は爺に言はれた通り辨當を出して全體を三分すると、大きな山が三つ出來た。私達のが残つたら辨ちやんに遣ら』と獨語しながら二人に與へ、各々空腹を充たした。二人の食べ残しを集めると一人前以上あつたが、辨太はそれをも引き受けて碎片一つ残さず食べて終つた。然し常時の様に嬉しがらない。心中に何んだか蟠りがある。食物を口へ入れる度に押し付けられる様な氣がして居た。晝食が餘り遅かつたので、濟むと間もなく爺が登つて來た。楓は走り迎へて先づ留守中の報告をした。久良子の件は餘り興奮して云ふので言語が前後したが、爺には其の意味が良く解つて非常に喜んだ。

『良く出来ました』と微笑しながら左手で久良子を抱へ、右手で手を支へると、前よりずつと樂に歩けた。楓は聲を擧げて喜び躍り廻つた。爺も如何にも嬉しい様子であつた。

『もう歸りませう遅いから』と久良子は可成勞れてるのを見て爺は直ちに歸途へついた。

辨太が山羊を引き連れて夕方村へ來ると、村の人が群がつて何か取り圍んで立つて居る。辨太は群集を押し分けて近づいて見ると、草の上にバラバラに壊れた車付きの椅子が懺贖たる姿になつて横たはつて居た。

『落ちて來るのを見たよ』と辨太の隣に居た麵麴屋が言つた。

『五百フランはするね、安く見て。一體何うして落ちたらう。』

『風だつて、爺が言つたよ』と一人が言ふ。

『風なら仕方が無いが、若し誰れかと落としたのなら、それこそ損害賠償だ、おゝ恐い恐い、俺なんざ二年も山へ登らないから疑はれる氣遣ひ無いから良いけど』と又麴麴屋が言つた。

各自に種々な評をするのを辨太は残らず聞いて居たが、そつと群衆の間を出て一目散に山へ馳け登つた。麴麴屋の言葉に甚く驚かされて終つた。何んだか今にも巡査がやつて來て自分の所爲だとわかつて連れて行かれやしないかと全身が棘々した。萎れ返つて小屋へ歸り、口も利かず、食事も喉を通らない。直ぐ寢床に潜り込んで唸つて居た。

『辨太は又酸模でも食べて當つたのでせうよ』と阿母が言つた。

『之れから、もう少し麴麴を入れて御遣り、明日は私の分を一片餘計に持たして呉つてお呉れ』と祖母は同情する様に言つた。

.....
かへてそよねどこはいはしなが
楓は其の夜寢床に入つて星を眺めながら言つた。

『私達あたしたちがね、一生懸命しやうけんめいに御願おねがひしても聞きいて下くださらなかつた譯わけが解わかつたでせう。神様かみさまは、もつと
良いい事ことを知しつて居ゐるからよ。ね』

『何なんだつて、そんな事ことを今いま云いふの？』と久良子くらこが尋たづねた。

『私あたしね、フランクフルトに居ゐた時ときにね、直すぐ家うちへ歸かへらして下くださいつて一生懸命しやうけんめいに御願おねがひしたけど
駄目だめだつたから、神様かみさまなんて私あたしの御願おねがひは聞きいて下くださらないんだと思おもつたの。だけど若もし私あたしがフラ
ンクフルトへ行ゆかなければ、あなたが此この山やまへ來こないでせう。さうすれば歩あるける様やうになれなかつたわ。』

『そんなられ』と久良子は考へながら『私達が御願ひなんかしたつて役に立たないわ』と言つた。

『あんた左様思ふ?』と楓は熱心になつて、『夫れは違ふわよ。私達は毎日何んでも御願ひしなくちや不可ないの、若し私達が神様にお願ひするのを止せば、神様も助けて下さらないから、御願ひが聞かれ無くても止めないで願はなくちや不可ないつて。』

『誰れが左様言つて?』と久良子が訊く。

『あんたの祖母さんが言つたわ。その通りよ。だから今夜はね』

と楓は起き上がり、『あなたが歩ける様になつた御禮を言ひませうよ』

ふたりいかり二人は祈をした。久良子に恵を與へ給ふた事を感謝した。

翌朝、爺は祖母の處へ二人から手紙を出させ、久良子の事を知らせる積りであつたが、二人には

又別の考へがあつた。久良子がもつと歩ける様に稽古して置いて、祖母が來た時に見せて驚かせやうと云ふ。爺もそれに賛成して、一週間の後に是非とも祖母を呼ぶ事にし夫れ迄は何も言はずに置く事に極めた。

『癒つた癒つた。もう椅子は要らない。皆の様に歩けるんだ』と毎朝眼が覺めると久良子は獨語するのであつた。起き出ると歩く稽古をする。日一日と歩くのが上手になつた。運動が付けば従つて食慾も進んで來る。麵麩でも何でも充分に食べるし、乳もなみなみと注いだのを幾度も御代りをする様になつたので爺も大層喜んだ。

やがて週の終り即ち祖母が山へ來る目が來た。

第九章 又遇ふ日まで

祖母は出掛ける前日其の旨を認め、手紙を出したので、辨太が翌朝牧場へ行く時に爺の處へ届ける事になつて居た。爺は早くから子供達と共に小屋の前に出てニコニコして居た。二疋の山羊も涼しい朝風の中を嬉し相に頭を振りながら待つて居た。そこへ辨太がやつて來た。爺に近付いて手紙を渡すと、怯える様に直ぐ後へ退つた。そして心配相に後を振り返つたが、忽ち踵を廻らして山へと馳けて行つた。

『祖父さん！ 何んだつて辨ちゃんば恐がつて逃げるの。打たれると思ふのかね』と辨太の様子を見て居た楓が言つた。

『多分左様思つてゐるんだらう。打たれる丈けの値打があるんだから』と爺は答へた。

辨太は馳けて行つたが、角を曲がると、もう下から見えないので、立ち止まつて恐々四邊を見廻して居たが、不意に後の草叢から巡查が自分を追ひ馳けて來た様に思つて躍り上つた。辨太は今疑心暗鬼を生じて居るのである。

楓はおばあさんが來る迄に綺麗にして置かうといふので、小屋の掃除をして居る。久良子は夫れを面白相に眺めて居た。聽て祖母の來る頃となると、子供達は外へ出て小屋の前のベンチに腰を掛け、今か今かと待つた。爺は朝の散歩が終つて、深緑の龍膽を一束持つて歸つた。楓は幾度となくベンチから飛び上がつて一行の姿が見えぬかと下を眺めた。

やがて一行の姿がはつきりと見えた。案内者が先に立つて、祖母は白馬に跨り後から人足が

大きな籠を背負つて来る。段々近づいて、終に小屋へ着いた。祖母は馬上から子供達の姿を眺め、『おやおや。まあ。久良子が、はてな』と祖母はたまげ乍ら馬を下りたが『矢つ張り久良子だ。不思議だねえ。林檎の様に、眞赤にくりくりして、まあ、丸で變つて……』と叫んだ。祖母が久良子の方に近付かうとすると、楓は突然ベンチを離れ、久良子の手を自分の肩に掛けさせて、二人は濟まして向ふへ歩き出した。祖母は始めは何をするのかと氣遣つたが、實に不思議！ 久良子はかへてなら楓と並んで姿勢も良く歩いて行つてグルリと此方へ戻つて來た。二人とも元氣も良い色艶も良い。祖母は二人の方へ馳け寄つて、笑つたり叫んだり、久良子を抱き、楓を抱き又久良子を抱いた。嬉しさに言葉も出無かつたが、ベンチの傍で愉快相に此の様子を見て居る爺の姿が眼に入ると、祖母は久良子の手を採つて叫び續け乍らベンチの處へ來て、久良子の手を離し老人の兩手を握つた。

『ほんとうに、ほんとうに、何んと御禮を申して良いやら。御蔭様で、眞個に御蔭……』

『いや、私の力斗りでは有りませんよ。神様の下さる日光と山の空氣とで……』微笑しな

がら爺が言葉を挿んだ。

『左様よ、夫れから白の御乳もあるわ』と久良子が附け足した。

『祖母さん、私山羊の御乳が吞めるのよ、大好き。』

『左様でせう、其の頬の工合で解りますよ、』と祖母は笑ひ乍ら、『見違へる様になりました。全體に

丸く大きくなつて、丈も高くなつたし、まあ祖母さんには眞個と思へないよ。直ぐ巴里へ電報を打

つて父に直ぐ来る様に言ひませう。何んなに喜ぶか知れません。人足は歸つて終ひましたか。』

『ええ歸しました。然し御急ぎなら山羊飼が居ますから呼びませう』と爺は答へて、少し歩み出て

指を唇へ當てて吹くと、鋭い音が四邊に響き渡つた。

辨太は之が耳に入ると蒼い顔をして下りて來た。てつきり調べられる事と覺悟してやつて來た。

爺は祖母が書いた一葉の書付を渡し、直ぐ村へ持つて行つて局長に渡す様、後から料金を拂ふからと言つた。一時に種々な事を頼むと辨太が忘れるからである。辨太は書付を手にして出掛けたが、調べられもせず巡査も來て居ないので、そつと胸を撫でた。

一同は小屋の前の卓子を取り圍んで種々の話を始めた。第一に爺が久良子に歩く稽古をさせた事。牧場へ登つた事。椅子が風で吹き飛ばされた事。夫れから夫れと話が盡きない。聞く度毎に祖母は、

『まあ、夢の様ですれ。こんなに丈夫になつて』と感心斗りして居た。久良子と楓とは計畫通

り祖母そぼを驚おどろかしたので大おほいに得意とくいであつた。

本間ほんまの主人しゆじんは巴里パリの用務ようむも終をはつたので、暫しばらく會あはね娘むすめが見度みだいと、母ははには知らせず突然とつぜん行つて驚おどろかせる積つもりで、汽車きしやで麓ふもとの街まちまで來たが、少し前すこしまへに母ははは山やまへ出掛でかけたとの事ことで、直すぐ様さま後あとを追おふて馬車ばしやで村むらまで行ゆき、そこから徒歩とほで登のぼつて行いつた。其その内うちに岐路わかれみちへ出たので何れいづを上のぼつて良よいか一寸迷まよつた。聞きこゆるものは松風まつかぜと鳥とりの歌聲うたごゑ、人氣ひとけもない山やまの中なかで尋たづねる事ことも出來ず暫しばし立ち止どまつて休やすんで居ゐた。

折柄山をりからやまを下くだりて來るものがある。それは書付かきつけてを手にしてひた走はしりに走はしり下くだりてくる辨太べんたであつた。近付ちかづいて來たので本間ほんまが聲こゑを掛かけると、辨太べんたは仰天げんてんして横よこの方はうへ身みを反そらし、片足かたあしを前まへに片足かたあしをあとへ引ひいて逃にげ腰こしをした。

「君！元氣がいゝね」と本間は話し掛けた。『爺さんの山小屋へ行くのは之の途で良いかね。楓と云ふ兒の居る。フランクフルトから客の來て居る。』辨太は『あつ』と叫ぶと遮二無二馳け出し、亡つたり、麒麟斗をしたり、まるで先日椅子の様に無暗と轉がりながら落ちた。然し辨太は椅子の様に粉々にならなくて幸ひだったが、其代り書付けの方は滅茶滅茶になつて終つた。

『何んて怯病な兒だらう。』本間は見馴れぬ自分の姿に驚いたのだと思つたので、左様言ひ乍ら暫らく辨太の馳け下りて行くのを見て居たが、聽てまた歩き始めた。

辨太は尙麒麟斗を繰り返へして居た。然し夫れは辨太にとつて大した苦痛ではないが、フランクフルトから巡查が來た、今途を訊いたのがそれだと自分で定めて無暗に恐ろしがり、起きつ轉びつ遂に村の近くのとある草叢に打つかつてその中へ轉がり込んで終つた。

『や又落ちて来たな』と突然耳元に聲がした。『人間を轉がして落したのは誰れだい。』左様言つたのは先程から此處で休んで居た麵麴屋であつた。先日の椅子の様に辨太が上から轉けつ覆びつ馳けて居たのを見て戯談を言つたのであつた。然し夫れを聞くと辨太は飛び起きた。此の麵麴屋は自分の椅子を落したのを知つて居るんだと思ふと、後にも見ずに又山へ馳け登つた。出来れば家へ歸つて寢床へ潜り込んで匿れ度いのだが、牧場には山羊が残してあるし、直ぐ歸つて來いと爺に言はれて居るので夫れも出来ぬ。辨太には爺の言ふ事は負けないのである。何うしても牧場へ行かねばならない。此の儘逃げられない。仕方なしに跛を引き、唸り乍ら上へと登つて行つた。

本間は幸ひ途を誤らずに、辨太に誤つて間も無く、第一の小屋へ着いたので、更に勇氣を鼓して攀ち登つたが、暫らくして目指す小屋が樅の樹の下に姿を現はした。本間は大喜びで、早く行つて

娘を驚かせやうと思つたが、實は先方にも驚かせる事が待つて居て御父様の方があべこべに驚か
させるとは夢にも思は無かつた。愈々登り切ると、小屋から此方へ来る二人の姿が見えた。丈の
高い金色の髪の毛の、菖薇色の顔をした一人の女の兒が楓の肩に寄り掛りながら來た。本間は立ち止
まつた。立ち止まつて近付く子供達を見詰めたが、我知らず涙が溢れて來た。何を思ひ出したので
あらう。久良子の母そつくりの姿が眼の前に見えたのである。白面金髪の亡き妻の姿其儘である。
本間は夢だか現だか解らない。

『御父様！ 私よ！』と久良子は聲を掛けた。其の顔は輝いて居る。『途違へて？』
本間は走せ寄つて娘を兩手に抱へた。

『見違へたとも、途違へたとも、之れは一體何うした事かい。』若しや夢では無いかと後退りをして

またみ直して又見直し、『確かに久良子かい、え？』と念を推して抱へては又見直して居た。其の中に祖母も出て来た。

『不意に來たので驚きましたが、此方にも驚かせる事が待つて居ましたよ』と老母は喜んで居る。

『まあ彼方へ行つて爺さんに遇つて下さい。大恩人なんですから』

『え、是非………楓ちゃんも暫らく』と本間は楓の手を握つて、

『元氣が良くつて結構、結構。』

かへて本間が優しくして呉れたから嬉しくて嬉しくて堪らなかつた。祖母は本間を爺に紹介すると本間は裏心から溢るる感謝を頻りに述べて居た。祖母は子供達の居る樅の下へ行くと珍らしい龍膽の花束が置いてある。

『まあ何といふ美しい花でせう。何よりの御馳走ですれ、誰れが持つて來ました。楓ちゃんかれ。』
『否、私ぢや無いけど私誰だか知つてゐるわ。』

『牧場に咲いてるのよ、祖母さん』と久良子が言ふ。『誰が持つて來たか當てて御覽なさい。今朝祖母さんに見せるつて持つて來たのよ。』

丁度其の時樅の後に微かな音がした。それは辨太であつた。辨太は山へ戻つて來たが、小屋の前に、爺と今一人の人が話をして居るので廻はり途をして樅の後から上へ登らうとそつと通つたのであるが、祖母は眼早く見付けて、さては此の兒が花束を持つて來たのだらうと思ひ、何か御褒美を遣らうと、

『兄さん！ 此方へ御出でなさい、遠慮しないで』と大きな聲で樹の後をすかし乍ら呼んだ。呼び

と止められて、辨太は石の様に立ち竦んだ。逃げ出す勇氣も無い。『もう駄目だ』と覺悟して眞つ青になつて、怖々樹の蔭から出て來た。

『もつと此方へ御出でなさい。』祖母は勵ます積りで言つた。

『之れは御前さんかね？』

辨太は頭を擧げ得ない。従つて祖母が指した物も見ない。爺は小屋の隅の處に居るし、傍には最も恐ろしい人（フランクフルトから來た巡査だと辨太は思つてゐる）が居るので、ぶるぶる震へながら辛つと

『うむ』といった。

『何うしてそんなに恐がるんですね』と祖母が訊いた。

『だつて……だつて……壊れちまつて直らないんだもの……』

辛つと之れ丈け言つたが、足がふらついて倒れ相だ。祖母は小屋の隅へ行つて、

『爺さん、あの子は何うかして居ますか』と同情する様に尋ねた。

『いいや左様ぢや無いんです』と爺は受合ふ様に、『あれは椅子を吹き飛ばした風の神の本尊なんです。罰が来やしないかと、ビクビクして居るのですよ』

祖母には一寸信ぜられなかつた。辨太の様子がそんな悪い事をするとも思へない、又椅子を壊す理由も無いと思つた。爺は其時から辨太の仕業と睨んで居たといふのは、始めての日に、辨太が久良子を睨めた様子なぞから察して爺は辨太に見當を付けたのであつた。一部始終の事を祖母に話して聞かせた。祖母は大層同情して、

「爺さんもう叱りますまいよ。無理もないんですから。知らぬ人が来て唯一の友達の楓ちゃんを永
 い間占領して居て、獨りで淋しかつたからで無理はありませんよ。腹立ちまぎれに愚な事をやつ
 たんでせう。夫れを此方が一緒になつて怒れば、矢つ張り愚かですから」と言つて、震へて居る辨
 太の處へ戻つて來た。祖母は縦の樹の下のベンチに腰を掛けて言葉柔かに説き聞かした。

「此方へ御出でなさい御話があるから。怖がらないで良く聞くんですよ。壊す積りで椅子を落した
 のは悪い事です、それは解つてゐるでせう。悪い事をすれば悪報を受けなければならぬ事も解つてゐ
 ませう。其の悪報を受けまいとすれば人に知れない様な苦勞をしなければなりません。然し悪い事
 が知れずに居ると思へば大間違ひです。神様はみんな見て居らつしやるんです。人の心の中には番
 人が居て、平常は眠て居ますが、人が悪い事をするとか神様が番人を起しなさるのです。すると其番

人にんは棘とげ針はりで始終しじう其そのの人ひとを突つくのです、『知しれるぞよ、罰ばつを受うけるぞよ』と言いつて苦くるしめるのです。それだから怖こはくて一寸ちよつとも安心あんしんが出来できません。辨べんちゃんも矢やつ張はり左様さうでしよ。』
全まづく言いはれる通とほりであるから、辨べん太たは後悔こうかいの様さまで黙頭もくづいた。

『夫それから悪わるい事ことをして思おもふ通とほりになりません』と祖母そぼは言葉ことばを續つけ、『あなただが椅子いすを壊こはしたら相あひて手が困こまるだらうと思おもつたでせう。處ところが少すこしも困こまら無ないで、久良子くらこは一生しやうけんめい懸命けんめいに歩あるいたために反かへつて歩あるける様やうになりました。譯わかりましたかね。だから悪わるい事ことをして神様かみさまが夫それを良よい法はふに變かへて御終おしまひなさるから、悪わるい人ひとは骨折損こつそんで苦くるしみが増ます斗はかりで、思おもふ通とほりにはならないのです。良よく解わかりましたね。之これから後のちも悪わるい事ことをする氣きが出でたら、心こころの中なかに番人ばんにんが棘とげ針はりを持もつて待まつて居ゐる事ことを忘わすれてはなりませんよ。御解おわかりかね？』

『御解り』と辨太は答へた。巡査は居るし何うなるかと思つて居るので言はれる事が骨身に浸みる。

『結構です。譯れば夫れで良ござんす』と祖母は結末を付けた。

『私達の來た記念に何か上げませう。何が欲しいね。言つて御覽ん！ 何が欲しいね。』

辨太は顔を舉げ、丸い眼を見張つて祖母を見た。恐い恐いと思つて矢先へ欲しい物を呉れると

いふので、辨太は面喰つて終つた。

『もう之れから悪い事はしないといふ記念に、ね、譯つたでせう』

罰されずに済むといふ事がやつと解つた。巡査が來て居ても此の人が許して呉れるのだと譯ると、

急に重い物が取り去られた様な心持ちがして悪い事は皆自白し度くなつた。

『書付も失した！』と言つた。祖母は一寸考へたが成程と思ひ、

『良く言ひました。悪い事をしたら何時でも直ぐに謝らなくては不可ません。さ何が欲しいね。』
斯う云はれて見ると辨太の頭は混亂して終つた。何を貰はふ。街へ行く度に立つて見るものもある。
とても買へぬと諦めてる物も澤山ある。五錢以上の物を買った事が無いのだから欲しいと思ふもの
は數限りなくある。其の中でも赤い色の呼子。あれで山羊を呼んだら具合が良からうと思ふのもあ
る。圓柄の小刀も欲しい。此の二つの中何らにしよう。決し兼ねて居たが、突然明案が浮んだ。
『十錢の白銅!』と思ひ切つて言つた。

『よござんす。さ此處へあらつしやい』祖母は一寸笑つたが、財布から一圓銀貨を出し、其の上
へ十錢の白銅を二つ載せて渡した。

『良く計算して下さい。毎月十錢づゝ使へば一年間ありますから』

辨太は自分の手の上に載つた金を見て今更の様に驚いて居たが、『有難う』と言ふと、葦駄天の様に馳け出した。同じ馳け出すのでも先つきの様に怖くて馳けるのではない。怒りも恐れも悉く消えて、おまけに澤山の金を貰つたのだから嬉しくて溜らぬので、馳け出したのである。

晝食が済んだ一同が四方八方の話をして居た時に久良子が昔に變はる元氣な様子で父に言つた。

『爺さんが、夫りやあ種々な事をして下さつたのよ、毎日毎日。私一生忘れないわ。何か恩返し

しがしたいわね。御父様！』

『わしもし度いと思つてゐるが、何うしたら出来るだらうな。』本間は左様言つて祖母の隣に座して頻りに祖母と話をして居る爺の傍へ行き、

『實際今日が日まで氣の晴れた事が有りませんでしたよ。幾ら金があつたつて何うする事も出来な

い娘の姿を見ろと、富も寶も何になると、能く思ひました。それがあなたの御蔭で一人前の人間になれたと思ふと、萬分の一の恩報じをしたいのですが、何うでせう。何か御望み下さいますんでせうか。出来る事なら何んでもしますが……」

『いや本間さん、あなたの娘さんが私の處で丈夫になつて下さつたと云ふ夫れ丈けでもう充分の喜びですよ。此の上何も望みはありません。それに私と楓と此處に暮して行くには別段不足もありませんから……あゝ一つあります。是丈けが氣になつてゐる事が有ります。』

『何んです何んです。どうか言つて下さい。何卒』と本間は熱心に訊く。

『私はもう老年ですから』と爺は言葉を續け、『永い事もありますまいが私でも居なくなると身寄りも無い此の兒が獨りぼつちになる譯なんです、若し左様云ふ場合にあなたが引取つて世話をして』

下されば、私に取つて斯んな安心な事は無いのですが……………」

『夫りやもう仰るまでも無い事です』と本間は口を入れ、『此の兒は他人とは思ひません。母も左様思つて居るんです。そんな時には私の娘分にして決して他人の手には渡しません、本間が引受けます。私の友人の醫者も、あなたの御勧めで當地に開業する相ですから、まあ保護者が二人ある譯で、其の邊の事は御心配ありません。』

『左様ですとも！』と祖母は受合ふ様に言つて、爺の手を頻りに振り、子息の言葉に裏書きをした。『楓ちゃん御願も聞きませう。何か欲しい物があるかね。』と傍に立つてゐる楓を引き寄せながら祖母が尋ねた。

『有るの』と楓は喜んで答へる。

『何です、言つて御覽なさい。何が欲しいね。』

『私ね、フランクフルトで寝た寝臺が欲しいの。辨ちやんの祖母さんばね、枕が低くつて良く寝られないんだつて言ふから遣りたいわ』

楓は兼ての願を遠慮なしに發表した。

『良く言ひました。神様は私達に澤山良い物を下すつてゐるのだから、貧しい人の事を考へて遣らねばなりません。よござんす。直ぐに電報を打つて取り寄せませう。古井さんに言つてやれば二日で届きます。』

楓は喜んで祖母の周圍を躍り廻つたが急に立ち止まり、

『辨ちやんとこへ行き度くなつた！』

『随分永く行かないから』と言つた。一つには此の喜びの音づ

れを一刻も早く知らせ度いのである。

『何だよ楓！ 御客様が居なさるのに、そんな急な事をいつて……』と爺は叱る様に言つたが

祖母は楓の味方をして、

『爺さん、此の兒の言ふのは尤もですよ。淋しがつてゐるでせう。之から皆で一緒に行きませう。多分馬も其の邊に待つてゐるでせうから、何う思ふかね？』と本間に尋ねた。

本間は兼てから母と共に久良子連れて瑞西を少し旅行して見たかつたので、其の旨を語り、自

分は明日久良子連れて母の宿へ行き、そこから旅に出やうと言つた。久良子は急の出發を聞いて嫌に思つたが、父や祖母と一緒に旅行をする事も愉快だし、急に何を考へる餘地も無いので其儘服従した。祖母は楓の手を取つて立ち上がり、

『久良子は如何するね』と一寸氣遣つて、尋ねたが常時の様に爺に支へて貰つて、祖母の後から歩み出したので安心した。本間も一同の後に従いて山を下りた。

祖母は歩き乍ら辨太の祖母の生活、殊に冬の様子などを訊くので、楓は得意になつて、寒さに震へながら辨太の祖母が家の隅に屈んで居る様や、食物の不足な事を物語つた。祖母は非常な興味を以て楓の話の聞いて居たが、其の中に小屋に着いた。

折しも阿母は辨太の着更への襦衣を乾して居たが、一同の下りて來たのを見て、

『御母さん！ 皆が歸つて行きますよ。爺さんが病氣の娘の手を引いて！』

『左様かい』と祖母は吐息をつき、『楓ちゃんも連れて行く様かね。も一遍遇つて置き度いが……』戸がさつと開くと、楓が室の隅へ躍り込み、祖母の頸へかちり付いた。

『お婆さん！ 御婆さん！ フランクフルトから私の寢臺が来るのよ。枕が三つ、蒲團も、二日

経つと来るつて！ おばあさんが言つたわ。』

『有難い方だれえ。楓ちゃんを連れて行つても仕方が無いが永い間ちや困るね』と悲し相に老婆が言つた。

『お婆さん！ 何んで連れて行くものですか』優しい聲と共に老婆の手を握り締めたのは久良子の祖母であつた。先程から二人の話を聞いて居たので左様言つたのである。

『そんな事は有りませんよ。楓さんはお婆さんと此處に居るのです。私達は之から歸りますが、又來ます。子供の丈夫になつた記念に之れから毎年訪ねて來ますよ。』

老婆の顔に喜びの顔が見えた。そして無言の感謝を以て本間老夫人の手を幾度も握り、老の眼は

早や涙であつた。楓は老婆の喜ぶ顔を見ると自分も嬉しかつた。

『お婆さん！ 良いわれ、寢臺が来れば！』と楓は老婆の傍に寄り添ふて言ふ。

『神様の御恵ですよ、有難いね。』老婆は深く感謝して居る。『斯んな立派な方々が私見たいな見る影も無い者の爲めに盡して下さるのは神様が私達を御見捨てになつて居ない證據ですよ。』

『あなた！』と本間夫人が『神様の御眼から見れば皆同じ様に貧しい人間ですから御互様です。そればさうと、もう御暇をしませう。來年又御訪ねしますよ』と言つて再び老婆の手を握つたが、老婆は尙も感謝の言葉を續けて居た。

やがて本間は母と連れ立つて麓へ向ひ、爺は久良子を連れて又山へ歸つた。

翌朝になると、久良子は此處を離れるのが名殘惜しく去り兼ねたが、楓は頻りに慰める。

『直きに又夏が来るわよ。今度来る時にはもつと良い景色になるわ。毎日牧場へ一緒に歩いて行けるわ。今よりもつと面白いわ』

本間は約束通り久良子を迎へに来て爺と種々話をして居た。久良子は楓に慰められて氣を取り直し涙を拭いた。

『辨ちゃんにも左様ならなしたいわ。夫れから山羊にも……あゝ白に何か御禮したいわね、丈夫にして呉れたから。』

『譯ないわ』と楓が言ふ。『鹽を遣れば！鹽が大好きよ』

『左様？そんなら歸つたら鹽を澤山送るわ記念に。』

本間の注意で二人は話を止め久良子は祖母の乗った白馬に載つた。もう山崎の必要はなくなつたの

である。楓は坂の降り口で二人の姿の見え無くなる迄手を振つて居た。

寢臺が来た。御蔭で辨太の祖母は段々と氣力を増して来た様であつた。本間の隠居は冬の寒さを思ふて、大きな籠を辨太の家へ送つて来た。中に澤山の防寒具があつて最早や老婆が室の隅で震へ、ひつえうなつて終つた。

醫者は爺の勧めに従つて、舊巢を引き拂ひ、村へ引越して来た。爺と楓とが冬の間に住つて居た例の古い大きな建物を買い入れて、一部は自分の住居とし他は爺と楓との冬の住居にあて、裏の建物に山羊の小屋にした。

醫者と爺とは益々親密の間柄となり、二人で近處を散歩する時なぞの話題は大抵楓の事であ

つた。二人に取つて楓は唯一の楽しみなのである。

『ねえ君！』と或る時、醫者は壁に傍り掛かり乍ら爺に言つた。

『僕は楓を全然我が子の様に思ふから僕の財産は楓に譲らうと思ふよ。さうすれば御互に何時眼を瞑つても楓が不自由なく暮せるから。』

爺はたゞ醫者の手を握つて何も言はなかつたが、顔には無限の喜びが溢れて居た。

丁度其の折に、楓は辨太の家で頻りに話をして居た。辨太と老婆とは、それを熱心に聞いて居た。夏中暫らく來なかつた間の積る話をして居たのであつた。三人は斯うして一緒に話をして居るのが何より嬉しいらしかつた。阿母も傍で喜んで居た。

『楓ちゃん！感謝の讚美歌を一つ讀んで御呉れな。澤山の御恵を頂いたから神様に感謝をしま

せう！」話はなしが終おると御婆おばあさんが左様よう言いつた。

楓 物 語 終

不許複製

大正十四年五月三十日印刷
大正十四年六月十日發行

【定價金貳圓】

譯者

山本憲美

發行者

下關市上田中町一三三二
イー、エヌ、ウアーン

印刷者

東京市京橋區瀧山町五番地
渡邊吉郎

印刷所

東京市京橋區瀧山町五番地
中心堂印刷部

發行所

下關市上田中町一三三二
福音書館

振替口座福岡八八四九番